ごあいさつ

香川県埋蔵文化財センター所長　増田　宏

平成21年度から始まった讃岐国府跡探索事業では、県民共有の文化遺産である讃岐国府跡を地域活性化に役立てようと、県民の方々からボランティア調査員（ミステリーハンター）として参加いただき、共同で讃岐国府の解明に取り組んでまいりました。

ミステリーハンターの取り組みは活発で、これまで地名の聞き取り調査、微地形の記録、水利慣行の調査や発掘調査、まち歩きガイド、関連資料調査など様々な成果を残してまいりました。これらの成果は埋蔵文化財センターの報告書に生かされ、また「参加活動」「まち歩きガイド」の冊子の作成も行われております。

「讃岐の南海道を歩く」のタイトルで刊行します本冊子は、詳細な地形図の上に南海道と条里地割、その地に残された現状を記録したものです。ミステリーハンターが特に積極的に取り組んだ活動で、地図上の復元から現地踏査による検証・現状の写真撮影、地名調査、発掘調査成果との照合を経て、委員による編集会議を重ね、ようやく完成に至りました。

ミステリーハンター皆様のまさに足で稼いだ成果が、県内の古代史に興味を持たれる方々が各地の史跡を訪ね歩く際の道標になれば、ミステリーハンターにとってこの上ない喜びになるだろうと思います。

平成二十九年九月

古代官道としての南海道

8世紀初めに確立した律令国家は、宮都と地方官衙である大宰府・国府との間を迅速・緊密に連絡するため計画的に官道を敷設した。官道は幅10m内外の道幅で、平野部においては直線的な路線をとっていた。さらに、30里（約16km）を基準に駅家（うまや）を設置して、一定数の馬を置いていた。

この官道の経路は、平野に拡がる条里地割から復原できることがある。律令国家によって施工された条里地割は、当時の大開発を伝える記念碑であるが、官道を基準に施工されている場合があり、官道の廃絶後に耕地に取り込まれた結果、正方形の格子目状の条里地割の一部分だけ一辺が10mほど長い長方形の地割が連続することになる。これは余剰帯などと呼ばれ、官道の痕跡を示している。

香川県における条里研究は、高重進氏の研究を嚆矢とする。高重氏の研究により、香川県の条里坪付は東南隅を起点とする千鳥式であることが明らかとなった。また、日野尚志氏は余剰帯を検出することにより、南海道の復原を行った。その後、金田章裕氏により、県内の条里地割の分布、南海道の経路、条里の坪付等が総合的に検討され、現在定説となる復原図が示されている。

以上のことから、香川県内の南海道は、阿波（徳島県）から大坂峠を越えて東かがわ市引田に入り、観音寺市大野原町から伊予（愛媛県）へ県域を東西に抜けていたと考えられ、道中に「引田・松本・三谿（みたに）・河内・甕井（みかい）・柞田（くにた）」の駅が置かれていた。

このように、香川県における条里地割の分布や南海道の経路については、すでに明らかとなっているが、示される復原図が小縮尺であることもあり、現地に臨んでどこに南海道が通っていたのかすぐに分からない問題があった。

ミステリーハンターによる南海道調査

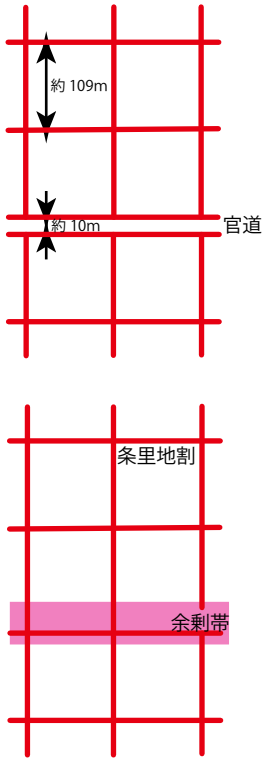
南海道は讃岐国府跡と密接に関連し、その付近を通ることは明らかである。現在のところ2ルートが候補として考えられているが（本文参照）、結論は出ていない。讃岐国府跡の実態解明に南海道の検討は避けて通れないことから、ミステリーハンターは、県内全域の南海道調査に乗り出すこととなった。

平成25年度には事前準備として屋内作業から始めた。ミステリーハンター全員で県内を分担し、空中写真の観察から条里地割を認定し、これを２５００分の１の都市計画図に書き写し、別に作成した１０９m方眼の格子目を描いた半透明の紙を被せることにより余剰帯を検出した。平成26年度は前年度の作業結果を検証するため、実地踏査に臨み、関連遺跡、地形、地名等の情報収集、写真撮影による記録を進めた。その結果により、2か年の調査成果を冊子として残せるよう、分担ごとに解説文の執筆、編集作業を行った。平成28年度には改めてミステリーハンターの中から編集委員を選び、彼らを中心に、冊子として全体を統一するための執筆・編集作業を進めた。

なお、地図には、南海道とは直接の関連は無いが、歴史の道に触れることができるように近世の街道筋も記入している（経路は香川県教育委員会による「歴史の道調査報告書」の成果に拠った）。この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号　平29情使、第４１５号）

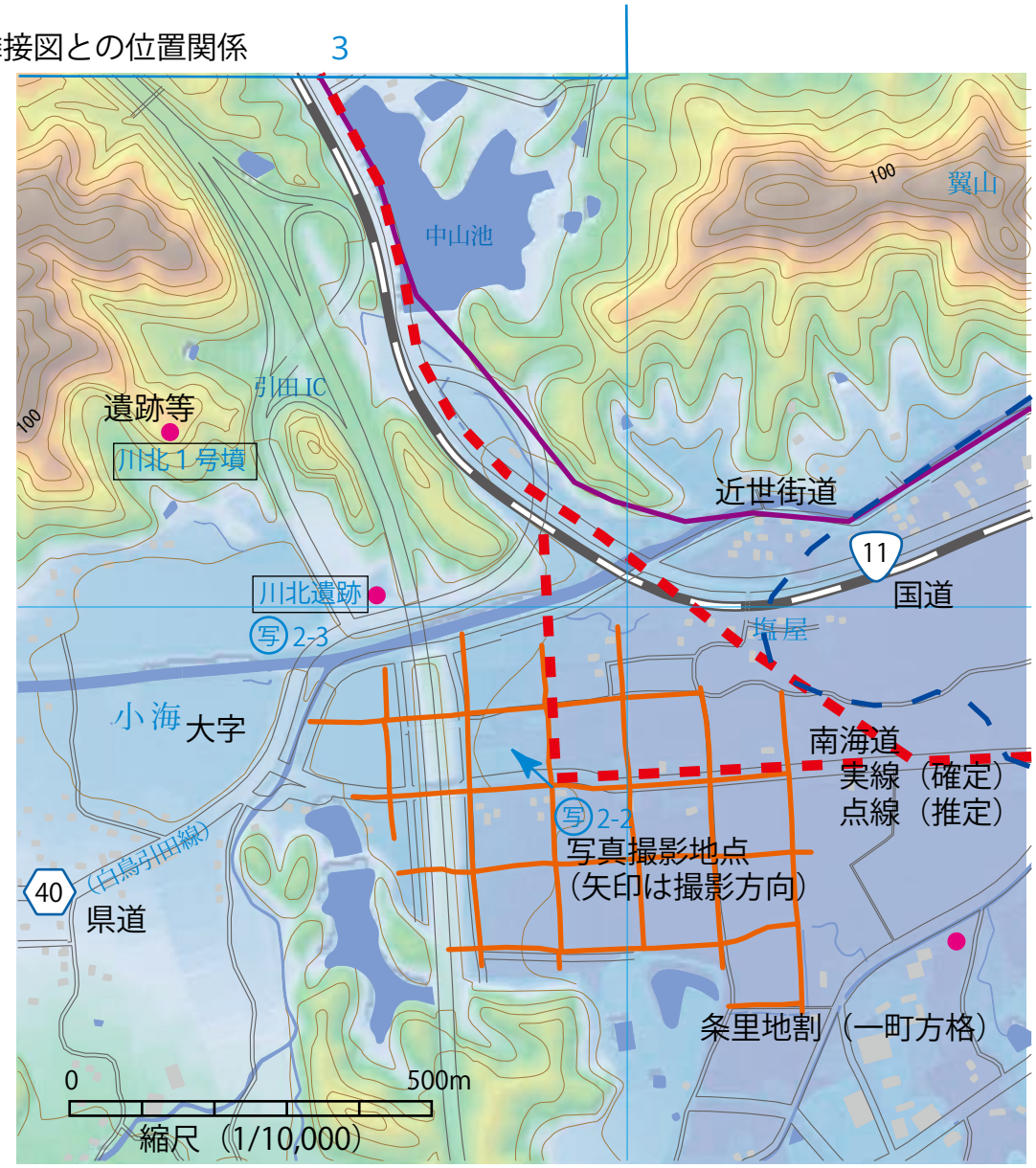
（文献）高重　進　１９６５「讃岐の条里」『広島大学文学部紀要』
日野尚志　１９７８「南海道の駅路　阿波・讃岐・伊予・土佐四国の場合」『歴史地理学紀要』
金田章裕　１９８８「条里と村落生活」香川県編『香川県史　１　原始・古代』四国新聞社

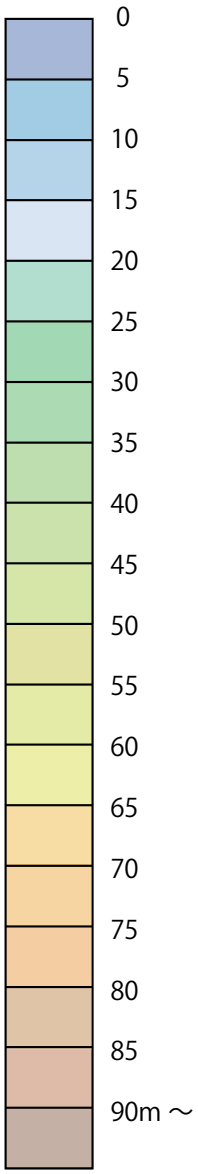
讃岐国の南海道の経路



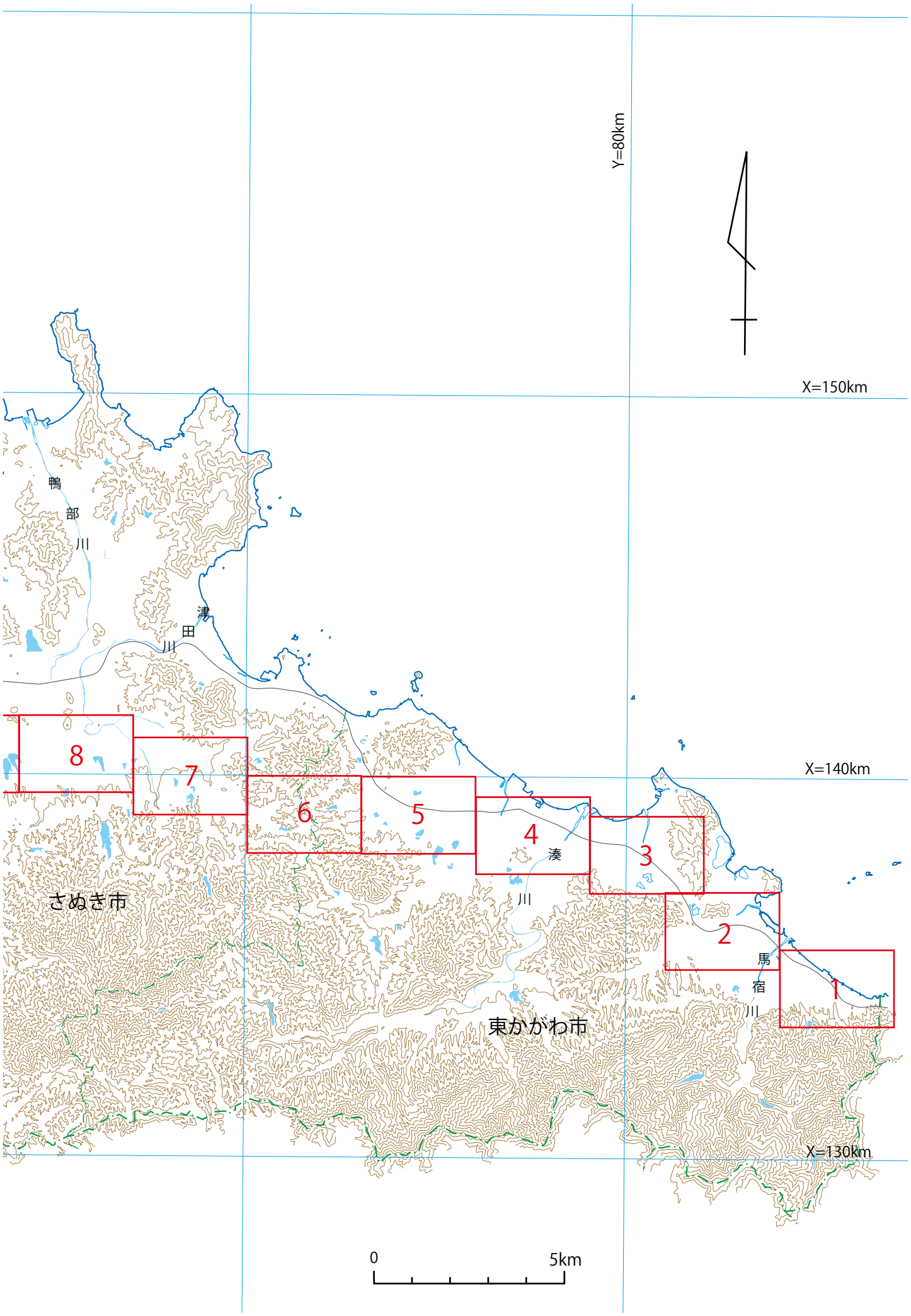
余剰帯

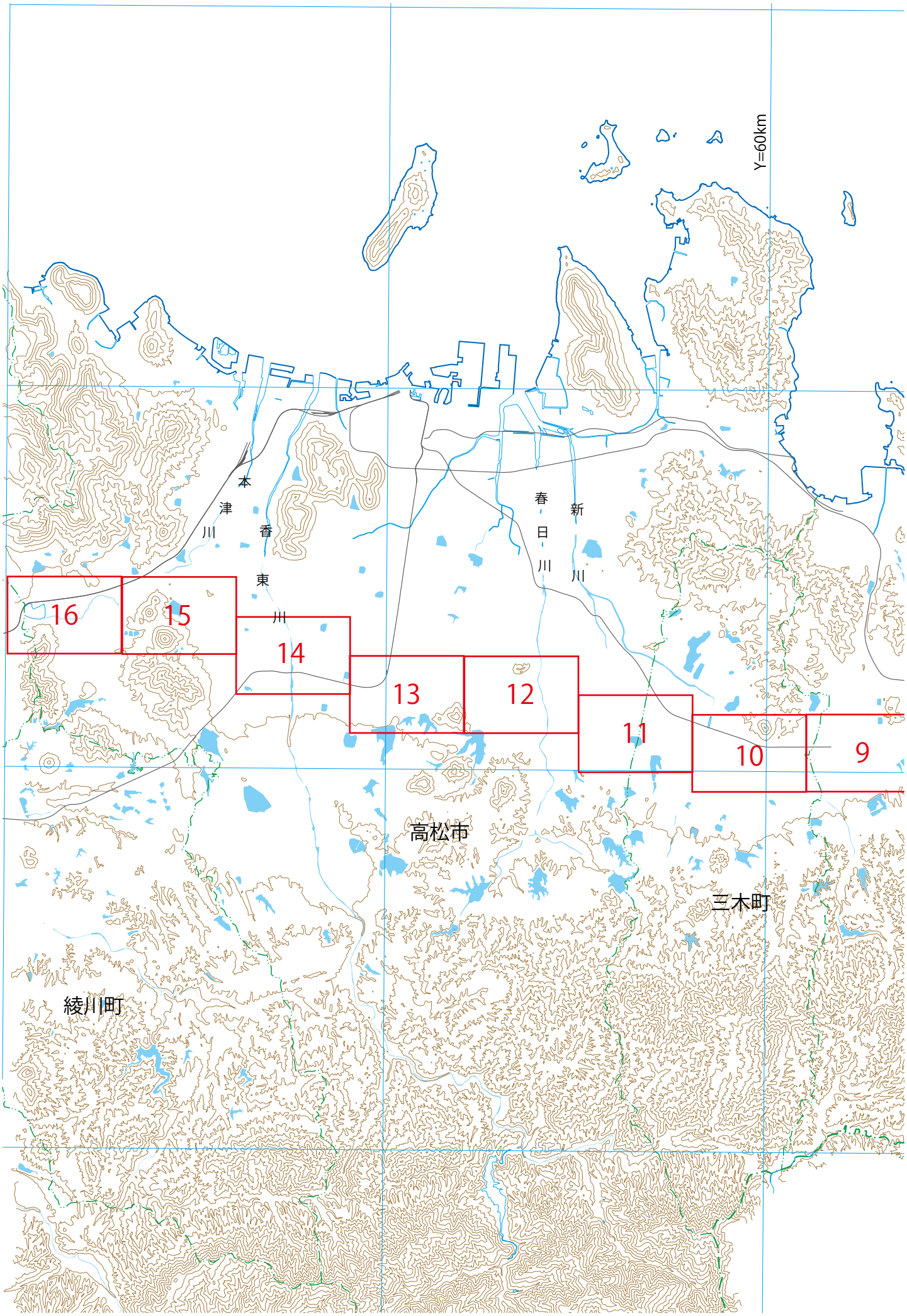
隣接図との位置関係

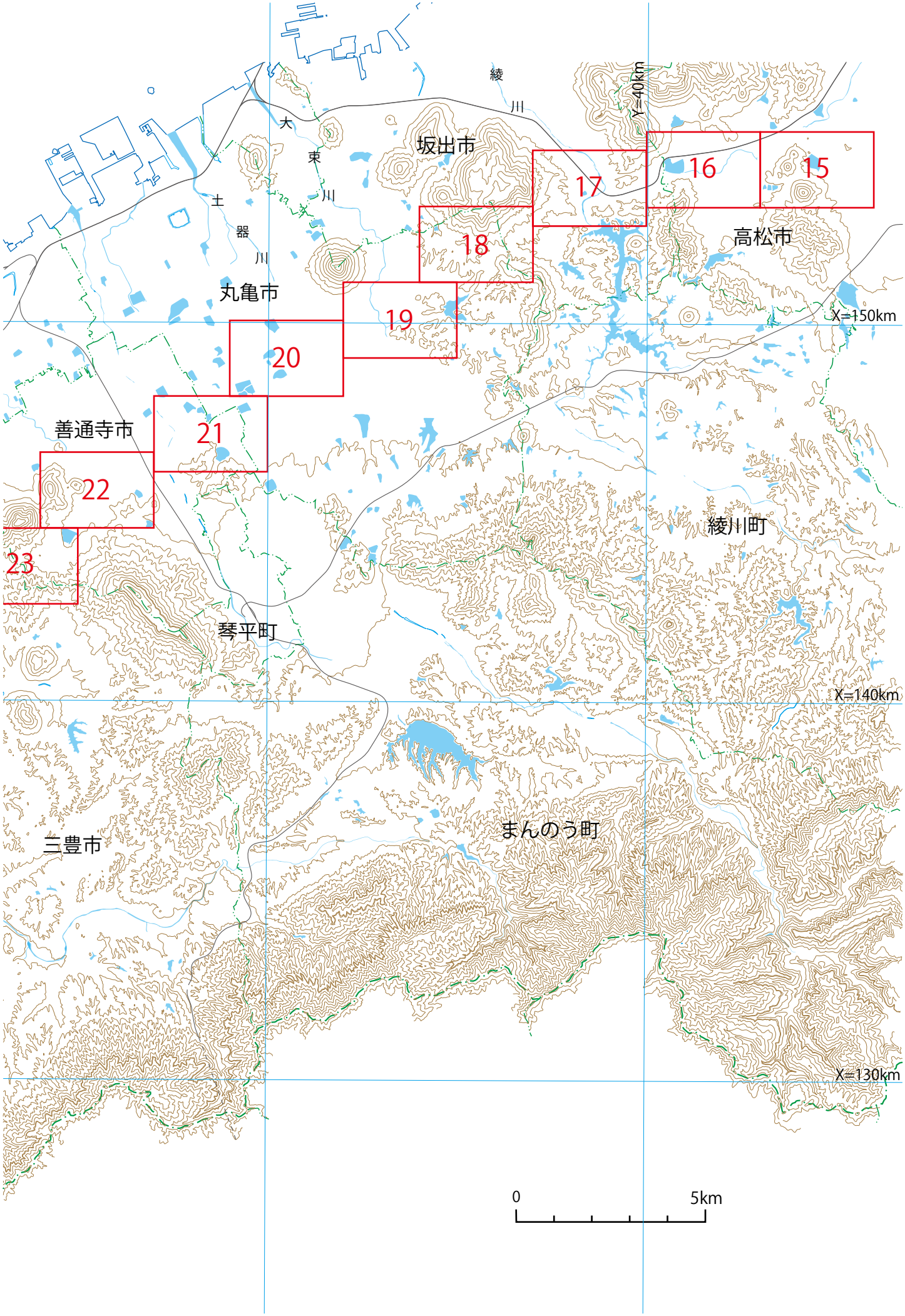


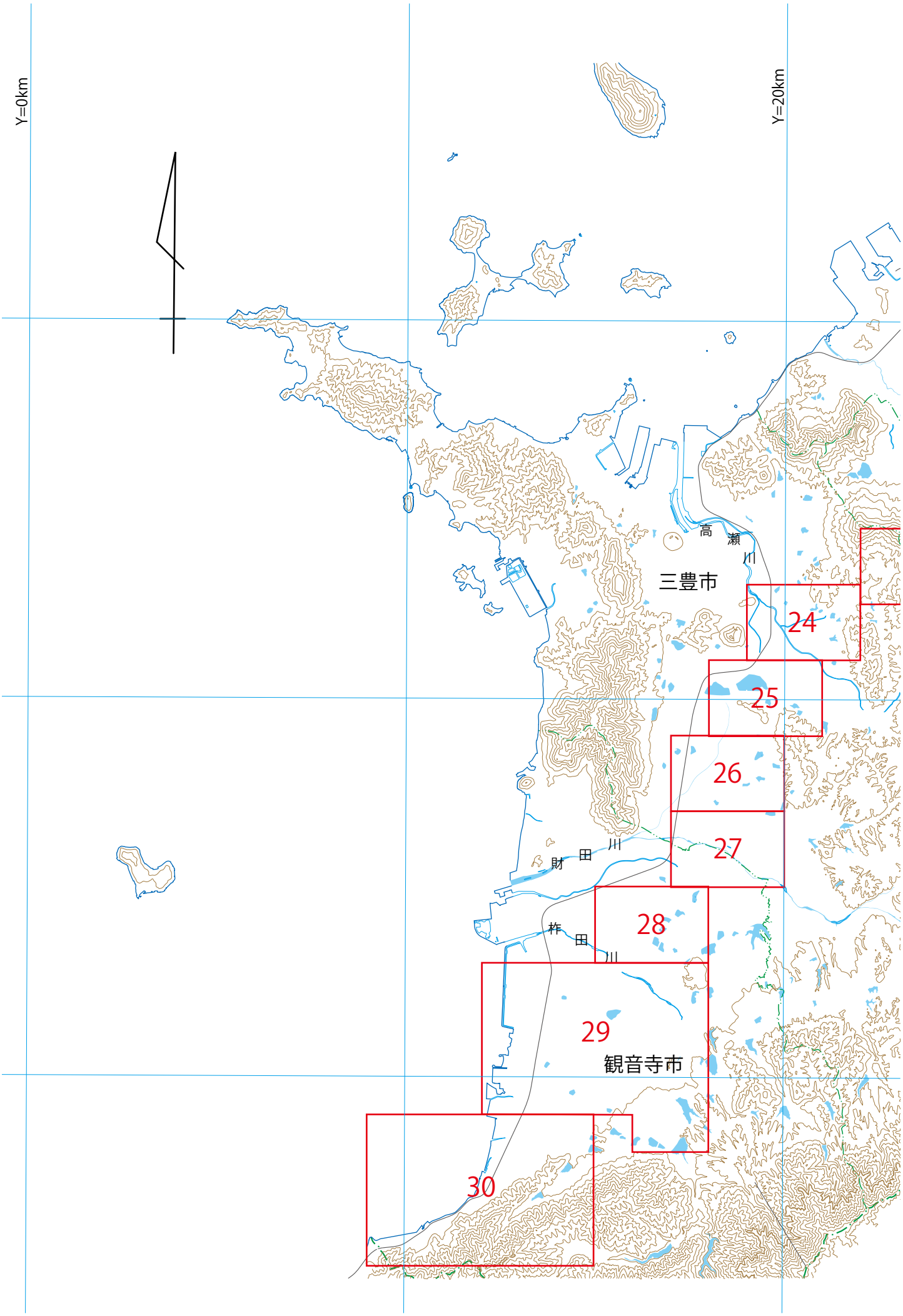


凡　例


Y=80km
X=150km
X=140km
X=130km
鴨
部
川
津
田
川
8
7
6
5
4
3
2
1
湊
川
馬
宿
川
さぬき市
東かがわ市
0
5km


Y=60km
本
津
川
香
東
川
春
日
川
新
川
16
15
14
13
12
11
10
9
高松市
三木町
綾川町


綾
川
大
束
川
土
器
川
坂出市
丸亀市
高松市
善通寺市
綾川町
琴平町
三豊市
まんのう町
15
16
17
18
19
20
21
22
23
Y=40km
X=150km
X=140km
X=130km
0
5km


Y=0km
Y=20km
高
瀬
川
三豊市
24
25
26
27
財
田
川
28
柞
田
川
29
観音寺市
30

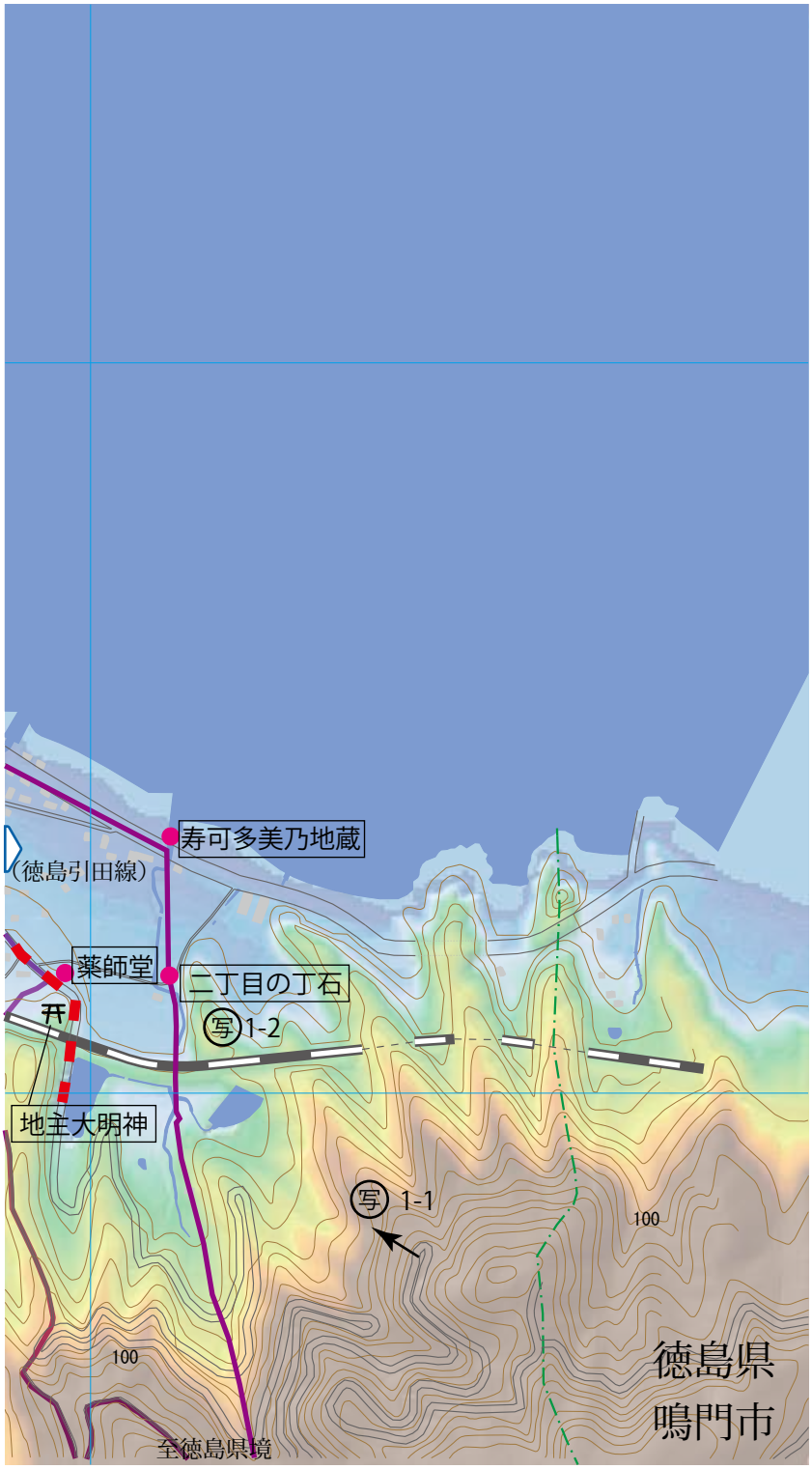


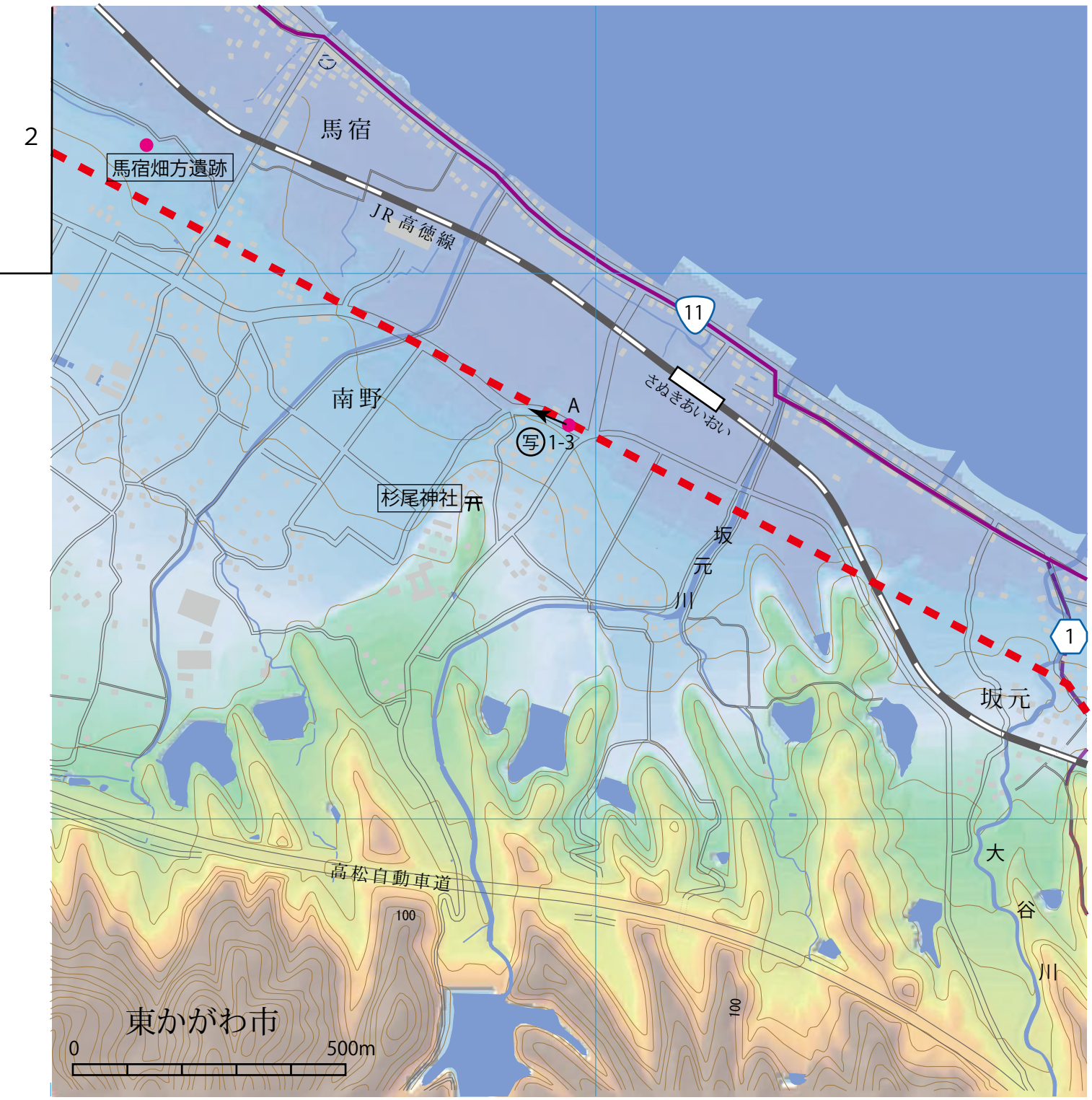
写真 1-1　大坂峠から見た引田
　阿讃山脈から伸びる丘陵や海浜部の砂堆上に形成された町並みの様子がよく分かる。

写真 1-2　二丁目の丁石（寛政年間 1789-1801）
　江戸時代の大坂越の古道には、峠の起点から峠までの数を刻んだ丁石があり、この登り口周辺には数軒の宿があった。

写真 1-3　図中 A 地点付近
　尾根の先端を横切って通る道筋

阿波国郡頭駅を出た南海道は、阿波国との境大坂峠を越えて讃岐国へ入る。かつての大内郡引田郷である。

ほ場整備時の発掘調査では、当時馬宿川の両岸は扇状地を形成する礫層が広がり、耕作には不向きな土地であったようで、本区間には条里地割の跡は検出されない。そのため、坂元からの正確な南海道路線の推定は困難である。近世の讃岐街道は坂元海岸に出て、海沿いを西へと進む。しかし、図中の馬宿畑方（うまやどはたかた）遺跡からは、



奈良時代後半から平安時代初めにかけての多量の製塩土器（焼き塩用）や管状土錘などの漁労関係の遺物が出土しており、古代の海岸線はこの遺跡近くまで内陸に寄っていたと考えられる。そこで南海道は、坂元から、阿讃山脈からのびる丘陵の先端付近を横切りながら次ページの馬宿川の方向へ、さらに条里地割の残る足谷川西へと直線状に伸びていたと推定できる。

『延喜式』記載の引田駅は、地名から馬宿が推定地とされてきた。しかし、前述のように当時この付近は海が入り込んでおり、付近に律令の田令駅田条に定められた小路の駅田2町も確保できないと思われるので、馬宿に引田駅を推定することは困難である。

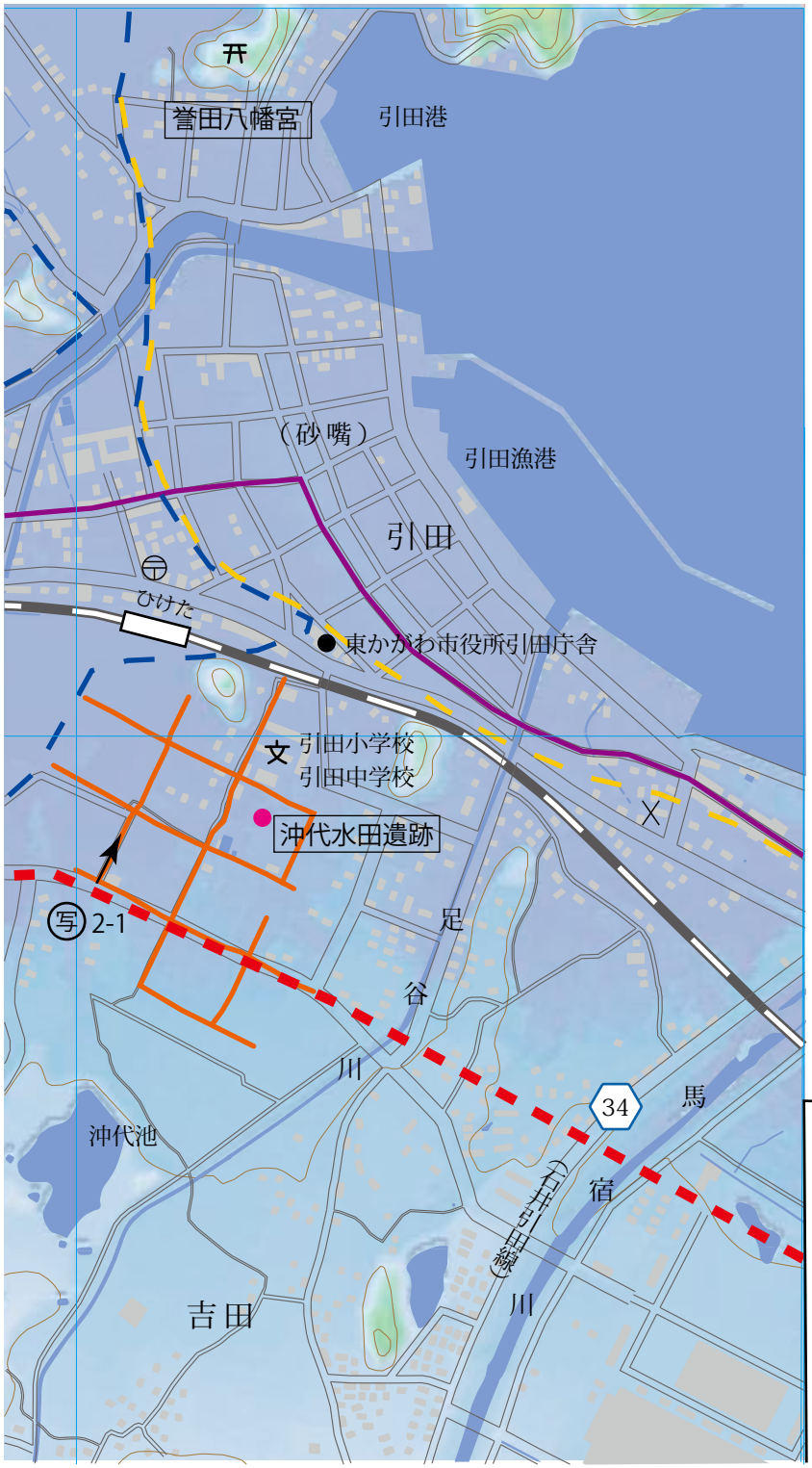


写真 2-1　条里地割の残る沖代の水田
沖代付近には 10 町余りの条里地割が残る。

写真 2-2　条里地割の残る塩屋の水田
背後に川北遺跡、さらに横穴式石室をもつ川北 1 号墳のある丘陵尾根が遠望できる。

引田の市街が立地する砂嘴（黄色の点線）の背後にはかつて潟が形成され、塩屋や小海という地名から分かるように、古代においては海水が流入する状況であった。潟の推定ライン（青の点線）に接するように塩屋と沖代の二箇所に小範囲であるが条里地割が確認できる。図中の沖代水田遺跡からは古墳時代後期の水田跡も検出されており、引田郷の耕地の中心は、本区間にあったと思われる。

ここでは、明確な条里余剰帯は検出できなかったが、馬宿川をこえた南海道は、沖代の条里の方向に沿って進み、潟の端を横切り中山池付近を通過していったと推定される。あるいは、あくまでも直線状を意識して、塩屋の条里地割に沿って西進しさらに北進したとも推測できる。

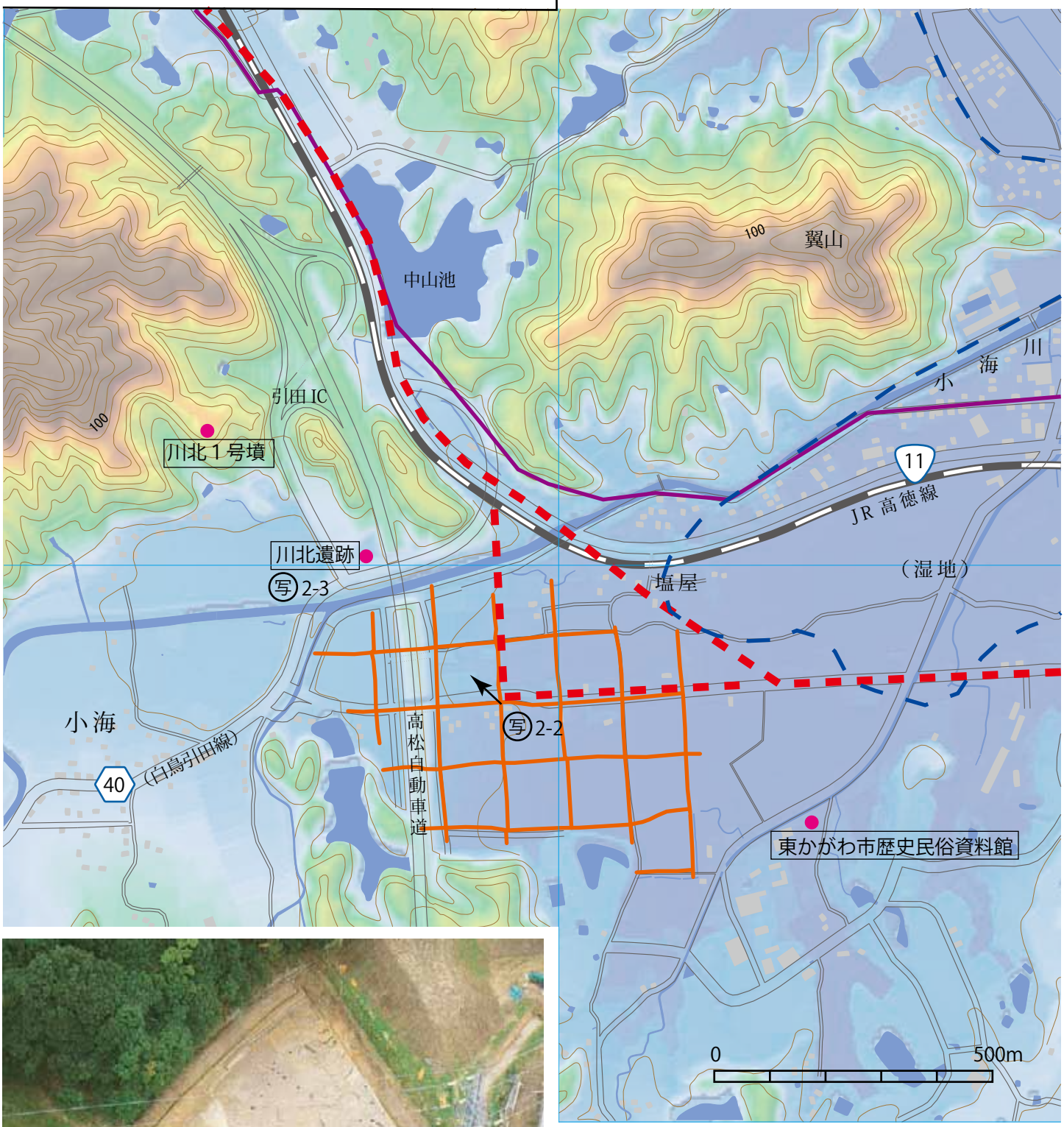


写真 2-3　川北遺跡（発掘時の写真、南から）

奈良時代の遺構面は標高 4.3mに立地。時期の異なる 12 棟の掘立柱建物跡が見つかった。中には建物面積が 40 ㎡近い、大型建物の部類に入るものもあった。

また、川北遺跡からは奈良時代の集落跡が検出され、南に拡がる塩屋の条里地割と方向を同じくする12棟の掘立柱建物が見つかっている。大型建物や、出土例の少ない円面硯（えんめんけん）の破片、緑釉陶器片の出土などから、駅家（うまや）関係遺構の可能性もある。少なくとも引田駅は、条里地割の存在する本区間のどこかにあったのではないだろうか。

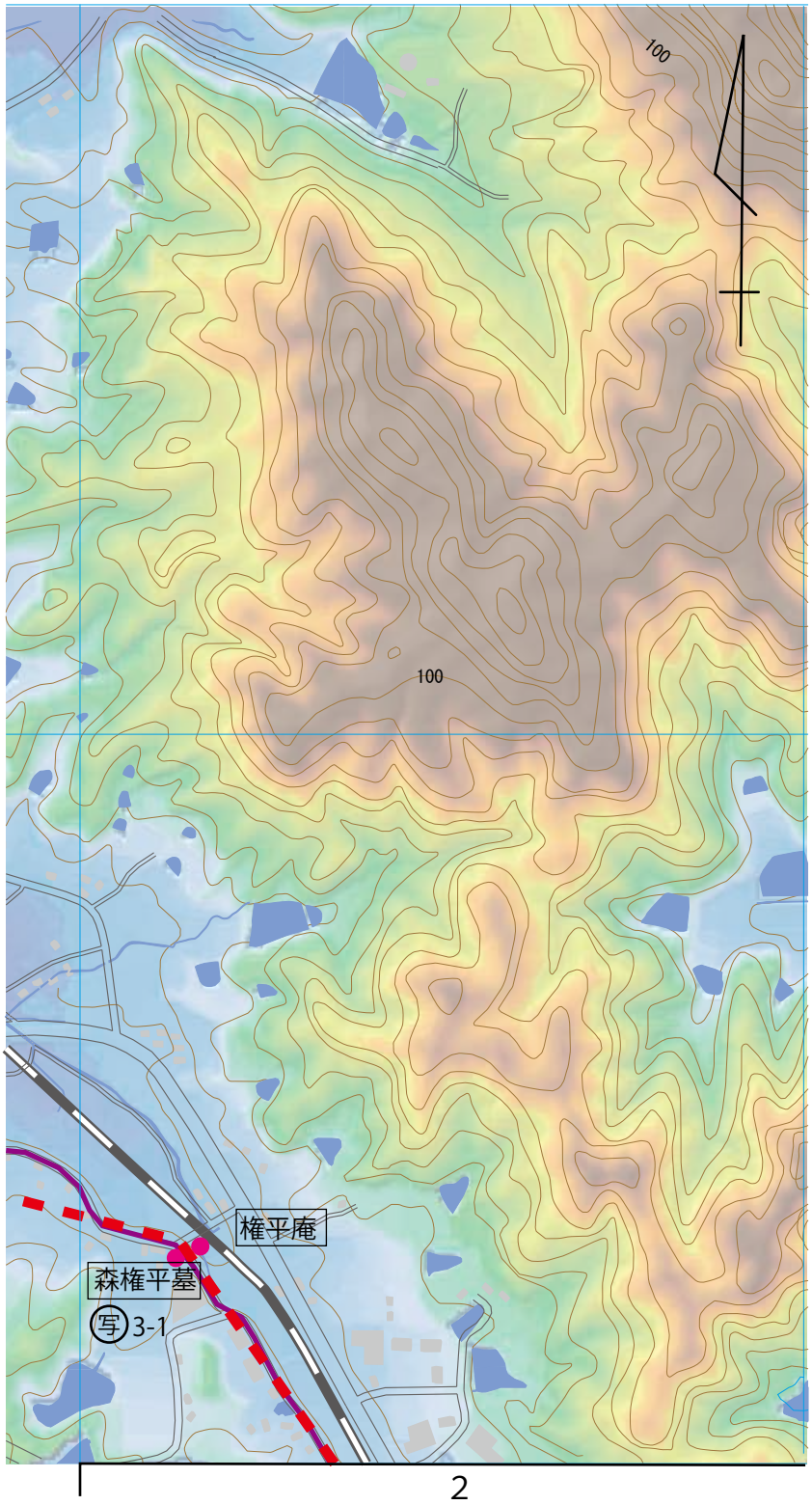
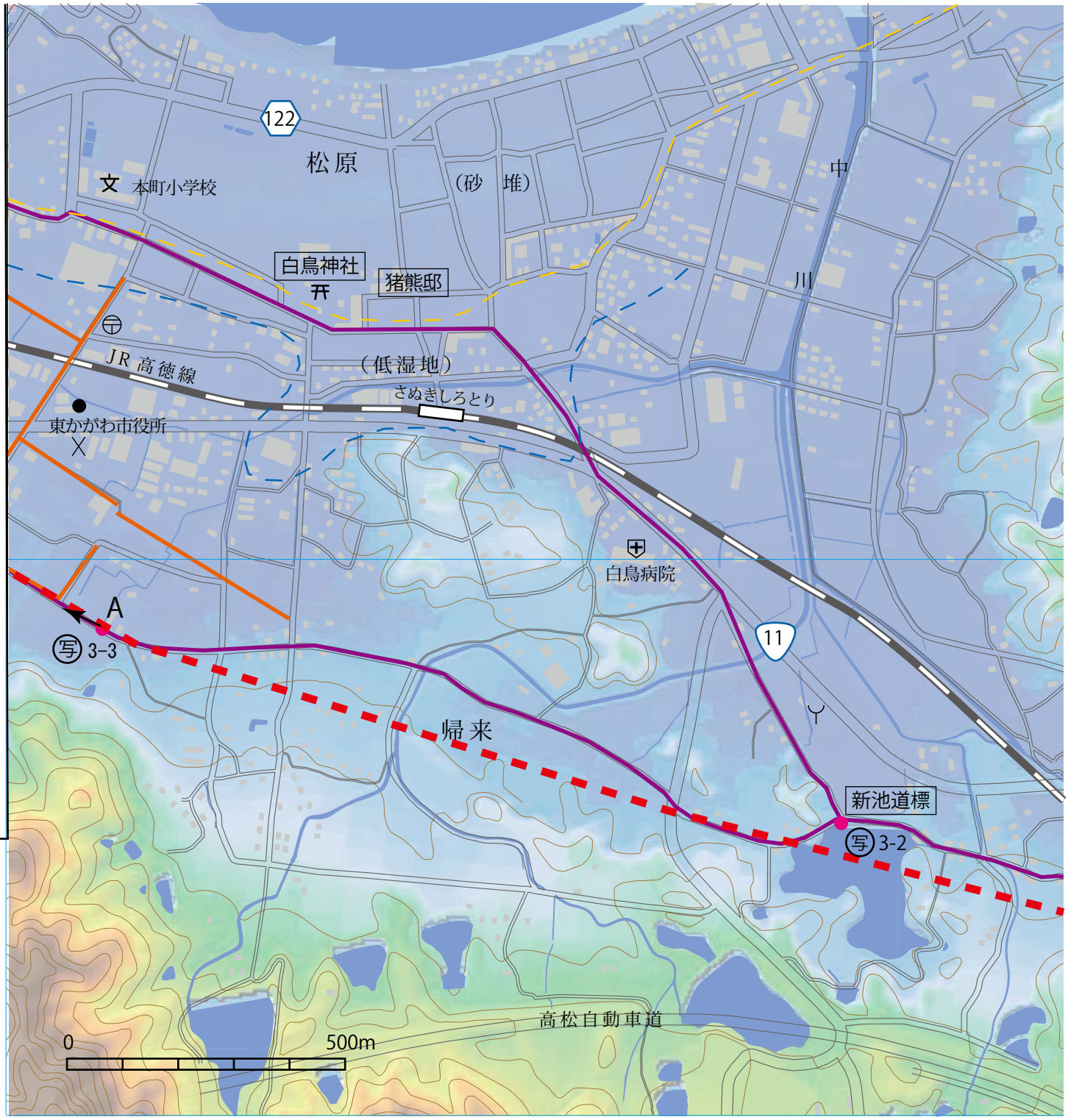


写真 3-1　森権平墓の前の旧道（東かがわ市伊座）
古代の南海道も、この旧道（近世街道）とほぼ同じルートを直線状に通って、引田郷から白鳥郷に入ったと思われる。

写真 3-2　新池の道標（東かがわ市帰来）
「右白とり道」と刻まれた道標（天保 11 年建立）。側に白鳥神社の鳥居が立つ。

写真 3-3　図中 A 地点
条里地割に沿って伸びる道筋

南海道は、中山池側を通り伊座（いざ）の権平庵を経て、湊川下流の平野部に入る。かつての大内郡白鳥郷である。本区間に条里地割はあまり残っていない。白鳥神社の社殿が、初代高松藩主松平頼重によって現在地に造営されたのは、１６６４（寛文４）年のことである。地形的に見ると、白鳥神社のある海岸付近は帯状の砂堆であり、その背後は現在ＪＲ線路や国道11号（海抜約１ｍ）が走っているあたりまで潟や低湿地が広がっていたと思われる（青と黄の点線間）。古代に耕地化できるところはあまり



なかったのだろう。ただ、内陸の湊川東岸に東に約30度傾いた条里地割が一部認められる。

そこで、伊座に至った南海道は、権平庵前を少しすぎた辺りで近世の讃岐街道と分かれて、丘陵の先端を横切りながら内陸を直線状に進み、湊川東岸の条里地割に接したところで、条里の東西線に沿うように方向を変え、湊川へと進んでいったと推定される。図中A付近から、再び南海道と讃岐街道が一致する。

コラム

森　権平

森権平は、羽柴秀吉が四国に派遣した仙石秀久に仕えた武将。1583（天正11）年春、土佐の長曾我部元親は田面に陣を置き、引田城を攻めようとした。仙石秀久は引田中山で迎え討ったが敗れ、引田城に撤退した。森権平は敗走する仙石軍の殿（しんがり）をつとめ、ここ中山口で敵方の稲吉新蔵人と一騎打ちのすえ打ち取られた。享年18歳。

若武者の死を悼み、土地の人々が墓を建て供養したという（『南海通記』）。

墓は五輪塔で、「天正十二年七月十九日」の銘がある。

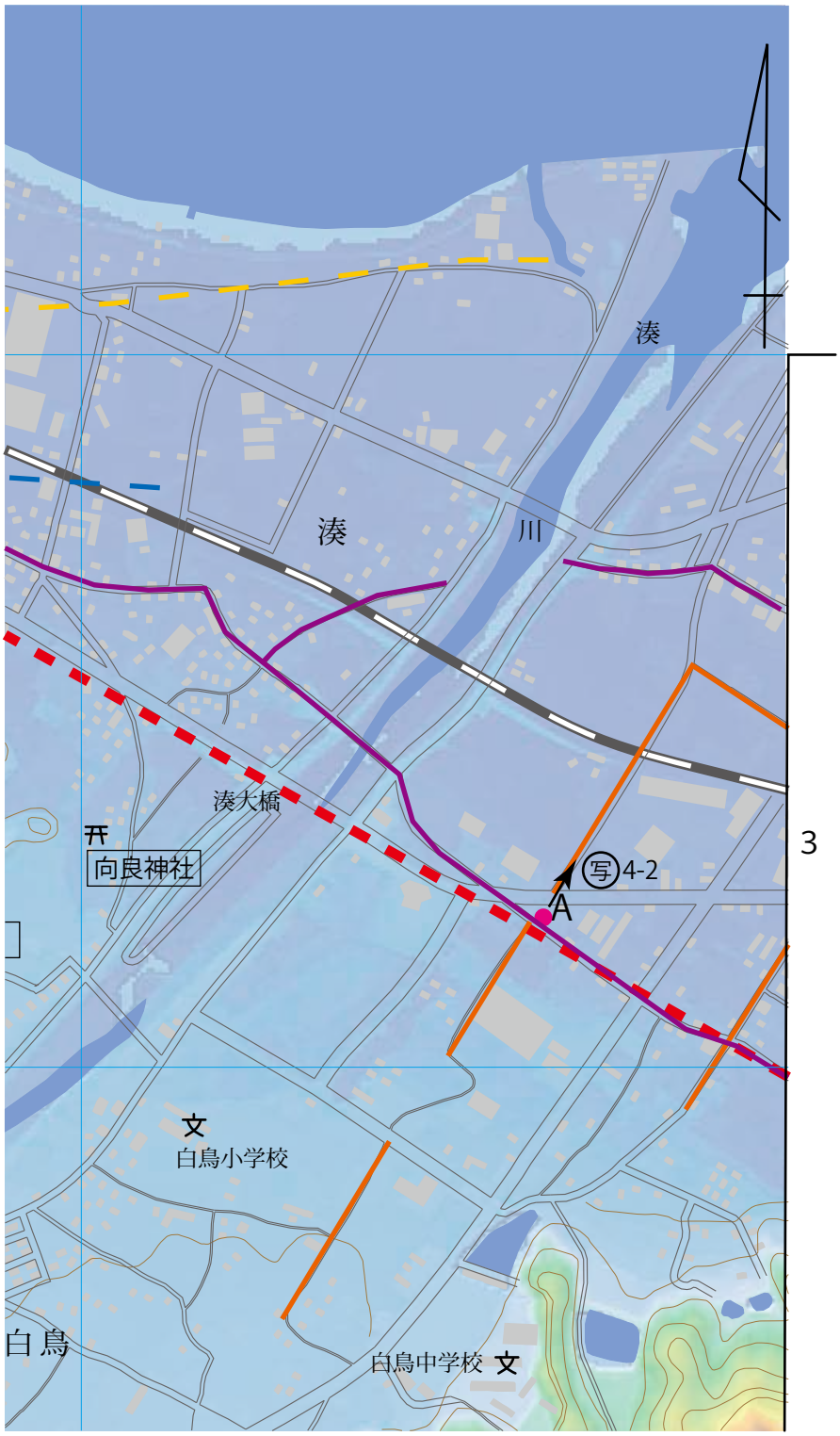


写真 4-1　白鳥廃寺跡塔心礎（東かがわ市湊）
前山丘陵の南側谷部にあり、南海道からは湊川近くで前方左手に南大門や五重塔が仰ぎ見られたことだろう。2013 年度の発掘調査で、背後の丘陵間際で僧坊のような建物跡も確認された。かつては、寺院の至近に湊川の河川域が存在し、湊の機能を持つ寺院であったと考えられる。

写真 4-2　図中 A 付近の様子
条里地割に沿って走る水路と小路

本区間は、与田川両岸に明瞭な条里地割が確認でき、余剰帯（側溝を入れて8～9m幅の道路を推定）も検出できた。ここから推定された南海道を条里に沿って直線状に西に伸ばすと、三本松、丹生（にぶ）を経て南海道の側溝跡が発掘された坪井遺跡に達することから、与田川両岸付近での南海道の路線が確定できた。

与田川両岸の条里地割は真北から約8度東に傾いている。そこで、湊川東岸の条里に沿って西進した南海道は、図中B地点付近で与田川両岸の条里地割の方向に角度を変え、前山丘陵の先端を横切り県立三本松高校の正門付近を直進したと思われる。与田川橋を渡ると南海道と近世の讃岐街道が一致する。

推定南海道の南に、白鳥廃寺跡がある。7世紀に創建され、10世紀頃

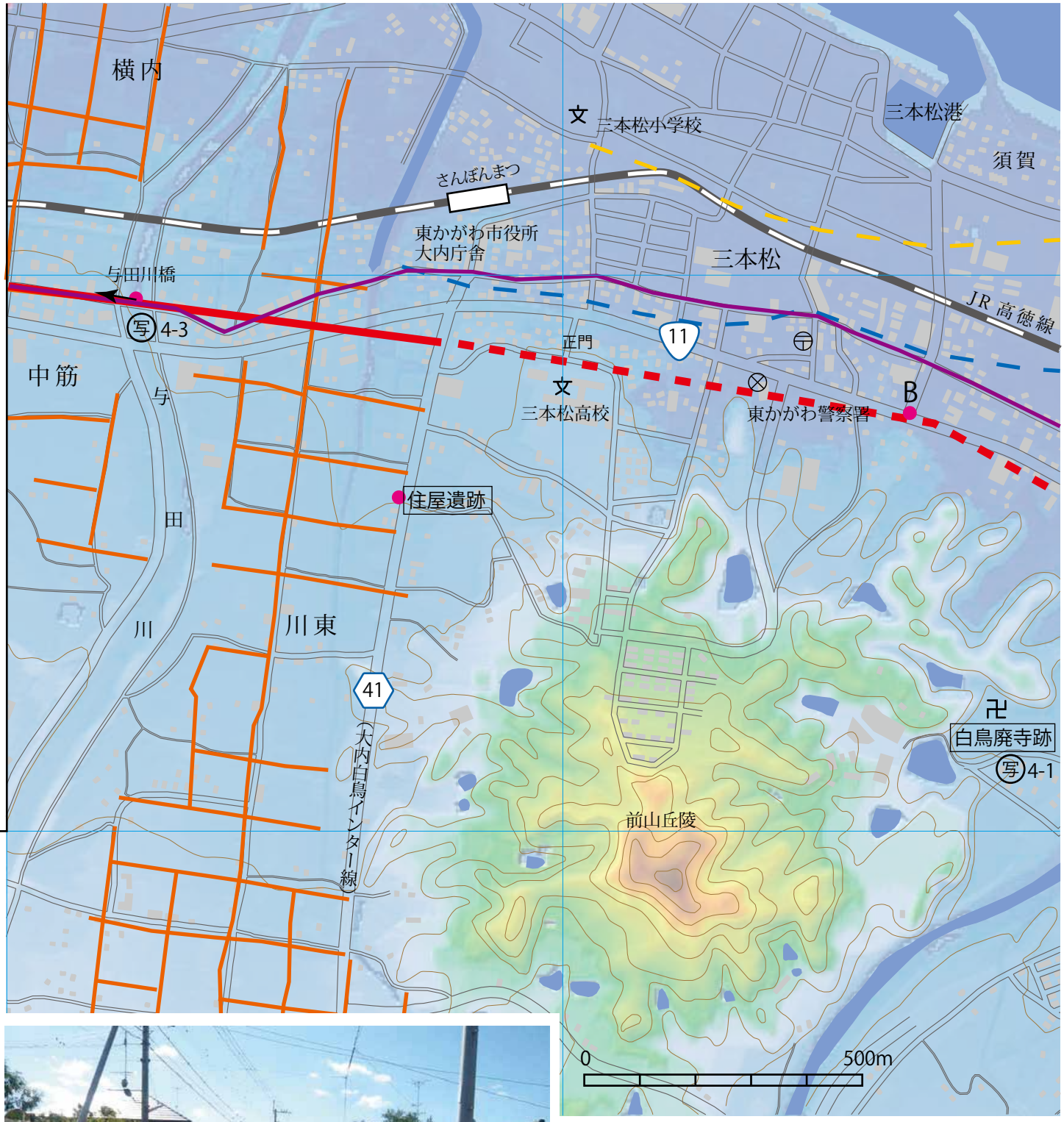


写真 4-3　与田川橋と旧街道（東かがわ市中筋）
　与田川を渡ると、楠谷川までの約 700mは近世街道と南海道が一致して通っている。

まで存続したとされる。讃岐国では南海道想定線上にこのような古代寺院が点在している。また、図中の住屋遺跡からは、奈良時代のものと思われる官人がつける帯金具が出土しており、遺跡付近に郡衙（ぐんが）（郡の役所）があった可能性が指摘されている。

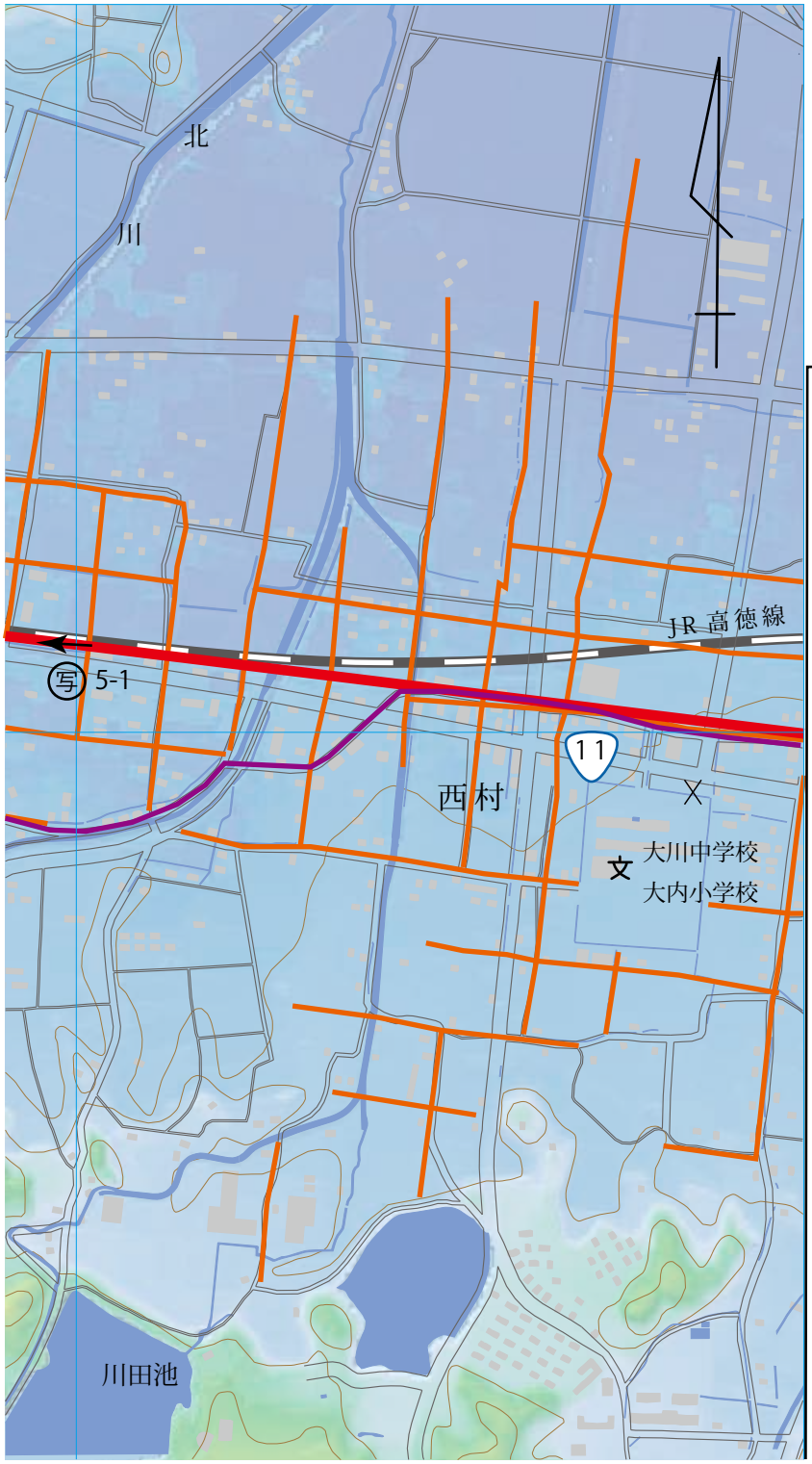


写真 5-1　南海道路線と並行して走る用水路
延長線上には坪井遺跡がある。

写真 5-2　国道と県道の交差点（丹生交差点）
近世の上道（長尾街道）と下道（志度街道）に相当する。ここから南海道は内陸部に入る。

本区間は、与田川と番屋川が運んだ土砂によって、平野が形成され、旧大内郡の中心として栄えたところである。現代も国道と県道が交わる交通の要衝である。平野部には条里地割が明瞭に残っており、国道11号に沿うあたりで幅8～9mの余剰帯も検出できた。この余剰帯のある条里東西ラインを直線状に西に伸ばすと、坪井遺跡（6ページ地図右端）で見つかった南海道と一致する。これらのことから本区間の南海道を図のように推定した。南海道とJR高徳線が並行して走るところでは、線路南側の用水路が南海道のラインと一致する。

大谷の南部に、条里にかかわる「八の坪」という小字名が残っているが、南海道を挟み南北のかなり広い範囲を示しているようだ。

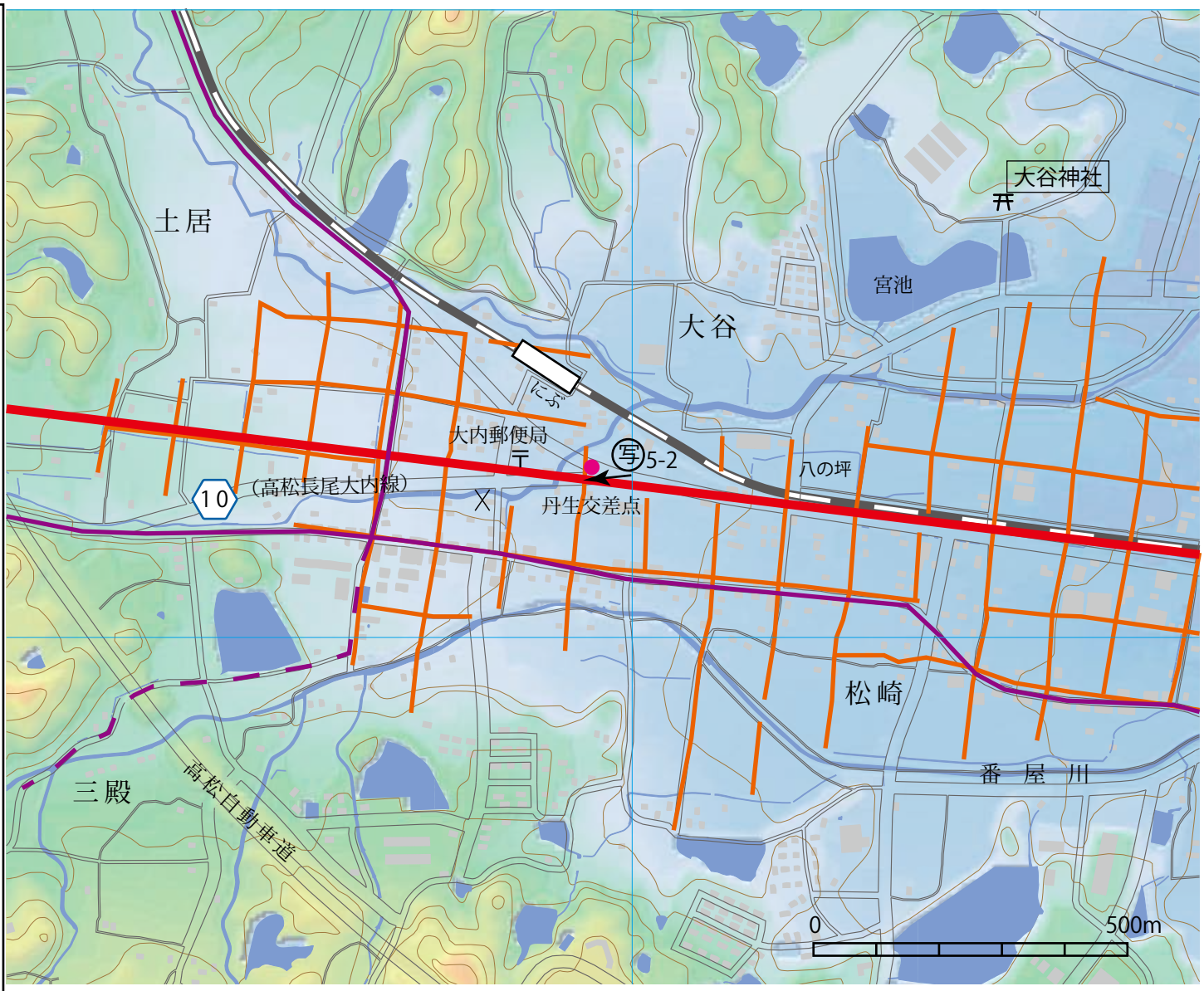
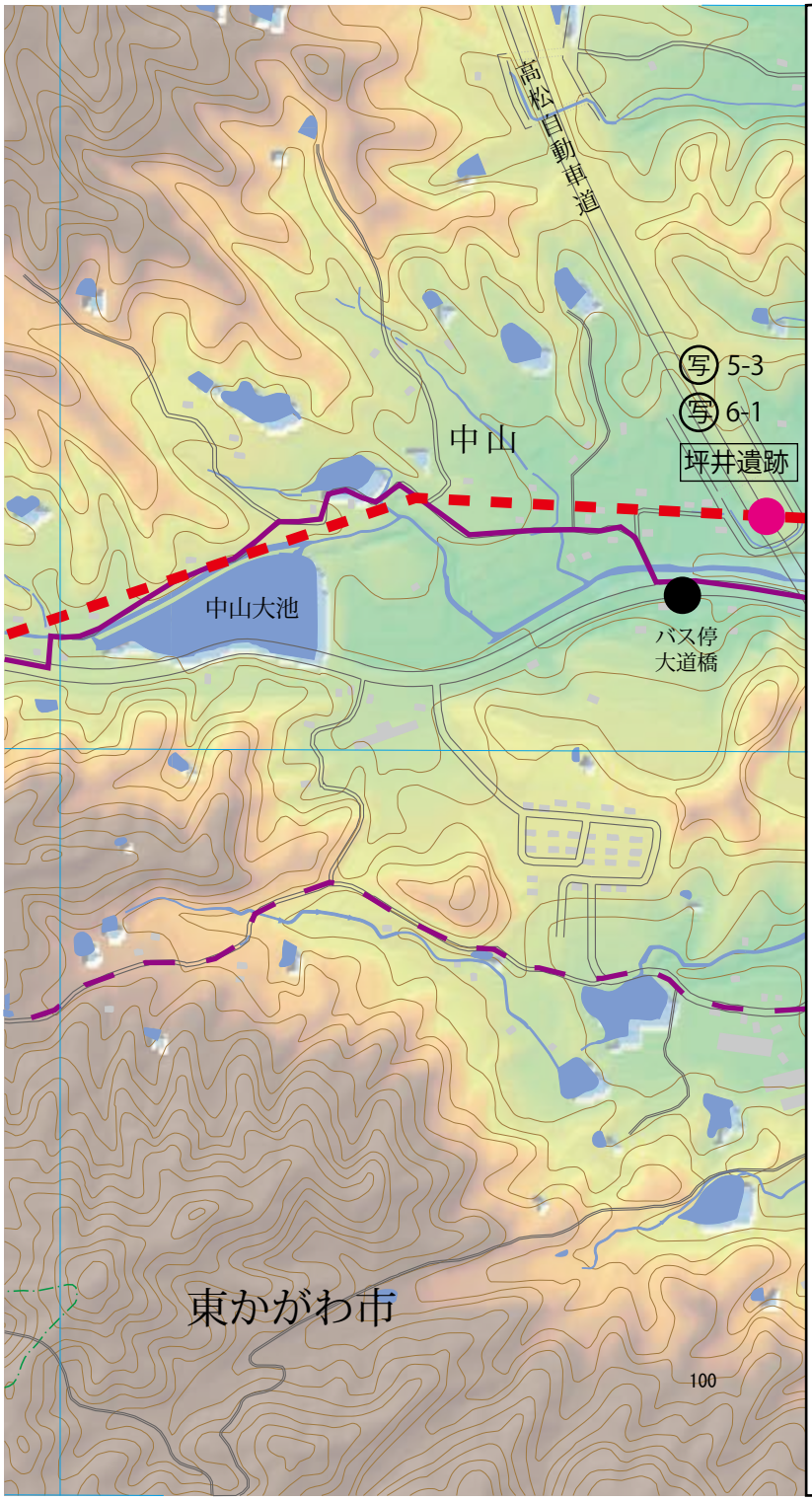


写真 5-3　坪井遺跡道路側溝跡（奈良時代）



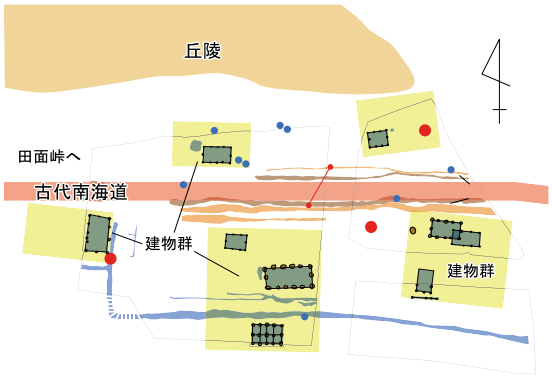
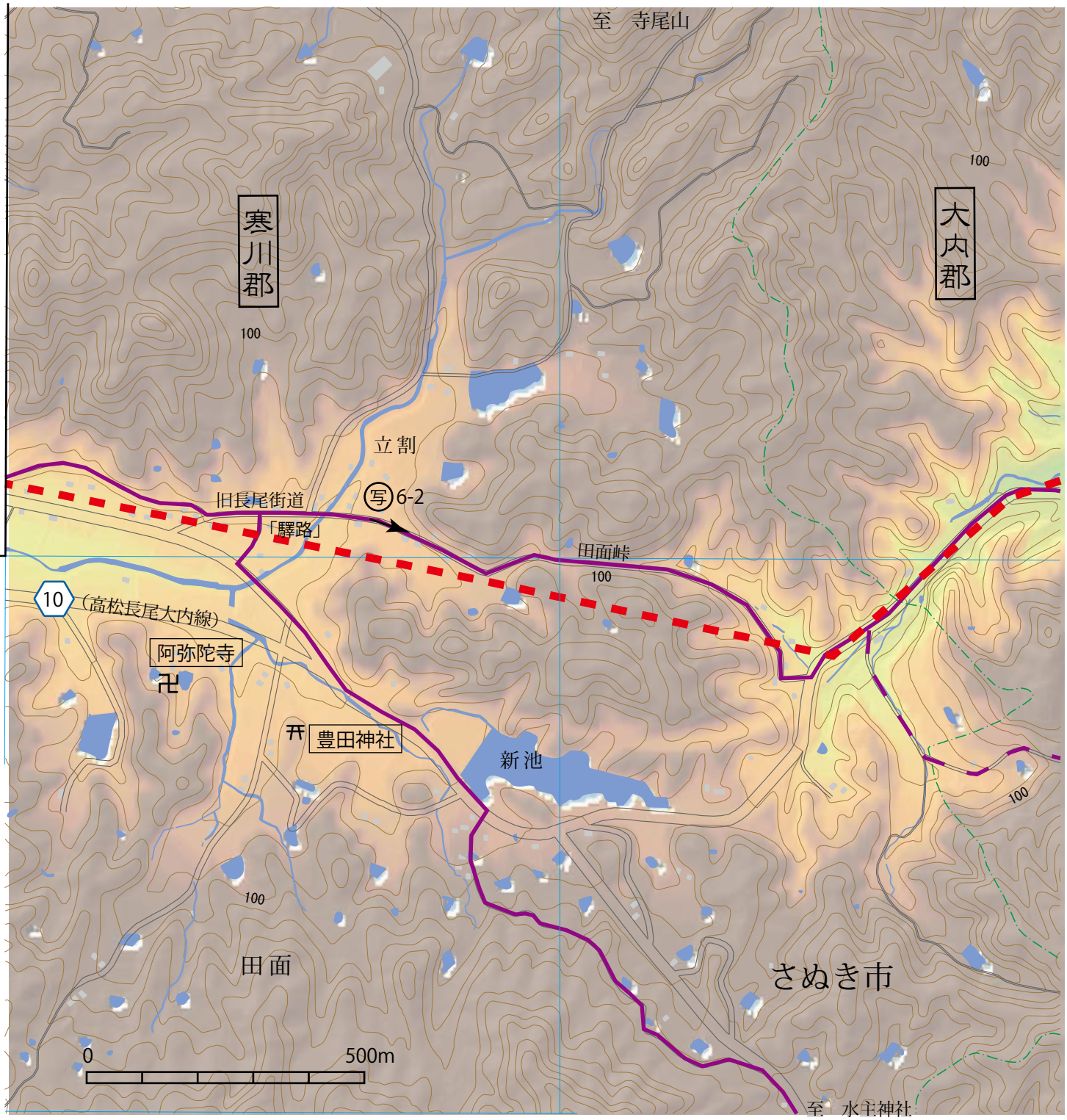


写真 6-1　坪井遺跡の古代南海道と建物の分布

写真 6-2　田面峠の現状
　昔の面影を良く残している。土砂災害の少ない峠道である。

写真 6-3　地籍図に記された「驛路」
明治時代初めの壬申地券地引絵図
（旧大川町行政文書、さぬき市蔵）

前のページの南海道推定ラインを西に伸ばすと坪井遺跡に達する。坪井遺跡はかつての大内郡入野郷（にゅうの）中山にあり、寒川郡との境の麓に位置する。平成10年度の四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で、千三百年前（奈良時代）の5つの建物群と東西方向に並行する遺構群が見つかった。検討の結果、これが南北両側に側溝を持つ幅8～10mの道路（南海道）であると判断された。道路の両側に建つ建物群、中でも南側に大型建物跡があることから、これらが郡の関所か休憩施設であったのではないか



などと考えられている。多くの人や物が往来する南海道の峠の登り口を管理する官衙関係の遺跡であった可能性は高い。

坪井遺跡から中山大池の北側を通過した南海道は、直線道を意識しながら峠へ向かう。田面峠は標高87・5mである。旧長尾街道（近世の街道）は、ほぼ平坦な道を行くかのように、峠から最短コースで下っていき、かつての寒川郡難波郷へ入る。南海道も旧長尾街道とほぼ同じコースを通ったと思われる。

明治初めに描かれた壬申地券地引絵図にこの峠道を「驛路」と記している。「驛路」とは古代の官道を言う。都につながる官道であるという意識が、永く残っていたのかもしれない。近くに水主神社へ向かう道もあり、この辺りは交通の要衝であった。

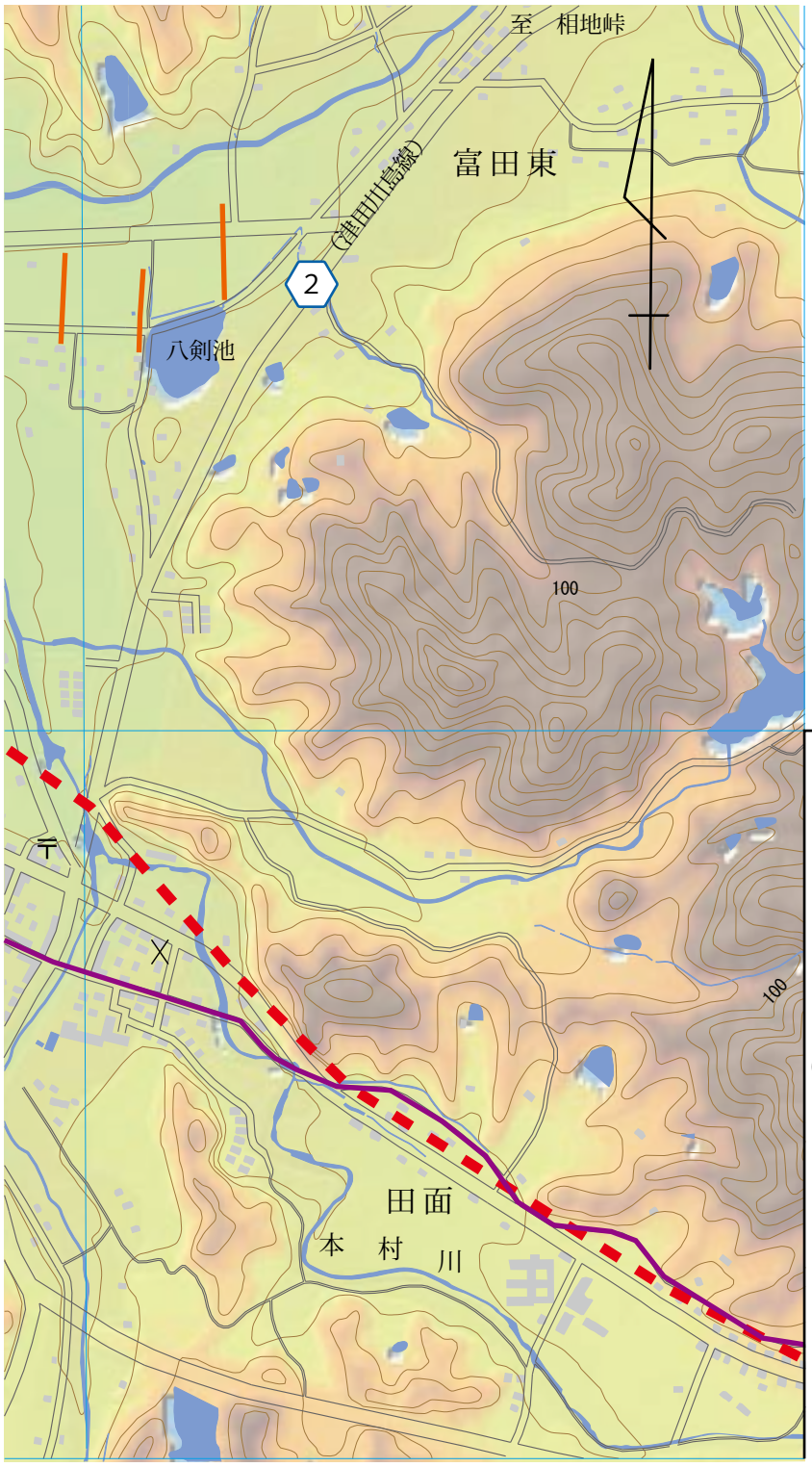


写真 7-1　千町遺跡と富田茶臼山古墳の空中写真
（国土地理院 1975 年撮影）

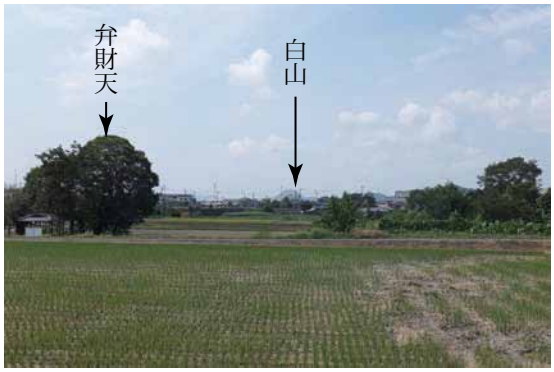
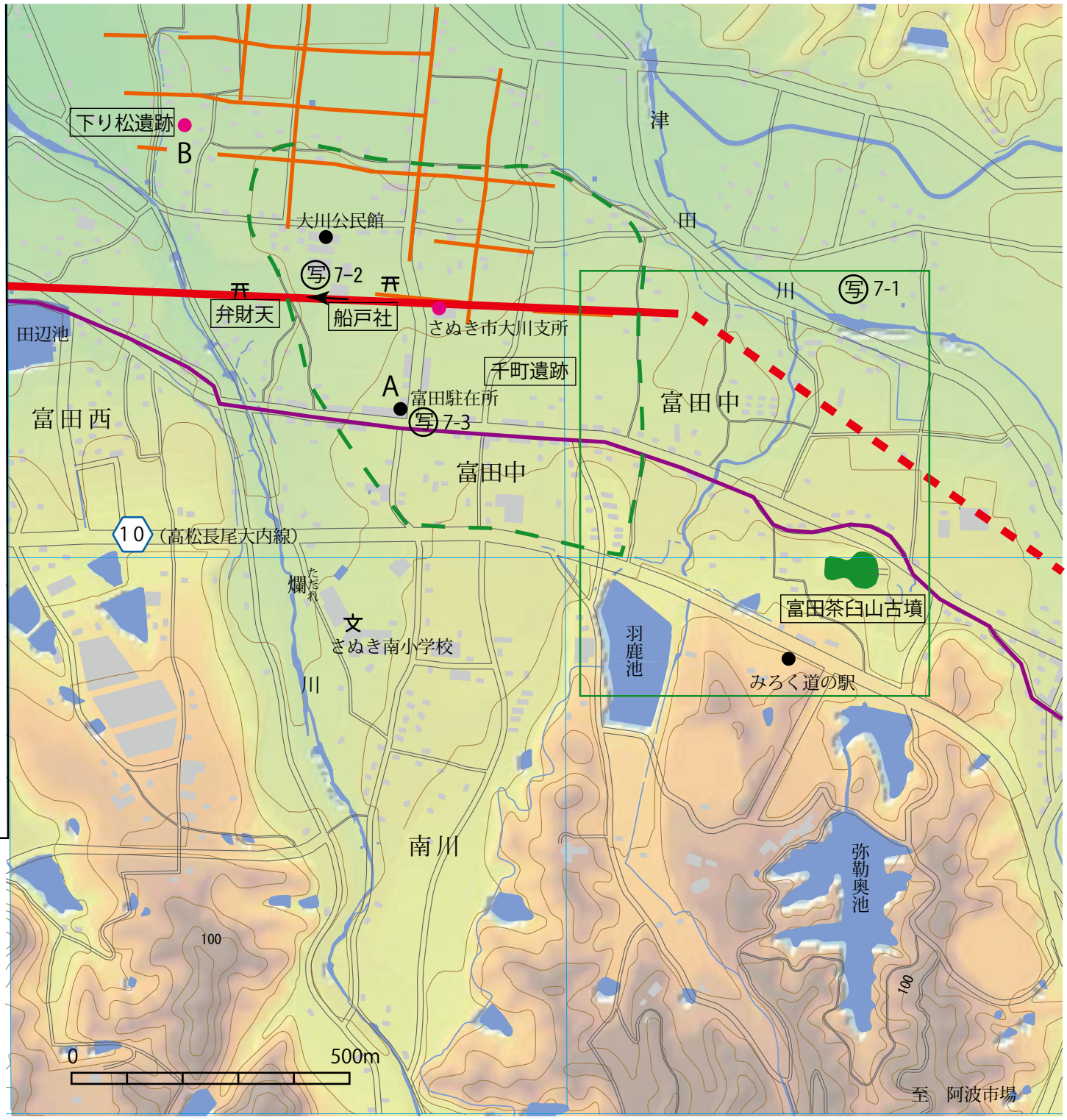


写真 7-2　推定ライン上の大川公民館から西望
遠方に小さく南海道設置の目印となる白山が望める

写真 7-3　千町遺跡（香川県教育委員会調査）
松本駅の所在は不明だが、引田駅～千町遺跡間約 18km、千町遺跡～三谷駅間が約 15km で 30 里（約 16km）に近い。この付近に松本駅があったのではないだろうか。

本区間はかつての寒川郡難破（なは）郷で、四国最大の前方後円墳の富田茶臼山古墳や縄文時代から中世にかけての集落遺跡である千町（せんちょう）遺跡があるように、古くから開けた土地である。さぬき市大川町富田中・西の平野部には条里地割が認められる。

千町遺跡（緑の点線に囲まれた範囲）は津田川と爛（ただれ）川に挟まれた段丘上にあり、奈良時代の遺構などから図中の大川支所の北側（用水路が残る）から田辺池の北辺に達するライ



8

ンが南海道であると推定できた。現在ラインの上には明確な条里地割は残っていないが、船戸社や弁財天が側にあり、大川公民館駐車場から西方に白山（三木町）をはっきり見ることができる。田面峠を下った南海道は、おそらく旧長尾街道とほぼ同じコースを通り本村川と津田川が合流する堰あたりで津田川を渡り、富田茶臼山古墳の北側を北西に進んだものと思われる。

なお、図中Aの調査区（富田駐在所）では、条里地割の方向と一致する大型の掘立柱建物群（7世紀～8世紀前半）が検出されている。建物規模からすると官衙的色彩が濃く、郡衙か松本駅の可能性もある。また、Bの下り松遺跡は出土瓦から白鳳期から奈良時代の古代寺院と考えられるが、松本駅に比定する説もある。

写真 8-1　前頁爛川に架かる下り松橋からの道（左）と旧長尾街道（右）が合流する地点
東方向には大川町の山並が見える。

写真 8-2　梅檀（せんだん）橋上より西望
長尾街道南側を並行する旧長尾街道は、梅檀橋を西へ真直ぐに伸びている。

さぬき市大川町で条里地割が残っているのは、六条に位置するとされている富田中から九条に位置するとされる富田西にかけてである。それに続く寒川町石田東・西でも条里地割が検出できた。条里の方位は真北を指している。

「石田」という地名は、氾濫することの多かった梅檀（せんだん）川、地蔵川にはさまれたこの地域が、石礫の多い川原と化した土地「石多き田」に由来するといわれている。

南海道は田辺池の北辺から条里に沿ってまっすぐに西へ延びる。現在の長尾街道の南側に並行する旧長尾街道がそれに相当する。

南海道近くの発掘調査は、石田高校校庭内遺跡のほか、本村・横内遺跡などで実施されており、奈良時代後期から平安時代前期の掘立柱建物遺構が検出されている。石田高校校

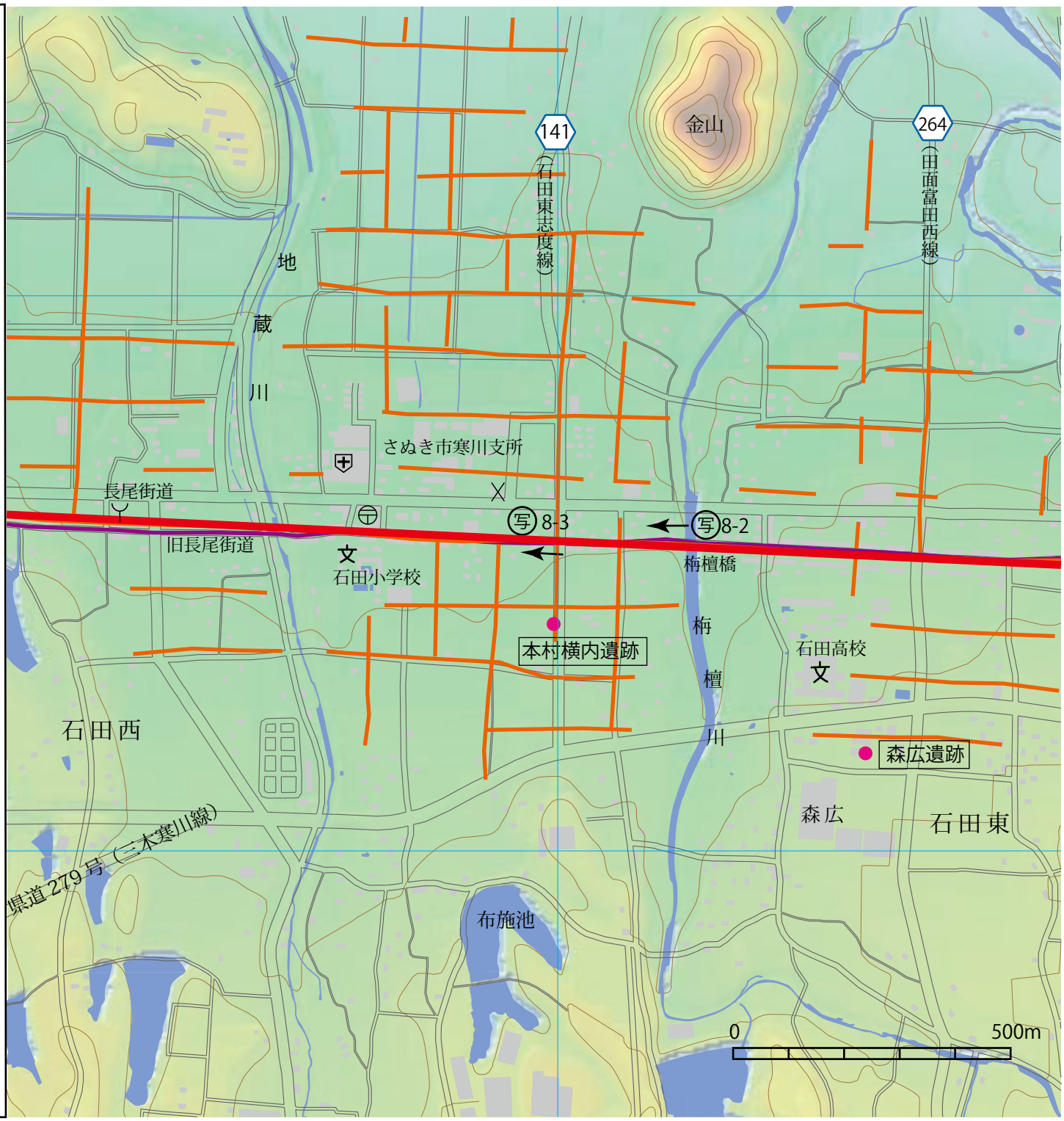
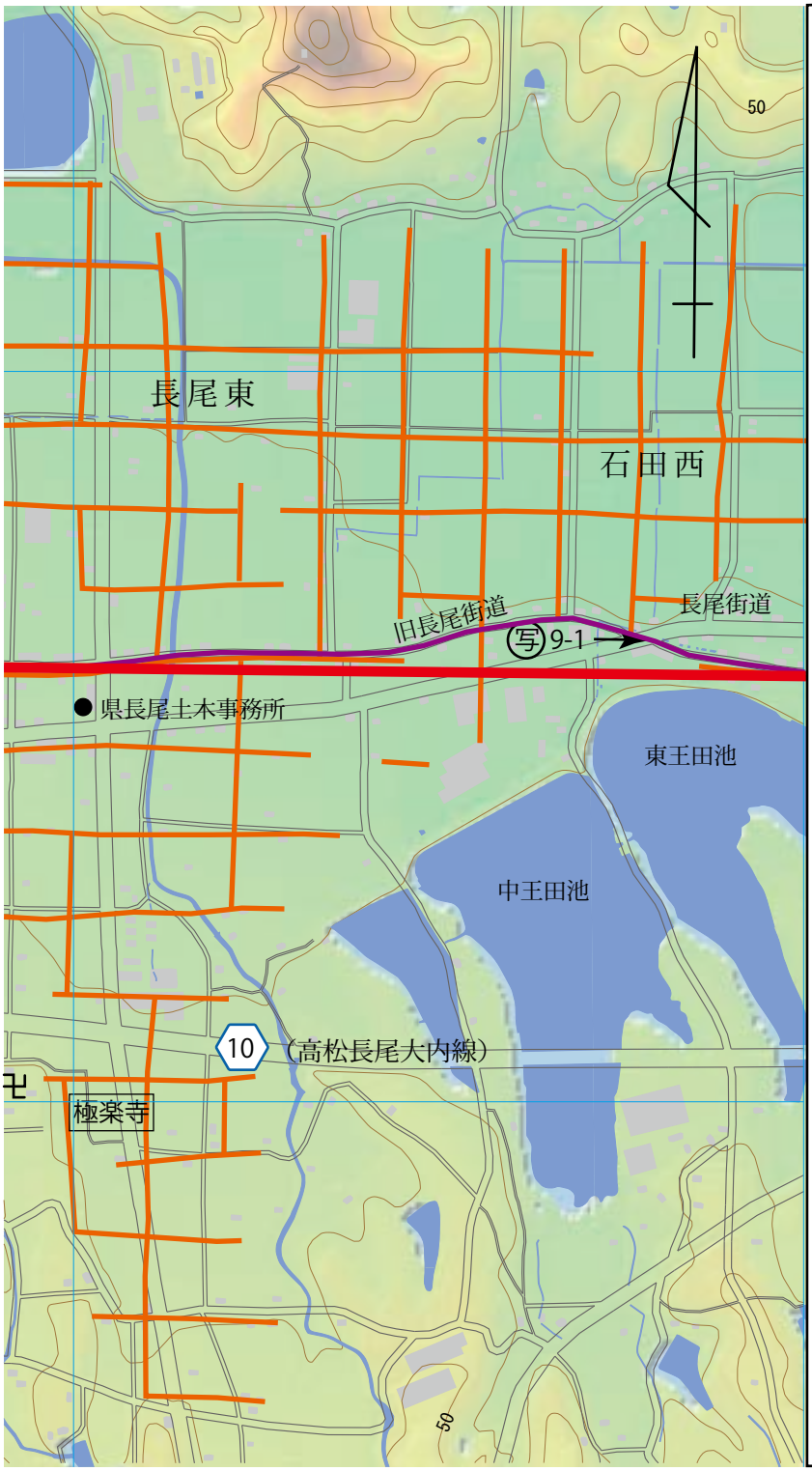


写真 8-3　旧長尾街道のたたずまい
本村・横内遺跡付近（寒川町石田東）でも長尾街道に並行して旧長尾街道は西へ真直ぐ続いている。

庭内遺跡は弥生時代後期からの集落遺跡群である森広遺跡の一画にあたり、南海道との関わりが考えられる。

付近には、南方に創建年代が白鳳時代前期（7世紀前半）と推定される極楽寺跡があり、北方には南海道と約2・5kmはなれて、藤原宮式の瓦が出土した石井廃寺（寒川町神前）があり、南海道との関連について今後の調査が期待される。



8

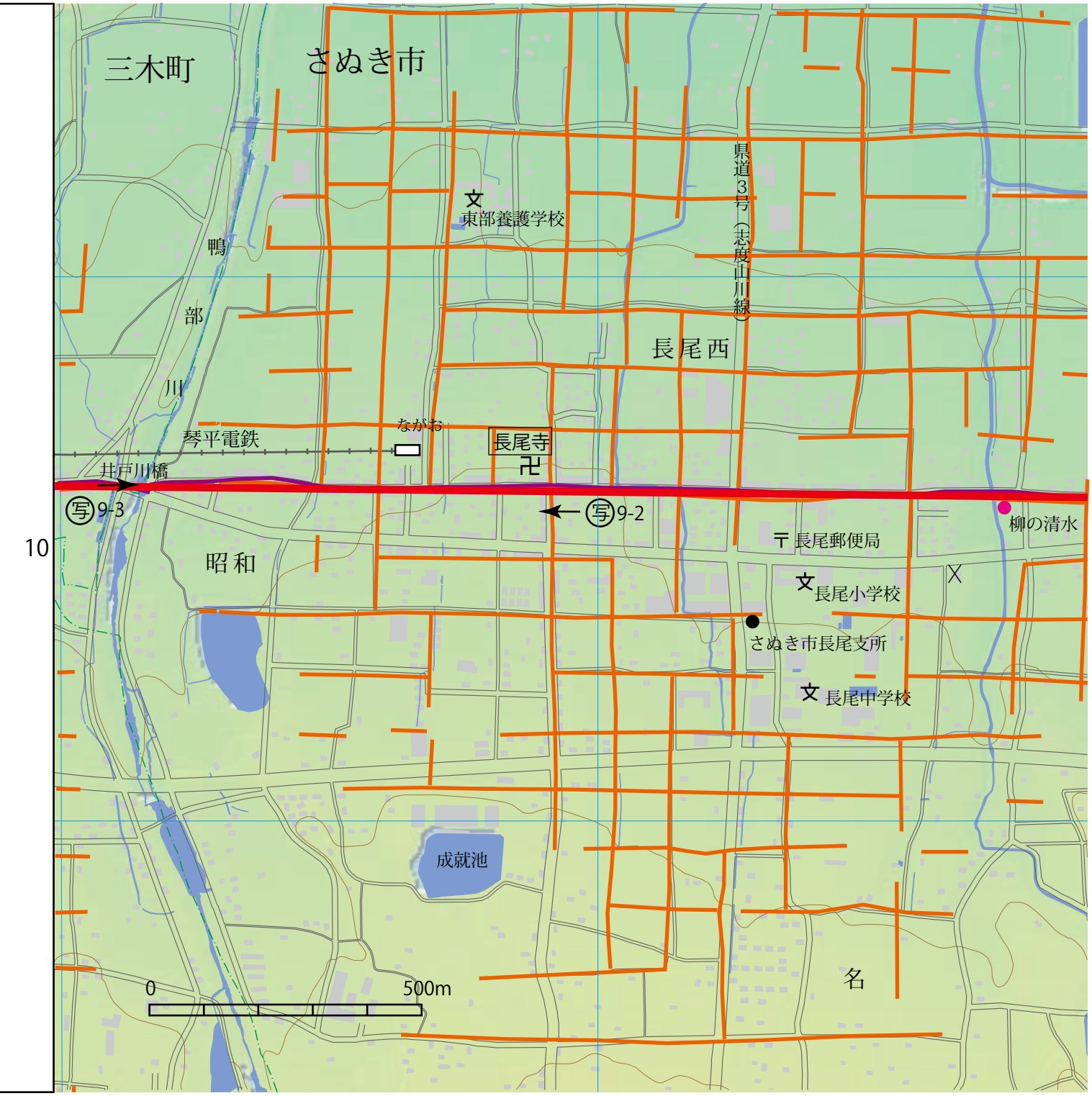
写真 9-1　長尾街道（左）と旧長尾街道（右）が合流する地点から、東方向を望む。
　ここから西へは旧街道は長尾街道の北側を並行する。

写真 9-2　長尾寺の前の旧長尾街道
　長尾寺前の南側の家並みが余剰帯と考えられる。

写真 9-3　井戸川橋より東望
　長尾街道（右）とその北側を並行していた旧長尾街道（左）は、鴨部川に架かるこの橋で再び合流する。

爛川と鴨部川に挟まれた寒川町と長尾町の平野部に条里の地割が広がる。富田西から鴨部川に突き当たるまで、旧長尾街道の南側端には水路が走っており（今は道路となり水路の確認ができないところもある）、そこを基軸に南北に条里の地割が広がる。南海道に相当する条里余剰帯は水路から南側10ｍ幅である。現在は、旧長尾街道の南側に沿って商店や民家、田がならんでおり、かつての南海道の面影はない。

西方を望むと、南海道の延長線上



にランドマークとして白山（202m）を明確に視認することができる。

付近には出土した瓦から奈良時代までに建立されたといわれる願興寺（南海道より北へ約3km・長尾町造田是弘）や八十七番札所の長尾寺などがある。

コラム

極楽寺と長尾寺

極楽寺跡は、南海道沿いに張り出す低台地の南端付近に位置する。発掘調査で白鳳期の瓦が出土し、一町四方の四天王寺式伽藍配置（南大門・中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ伽藍配置）が想定されている。

長尾寺は、聖徳太子あるいは行基の創建と伝えられ、南海道に面し一町四方の寺域を持つ。出土瓦から奈良時代の創建である。

かつての寒川町・長尾町付近は古墳も多いところで、古墳と南海道、氏寺（古代寺院）がセットで存在する興味深い地域である。

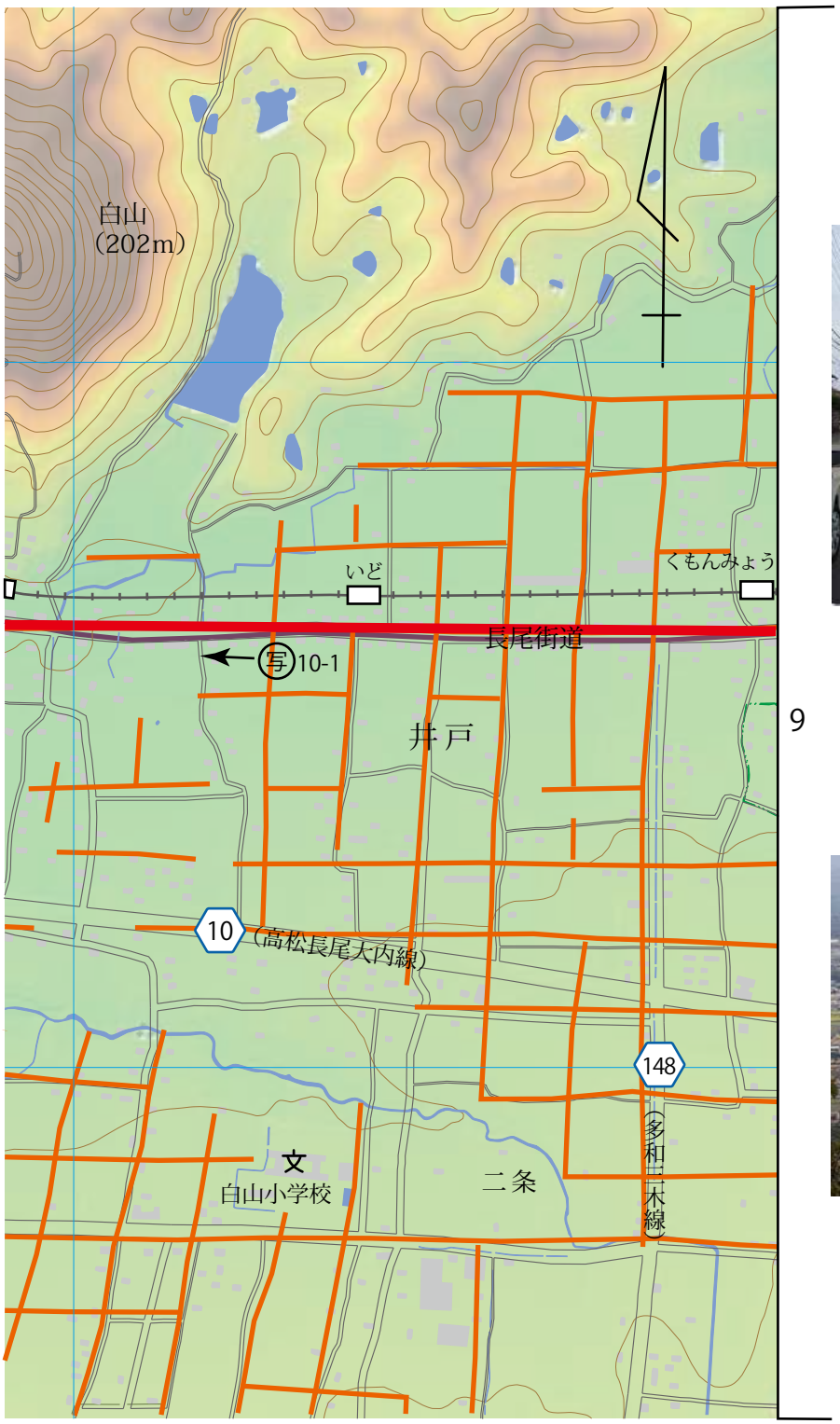


写真 10-1　南海道ライン上より西望

白山を北側に見て長尾街道は西へ真直ぐ伸びている。

写真 10-2　白山山頂より南の田園地帯を望む

条里制がよく残っているのがわかる。三条と四条で南北の基準線がおおよそ９度北方にずれている。その接合部分にひし形の条里地割が出現している。

写真 10-3　南海道跡と重なる古川

白山の南麓の東西に伸びる長尾街道に並行して古川が流れている。

鴨部川の西、三木町平野部に条里地割が広がり、東から二条、三条、四条という地名が残っている。白山南端と山大寺池を結ぶ線が三条、四条の境であり、その線を境にして東側と西側の条里基準線の南北の方位が異なっている。すなわち、白山南端で条里の基準線である南海道の方位が西から西北西へ変わるのである。また、ランドマークである白山からは、西方の次のランドマークである六ツ目山（３１７ｍ）を明確に視認できる。

条里余剰帯は、公文明（くもんみょう）から平木ま

では、長尾街道に沿って南側10m幅ほどで検出された。なお、白山から鹿伏(ししぶせ)までは長尾街道に沿って流れる古川の南側堤に南海道の一部と推測できる道が残っているが、10m幅の南海道が、後年、水路に転用され、現在の古川になったと思われる。

付近には、南海道の南北に、藤原宮式の瓦が出土した長楽寺廃寺（三木町氷上）、上高岡廃寺（三木町上高岡）、讃岐国分尼寺出土瓦と同笵の瓦が出土した始覚寺跡（三木町井上）があり、いずれも飛鳥時代頃の創建である。南海道との関連について今後の調査が期待される。

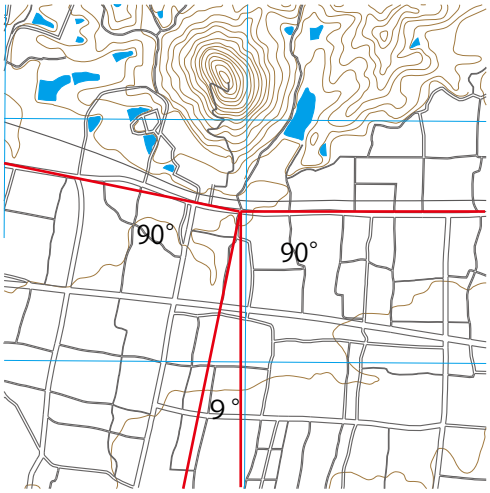


図　条里の骨格
日笠幸義『三木町の條里制について』より作成

写真 11-1　A 地点
　宅地後方で、吉田川が直角に曲がる。

写真 11-2　吉田川堤防上の郡境位置（B 地点）
　南海道の吉田川堤防上の道路は三木町と高松市の境界地で、ここは三木郡と山田郡の郡境と云われている。遠くに白山を見ることができる。

写真 11-3　C 地点
　県道 10 号（高松長尾大内線）と南海道ラインとの交差点より、南海道を西方向に見た写真。

東から西進してきた南海道は、新川を渡河した平木橋西詰地点で長尾街道と分かれ、吉田川が直角に西流するA地点をめざす。本区間は東端から西端まで条里地割がよく残っており、ライン上に現在も道路（幅員3・5m程度）が存在し、南海道を利用したと思われる個所である。地元ではこの吉田川が西方向に流れていく個所を長土手と呼ぶ。この長土手1250m区間の途中には、三木町と高松市の境界がある（B地点）。かつての三木郡と山田郡の郡境であ

る。この郡界ラインは、条里の南北ライン（東へ10度傾斜）に合致し、南海道に直交している。

吉田川の長土手の西端、川が北へ向かう地点の西詰からさらに現在の道路（幅員3m程度）が西へと続き、途中、県道10号（高松長尾大内線）を横切る（C地点）。この交差個所は発掘されていないが、県道10号上の露尾遺跡で奈良時代集落遺跡が確認されている。さらに十川小学校（高松市十川西町）の南側を通過、春日川方向へ西進する。ライン上ではないが、小学校校舎増築時に発掘調査（西下遺跡）が実施され、掘立柱建物が検出されている。十川小学校の南方500mには西尾天神社古墳、平田池南西には集落遺跡が発掘された十川東平田遺跡がある。

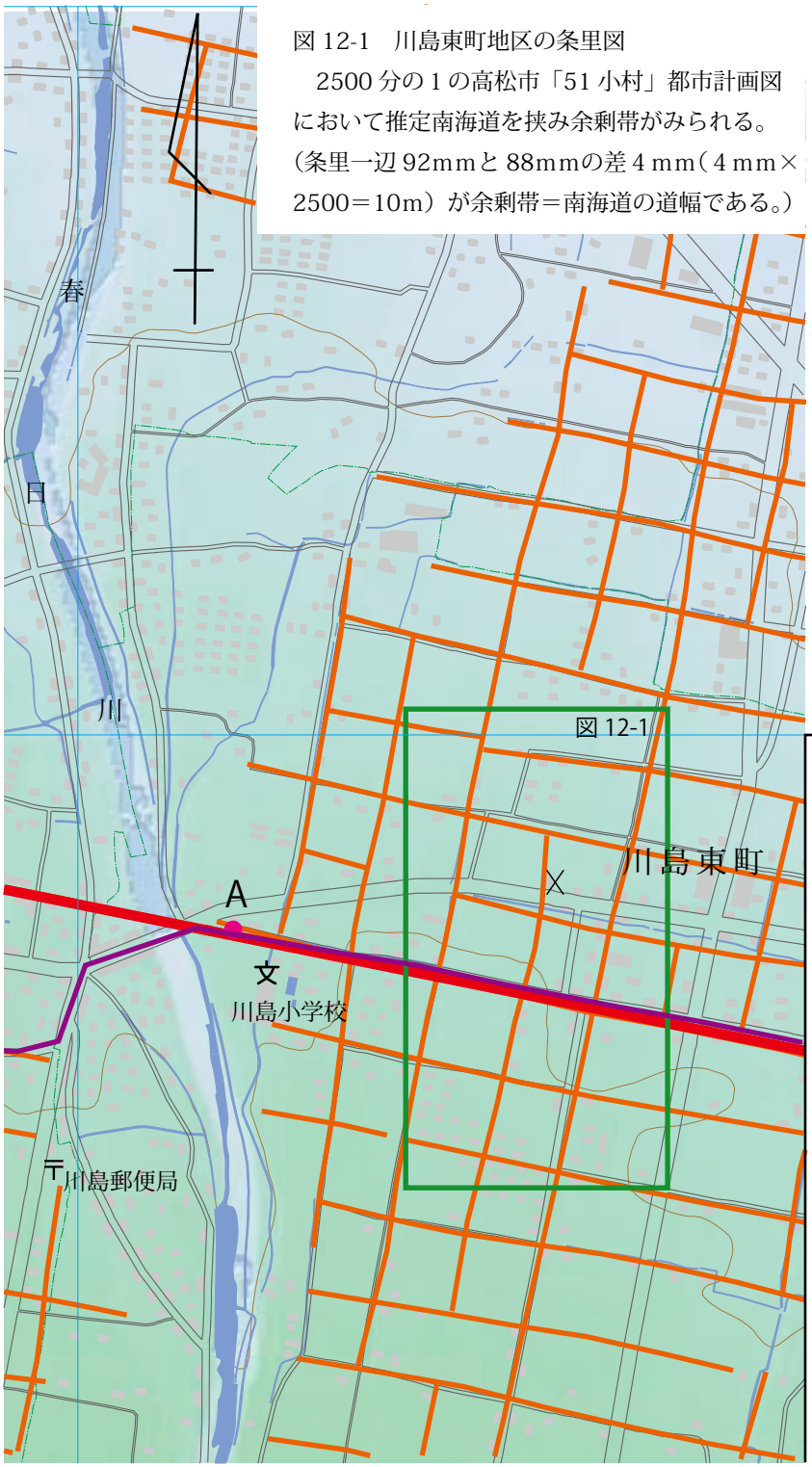


図 12-1　川島東町地区の条里図
2500 分の 1 の高松市「51 小村」都市計画図において推定南海道を挟み余剰帯がみられる。（条里一辺 92mmと 88mmの差 4 mm（4 mm×2500＝10m）が余剰帯＝南海道の道幅である。）

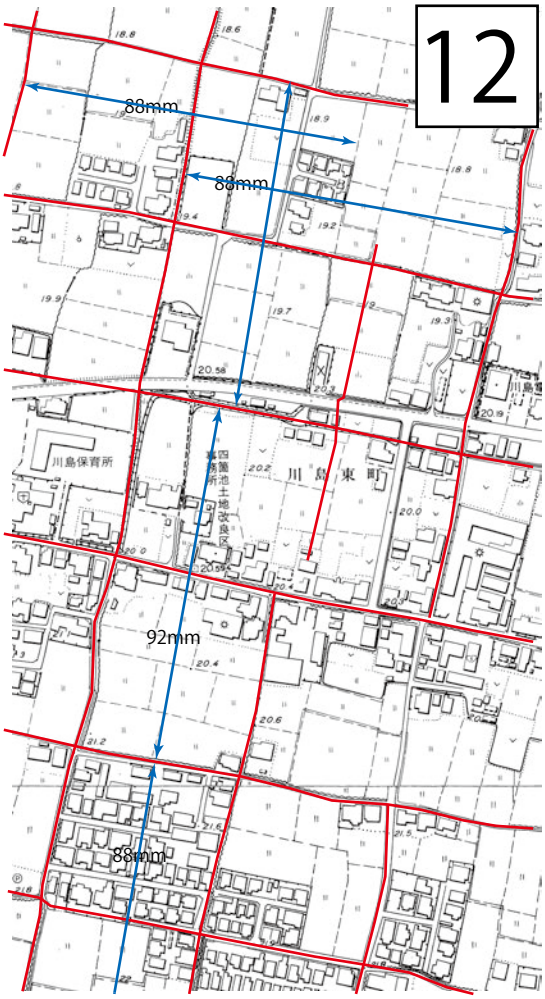


写真 12-1　川島本町地区　切通し個所（B 地点）
南海道上にて東から西を眺める。写真左側が南方向で、丘陵断面の形跡が見られる。

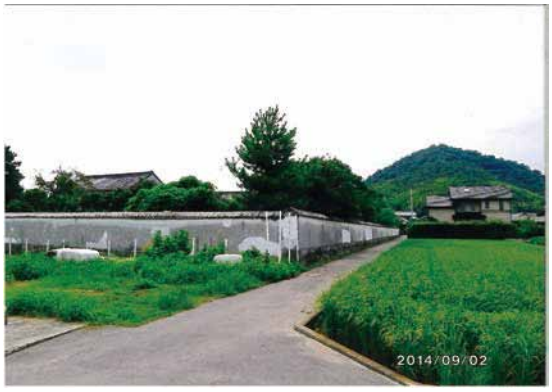
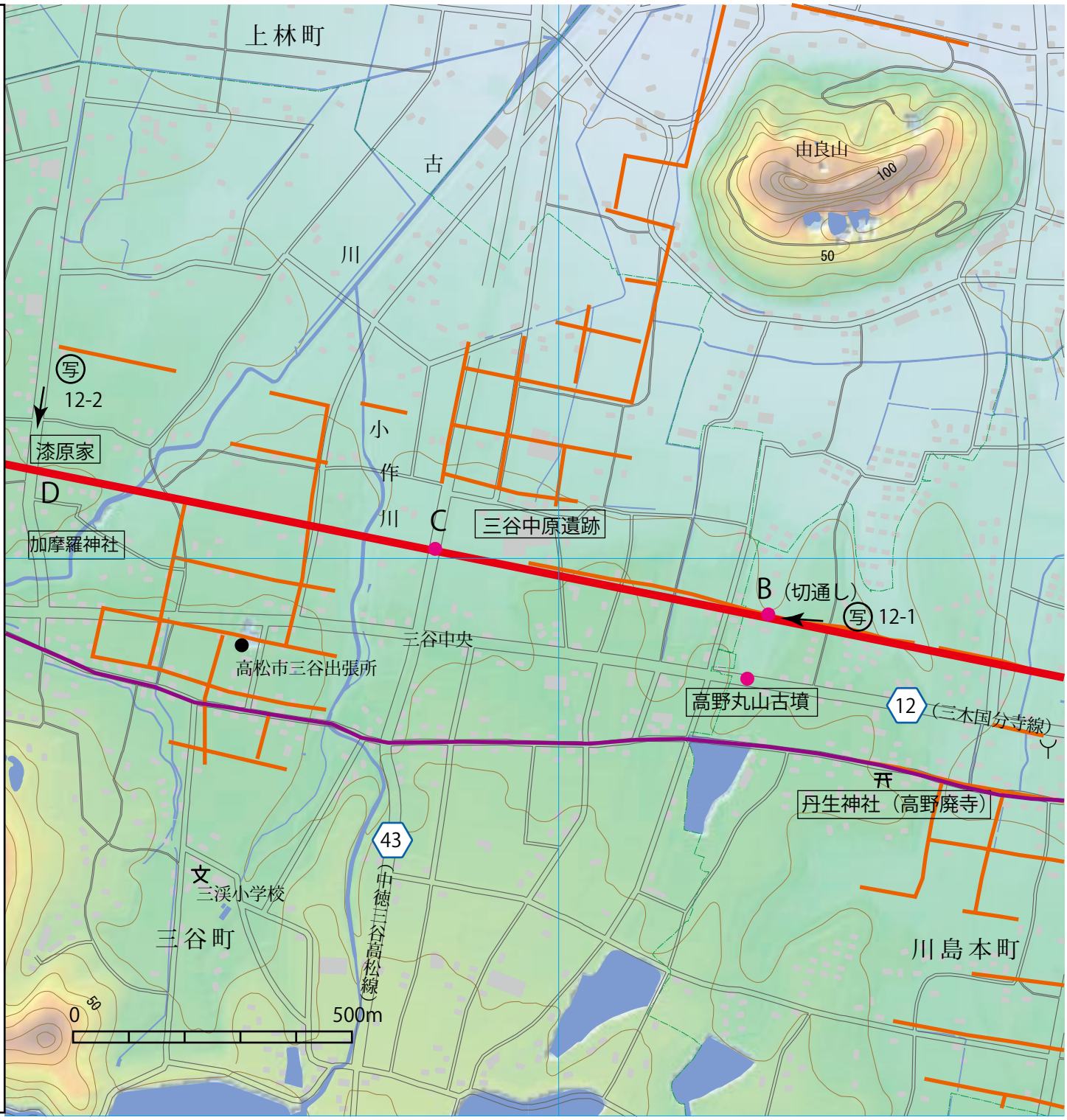


写真 12-2　三谷駅推定地（D 地点）
加摩羅神社、漆原家付近。北から南側、日山を望む。

十川小学校の南側を西進した南海道は、春日川東側で県道12号（三木国分寺線）と交差（A地点）し、さらに直進する。川島東町付近では、条里余剰帯が明確に検出できる。春日川を渡ると、南海道の直線ラインが田畑、畦道、生活道路などに転じており、仏生山東方面まではハッキリとした条里ラインが検出できない。しかし、区間途中の県道部分で発掘調査（三谷中原遺跡・C地点）を実施した結果、想定ライン上に南海道の南側側溝とみられる溝を検出（北側側溝は後世の削平で確認できていない）した。また、同遺跡の東の丘



陵部で道路の切通し（B地点）とみられるものもある。これらのことから、南海道を推定することができる。

この丘陵部の南二町ほどには三木国分寺線が真ん中を横切った円墳の高野丸山古墳があり、さらに古墳から南東の、南海道から二町ほど南には高野（こうや）廃寺（川島本町高野）がある。廃寺は現在丹生神社となっている。

三谷中原遺跡から西進し、小作川と古川を渡り、西三谷町の加摩羅（かまら）神社と漆原家付近（三谷駅想定地・D地点）を通過する。南方面に日山（191m）があり、狼火台が設置されていたといわれる。地元ではこの神社と一町四方の屋敷地辺りを南海道の駅家（うまや）と考えている。また、加摩羅神社北東の古川と交差するライン上には古川西岸への登り道を切通し状でみることができる。

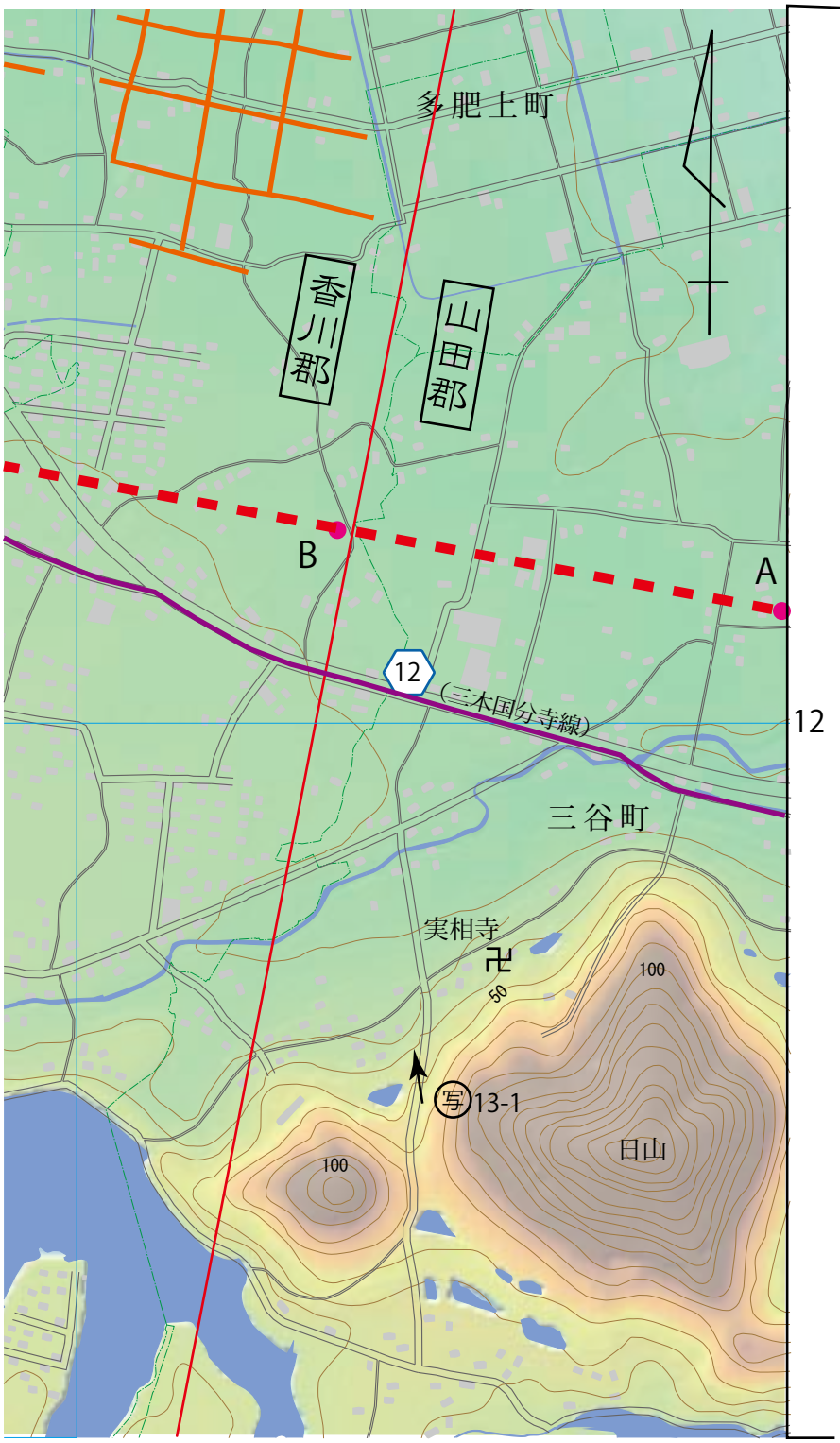


写真 13-1　日山の峠越から北を見る。
推定郡境もすっかり家が建て込んでいる。

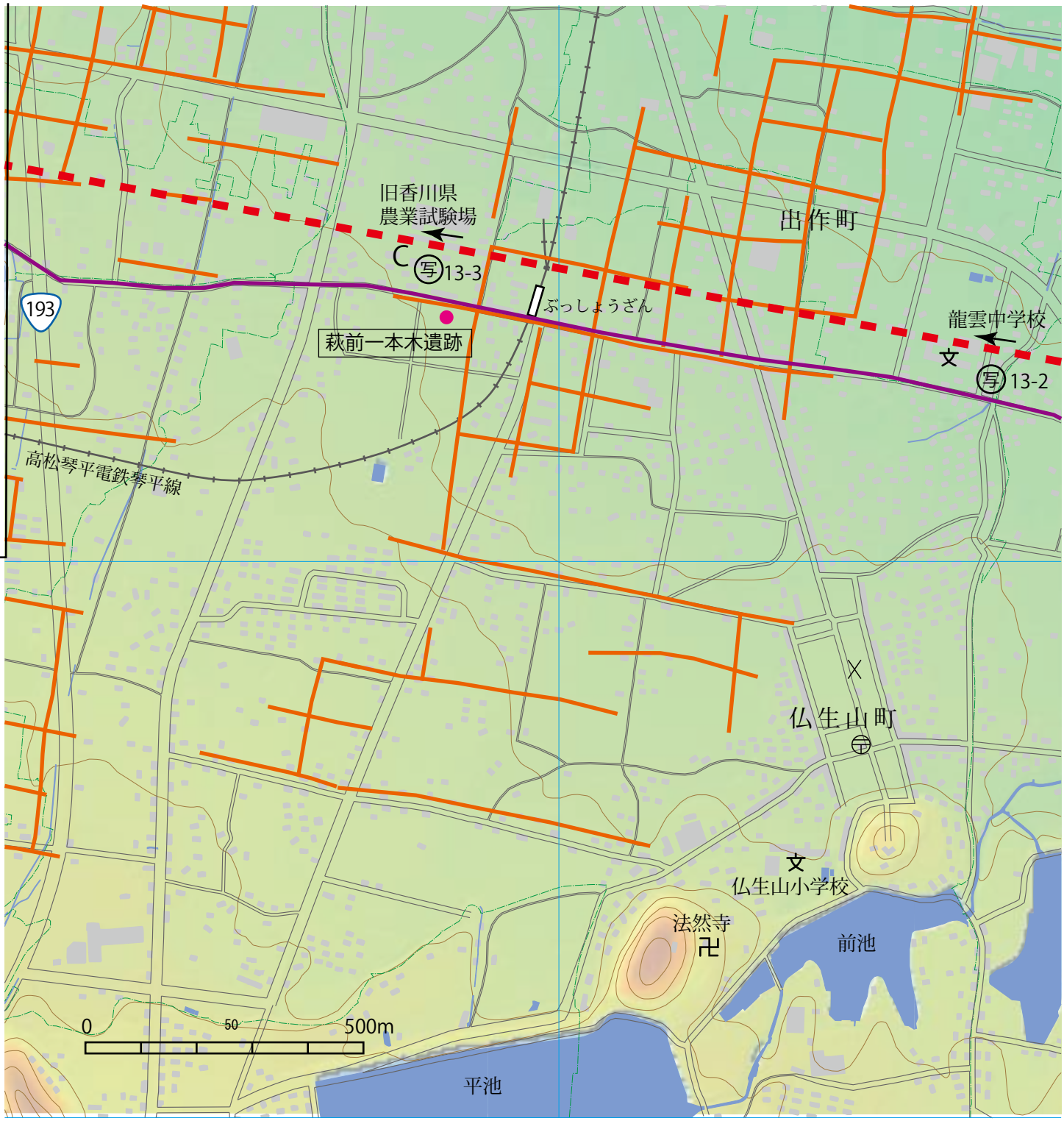
写真 13-2　龍雲中学校東門から西を見る。
遠くに六ツ目山が望まれる。

写真 13-3　香川県農業試験場跡地（C 地点）
左側本館建物と右側ハウスの間を推定南海道が通る。

三谷駅想定地（A地点）から西方向仏生山東あたりまでは龍雲中学校の西方向で一部、条里地割が残っているものの、宅地化の波が押し寄せており明確な条里地割は確認できない。

しかし、南海道は、A地点から進みかつての香川郡に入り、龍雲中学校、コトデン仏生山駅西側の旧香川県農業試験場（C地点）を通過してさらにまっすぐに西進する。

旧香川県農業試験場は高松市立病院建設地として事前調査が実施され



（萩前一本木遺跡）、大型掘立柱建物のほか古墳時代中期から奈良時代にかけての大規模な集落跡とみられる遺構、遺物が出土している。

B地点を通る南北方向のラインは、林町近辺に比定されている「讃岐国山田郡弘福寺領田図」※研究から想定されたラインで、田図記載の「山田香河二郡境」の線を延伸したものである。山田郡と香川郡の郡境は南の実相寺山頂（250m）から南海道を直交する南北線である。

※ 讃岐国山田郡に所在する弘福寺（川原寺）領の寺田を示した田図。735（天平7）年に作成された原図を平安時代後期に書写したものである。重要文化財。多和文庫蔵。

写真 14-1　讃岐一宮田村神社
南海道は田村神社と密接な位置関係にあった。東側から望む。

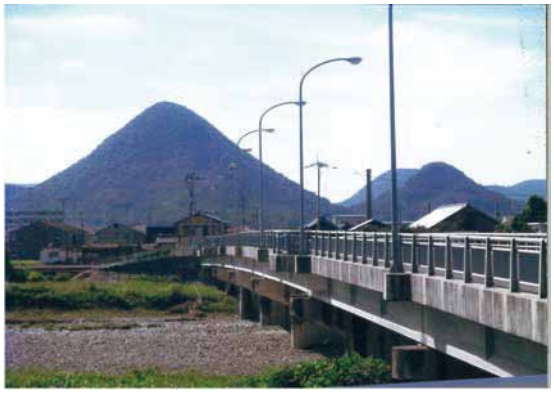
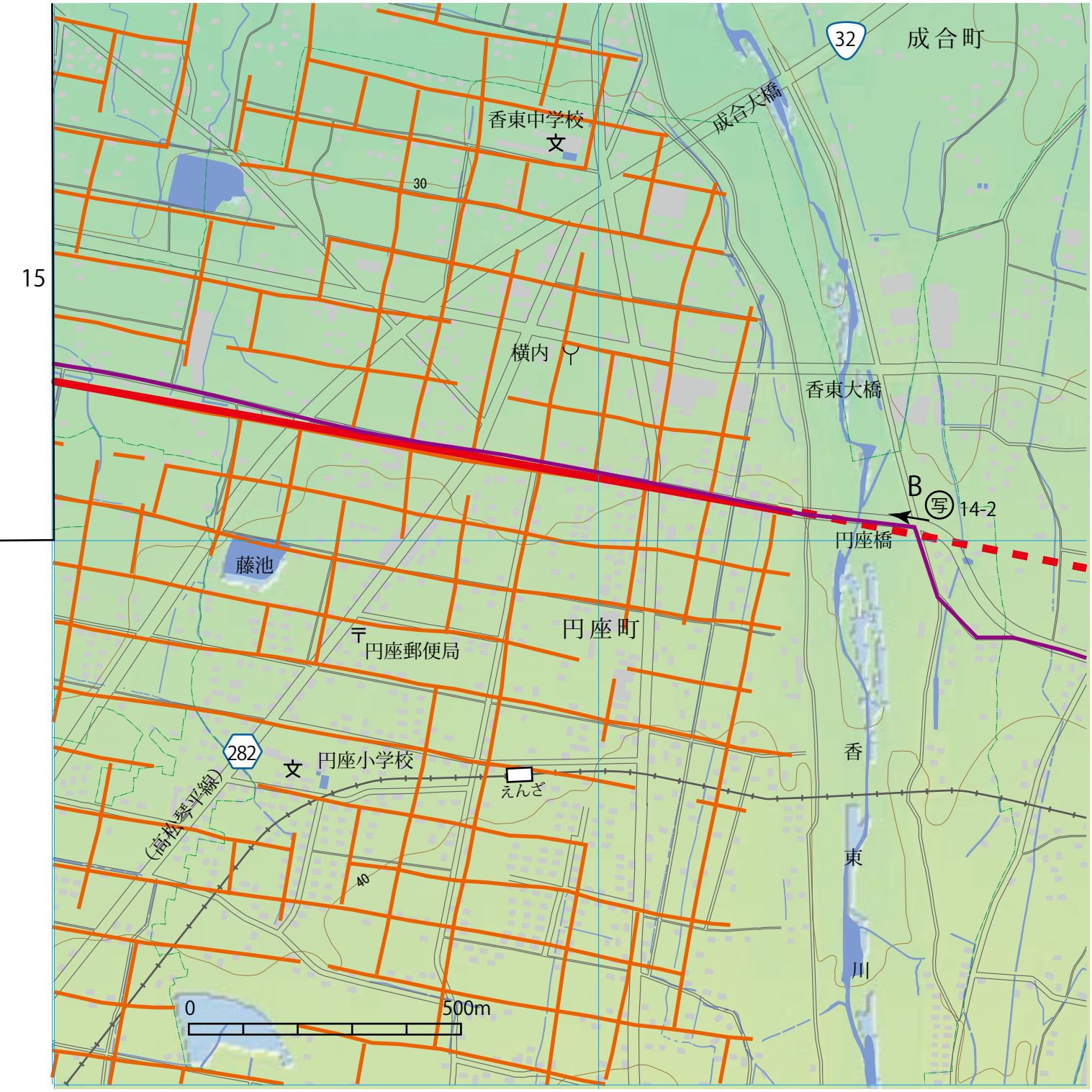


写真 14-2　円座橋から西方向を見る（B 地点）。
正面は六ツ目山、右側に伽藍山を望む。

写真 14-3　（国土地理院 1967 年撮影　MSI671X　C5A-15）

西進した南海道は、田村神社（A地点）に向かい、さらに香東川を渡河（円座橋・B地点）して円座町へ進む。香東川は江戸時代初めに現在の川筋になったが、それまでは現在の川筋の東側にも河川東分流（御坊川など）が複雑に流れていた。そのため、田村神社の西から香東川にかけての一帯には条里地割も確認でき



ない。

南海道上に位置する田村神社は、延喜式内大社、讃岐一宮である。古くは田村大明神・定水（じょうすい）大明神と称され、水神信仰がもとで湧水（香東川の出水）の上に奥殿が建てられている。社伝では７０９（和銅２）年の創建という。南海道は田村神社境内を横断し、途中、県立高松南高校敷地を通過し、香東川を渡る。古代において、香東川をどうやって渡ったかは不明だが、沈下橋のような施設があったかもしれない。

円座橋西詰（B地点）から西方面は、条里地割も明瞭に残っている。南海道は朝廷に献上した円座（敷物）で有名な円座町を経て、六ツ目山と伽藍山の鞍部を目指して西進する。

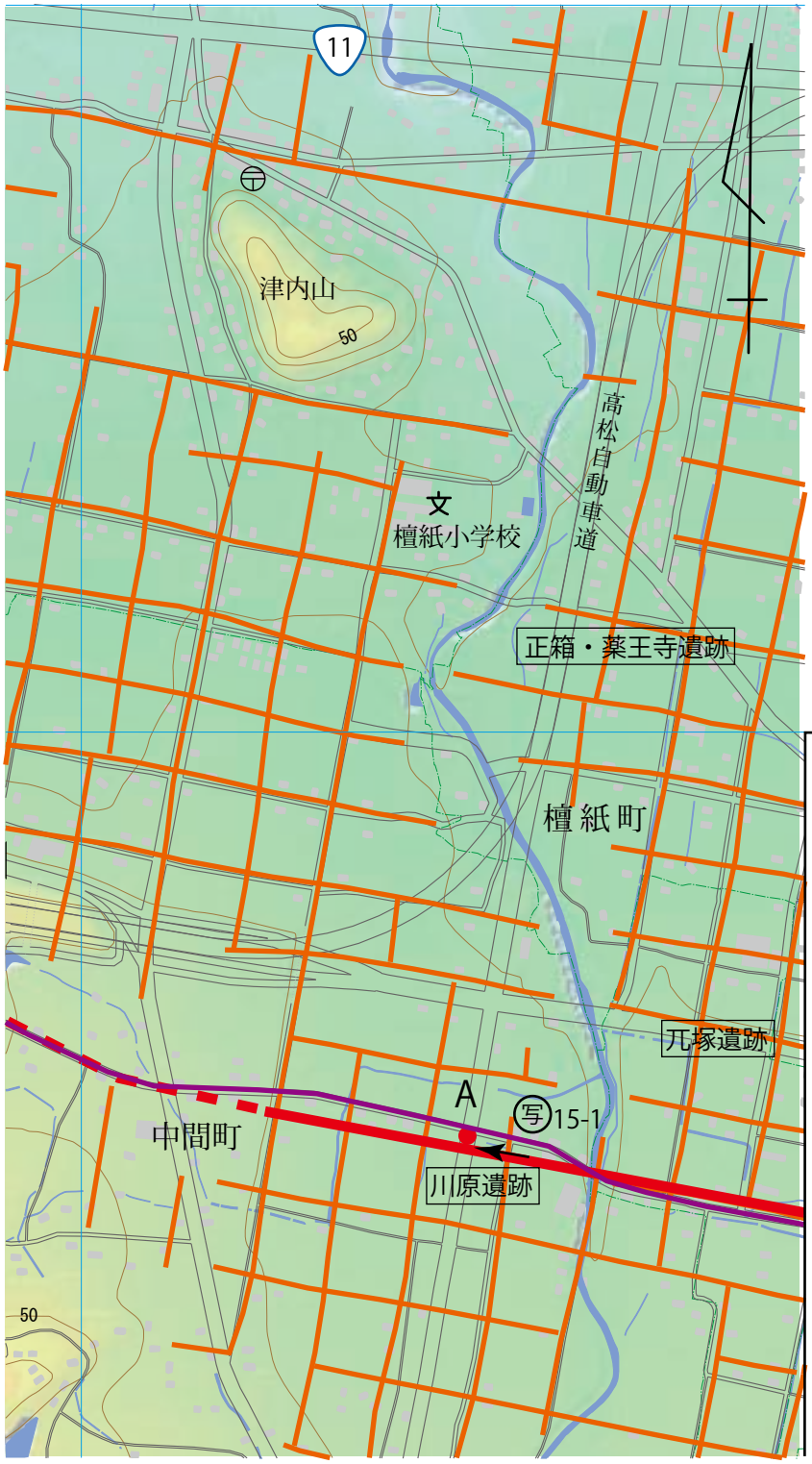


写真 15-1　川原遺跡の溝状遺構

高松市中間町・西山崎町に所在する川原遺跡の発掘調査は、平成 14 年度から 18 年度にかけて実施された。

高松市中間町は、かつての香川郡中間郷で、讃岐に三個所あった東大寺の封戸のうちの一つである（ほかは山田郡宮処郷、鵜足郡川津郷）。南海道は三木町の白山と六ツ目山、加藍山の鞍部を結んで高松平野を横断する。

六ツ目山東麓の推定ライン上では、円座香南線（バイパス）建設時に県道と南海道が交差する地点（A地点）の発掘調査が行われた（川原遺跡）。

調査では、想定通りの個所から溝（南側）が検出され（北側は確認できなかった）、南海道の側溝である可能性が高まった。周辺では正箱・薬王寺遺跡、兀塚遺跡、中間西井坪遺跡などで集落跡が検出されている。

六ツ目山と加藍山の鞍部には、唐渡のお大師さん（遍照院）があり、現在の高速道路もこの鞍部を抜けて

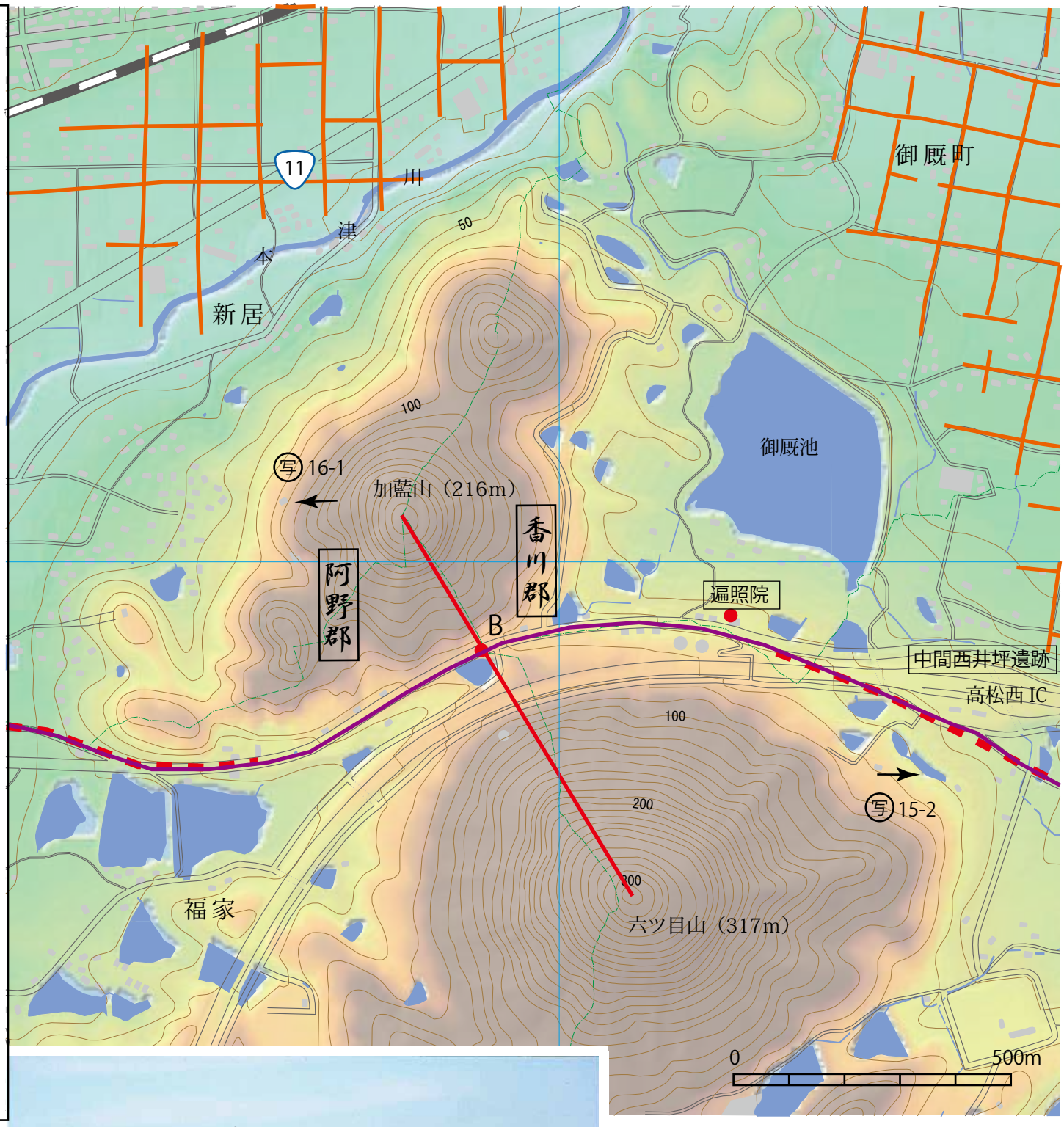


写真 15-2　六ツ目山の麓より高松平野を望む。
中央左は由良山、右奥は白山。

行く。加藍山と六ツ目山の頂上を結んだ線が香川郡と阿野郡の郡境と考えられている。地元で唐渡（からと）越えと呼ばれるB地点に至って、ようやく国分寺、讃岐国府が望める地点に辿り着く。讃岐国府に近接する河内（こうち）駅（坂出市府中町）までは約5kmである。

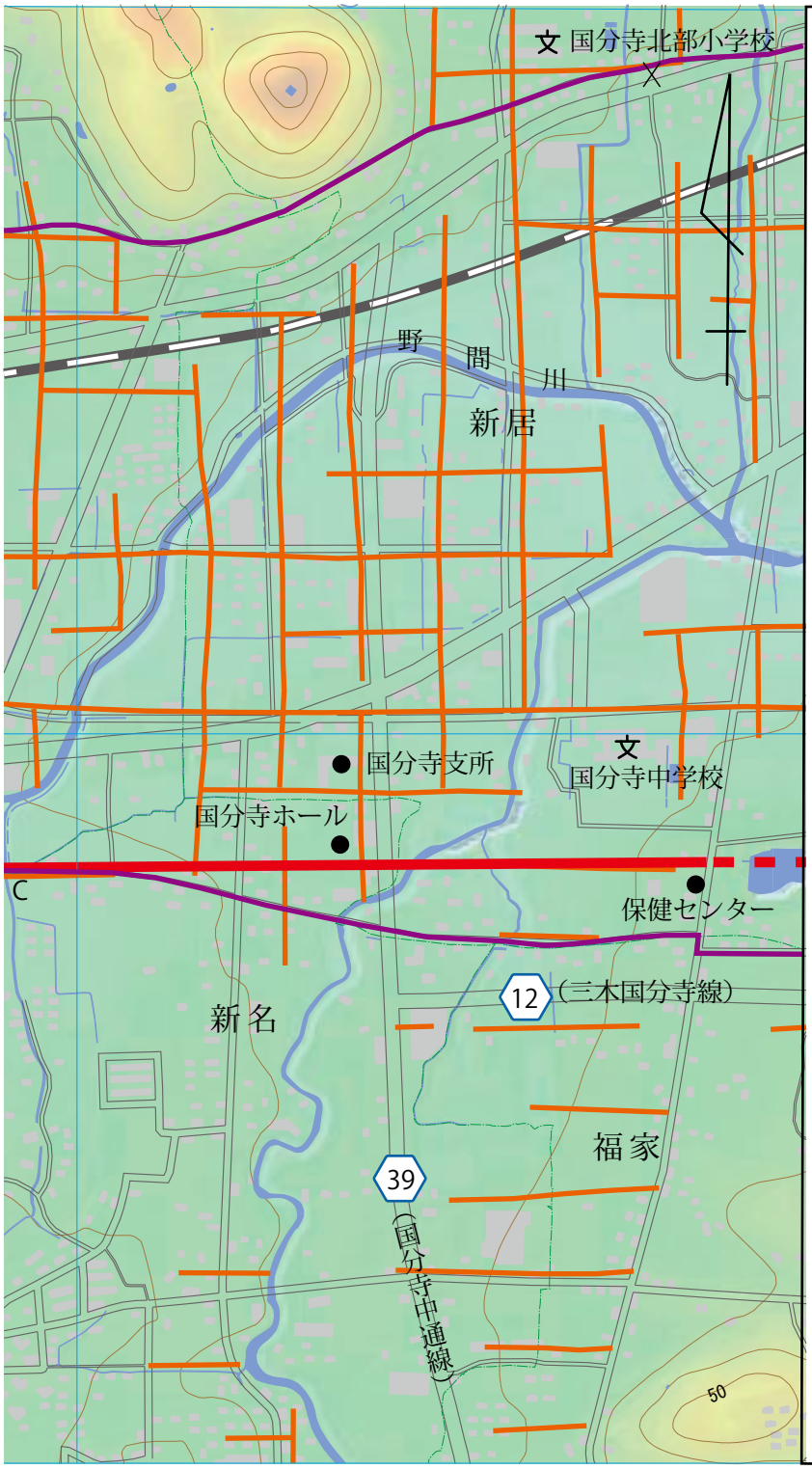


写真 16-1　伽藍山から西方向を望む

右側に国道 11 号が東西に走る。グランドは国分寺中学校。その左側を南海道推定ラインが東西に走る。遠くに城山、飯野山が見える。

写真 16-2　綾坂（17 ページ地図右端）から国分寺町方面を望む

三角形の山は讃岐独特の風景である。

写真 16-3　英明高校校舎から西を見る

国府を中心とする景観が見下ろせる。

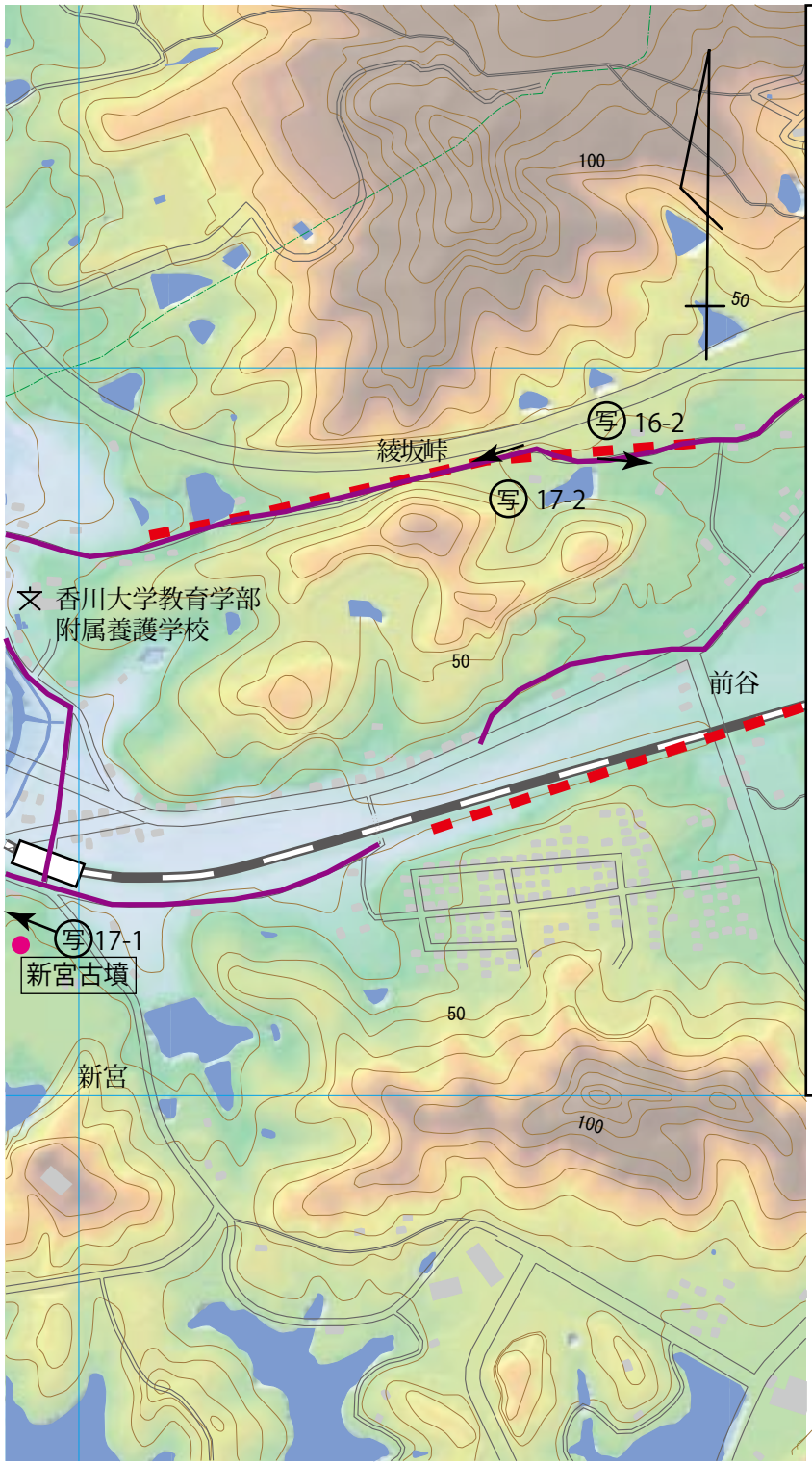
高松平野の南海道を西に進み、六ツ目山と加藍山の間の唐渡峠に達すると国分寺盆地が見えてくる。千二百余年前には、五色台方面を望むと、七重塔があったとされる讃岐国分寺や国分尼寺が見えていたことだろう。

この区間は、高松市国分寺町新名から坂出市府中町前谷に至る。北・東側を山に囲まれ、西・南側に少しではあるが平野が広がっている。平野部分にはほぼ正方位の方向に条里地割が広がり、条里地割が残る最南端付近の国分寺支所南側に余剰帯があると推定される。

この南海道ライン上に、国分寺保健

センター北側の家屋に挟まれた道幅1・5m程度の里道がある。この道を西方向に進むと野間川の支流に当たり（C地点）、ここで里道が途絶える。国分寺ホールの南側に推定ラインに沿うように水路がある。水路に沿ってさらに西に行くと町道がゆるやかにカーブしている所と合流する。ここから西側の元国分高等小学校趾碑の前を過ぎ、坂道の手前まで条里地割が続いている。坂道を登り関ノ池南部の山麓斜面に入ると国分寺町空路（くうろ）に至る。ここからは、南海道が綾坂方向へと直線で行ったのか（Aルート）、前谷・新宮へと西南方向に向かったのか（Bルート）、どちらのルートであったかは不明である。

関ノ池の北側には、讃岐国分寺跡が広がっている。讃岐国分尼寺は国分寺から2km東に離れている。鷲ノ山北裾には府中山内瓦窯跡があり、国分寺及び国分尼寺の瓦と同范のものが出土することから、両寺の創建瓦を焼いた瓦窯と考えられている。



16

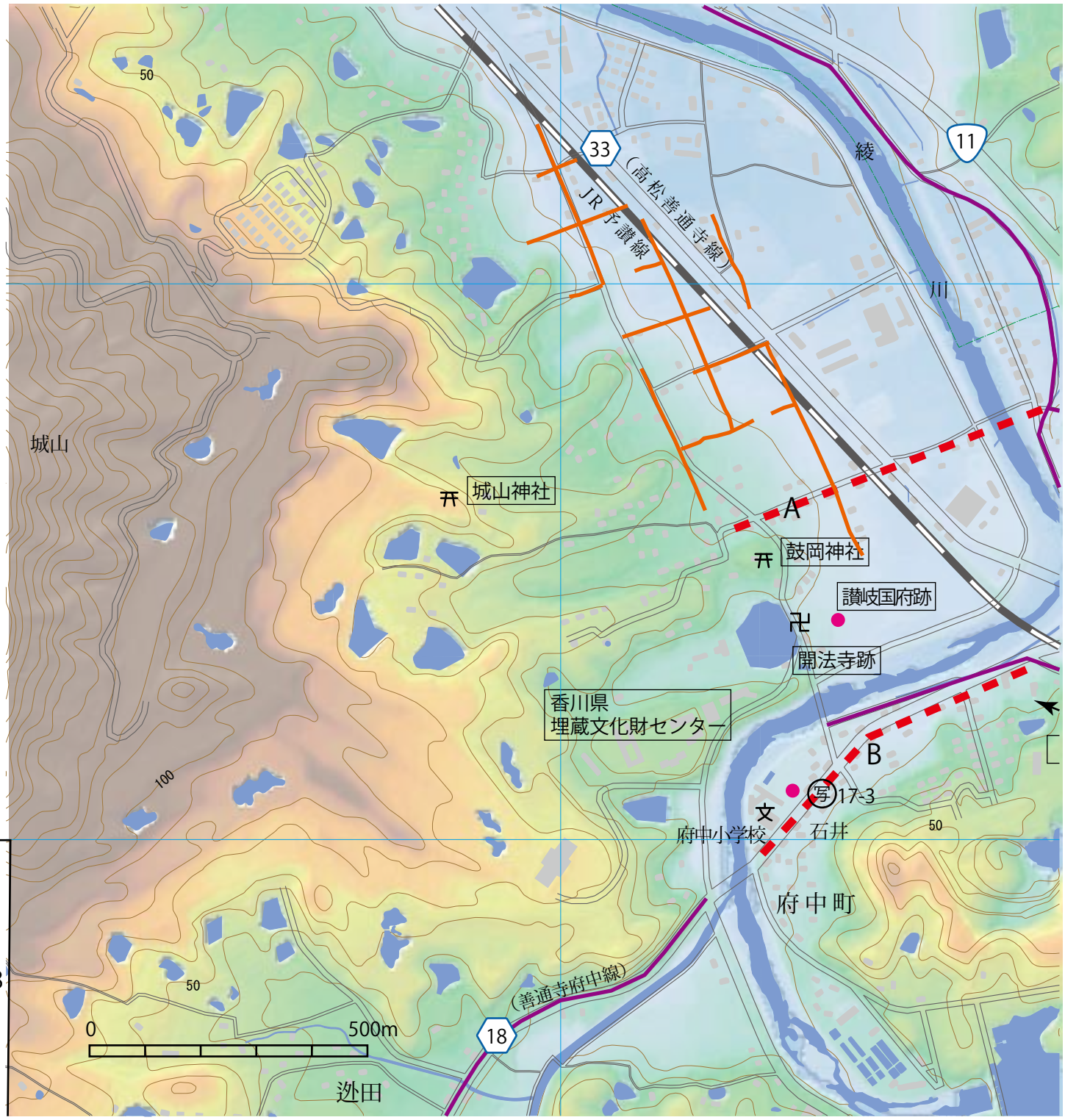
写真 17-1　新宮古墳から城山を望む
足下には綾川が流れ、調査中の讃岐国府跡や鼓岡神社が望まれる。

写真 17-2　綾坂の現況（東から）
切通しを下りきると綾川に出る。

写真 17-3 「境石」
河内駅については、古くから阿野郡甲知郷、現在の府中町石井が候補地とされてきた。しかし、近年「駅田」の可能性のある水田区画（条里）のある前谷説が提示されている。

国分寺盆地の南海道を西に行くと、当時の讃岐国の中心であった国府が所在していた府中町に至る。坂出市府中町前谷・新宮・石井・逃田（にげた）は周囲を山に囲まれ、条里地割は見られない。北方向の綾川下流域の平野には真北から西へ24度傾いた条里地割が広がっている。この地区は東の前谷から綾川に向かって少しずつ下り、ＪＲ讃岐府中駅から石井は平坦部、綾川を渡った逃田から額坂峠に向かって標高が上がっていく。

讃岐国府周辺の南海道については、



南海道直進ラインの綾坂から鼓岡神社へ向かう道「セイリュウ」（A）と、前ページの空路から、西南方向の前谷・新宮に向かう道（B・伊予街道に一部重複）の2ルートが考えられる。この近辺には南海道の遺称地名と直結するものはないが、江戸時代末の検地帳には「大道」という小地名が複数残っている。

讃岐国府周辺には、鼓岡神社の南東に開法寺の跡と推定される古代寺院跡がある。推定される国府の範囲内に位置することから、国府に係わる官寺的性格をもつと考えられている。また、近辺には河内（こうち）駅が置かれていたと考えられるほか、延喜式内大社で讃岐国三社の一つ城山神社や崇徳上皇の配流先の行在所として伝わる鼓岡神社などが点在する。

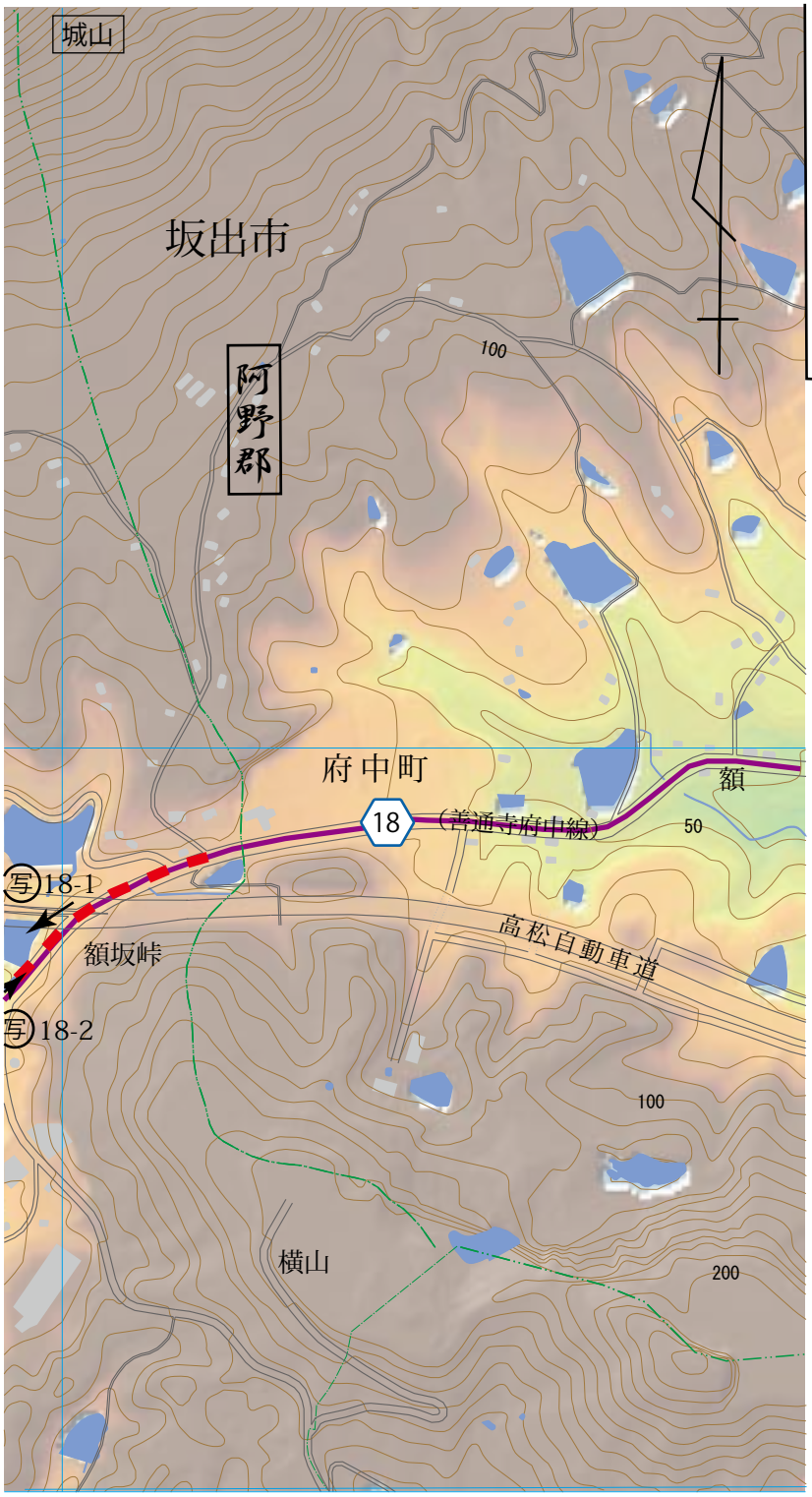


写真 18-1　額坂峠から西を見る
司馬遼太郎『空海の風景』の冒頭に登場する峠も、すっかり様変わりしている。

写真 18-2　西から見た額坂峠
現在も高速道路、県道が走る交通の要衝。

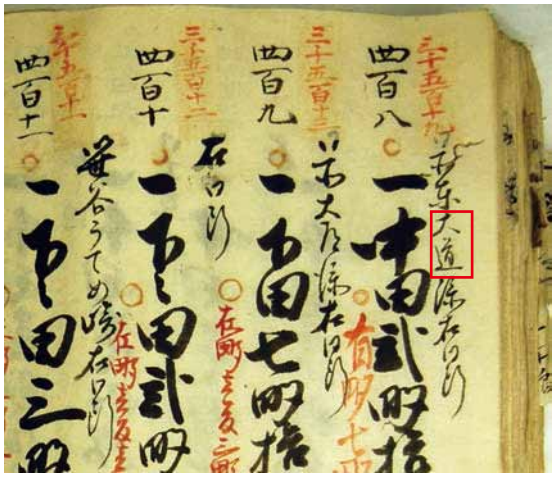


写真 18-3　検地帳に見える「大道」
（明治壬申地券調査に伴う順道帳、坂出市蔵）

讃岐国11郡の一つ阿野郡に置かれていた讃岐国府を過ぎ、城山山麓を西へ進むと、鵜足（うた）郡との境界にある額坂に至る。本区間は、山麓や谷筋の狭隘地であるためか条里地割は見当たらない。

本区間は、坂出市府中町額坂から丸亀市飯山町三谷までである。南海道は国府周辺から西に向かって、城山の山麓、あるいは谷筋を通って、切通し個所の額坂峠に至ったと思われる。峠から西方向に、下り勾配の坂道となる。峠で県道18号（善通寺

コラム

国府周辺から額坂へ

南海道は城山の谷筋を通ったのか、山麓を迂回したのか、それを見極めるため現地調査を行った。

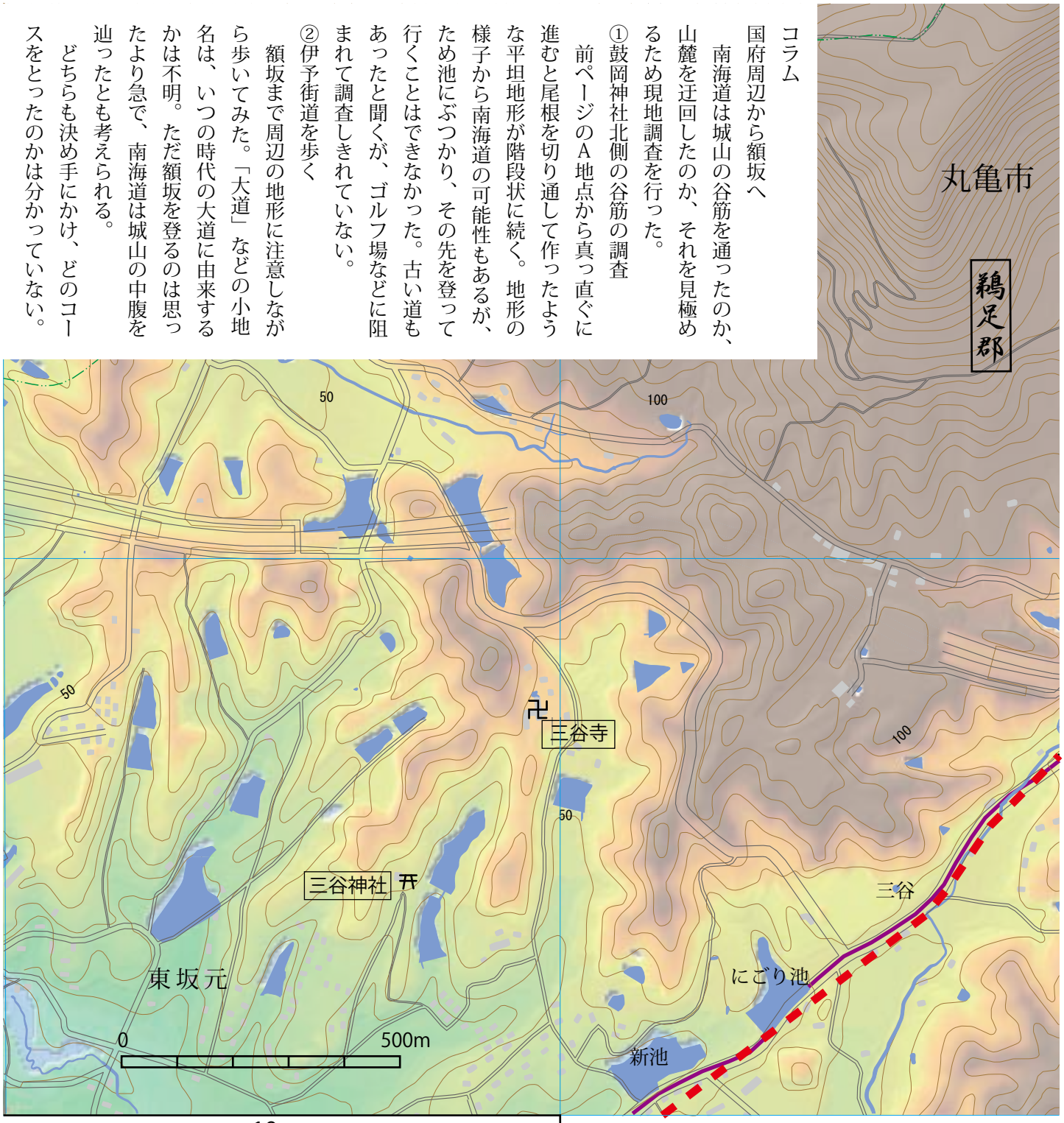
①鼓岡神社北側の谷筋の調査

前ページのA地点から真っ直ぐに進むと尾根を切り通して作ったような平坦地形が階段状に続く。地形の様子から南海道の可能性もあるが、ため池にぶつかり、その先を登って行くことはできなかった。古い道もあったと聞くが、ゴルフ場などに阻まれて調査しきれていない。

②伊予街道を歩く

額坂まで周辺の地形に注意しながら歩いてみた。「大道」などの小地名は、いつの時代の大道に由来するかは不明。ただ額坂を登るのは思ったより急で、南海道は城山の中腹を辿ったとも考えられる。

どちらも決め手にかけ、どのコースをとったのかは分かっていない。



府中線）と高速道路が交差する。

讃岐国府跡探索事業のボランティアによる明治時代地籍図や順道帳（検地帳）の調査で、「大道」・「往還」などの地名が多数抽出できたが、額坂付近では位置の比定ができていない。

額坂の北側にそびえる城山には古代の山城跡である城山城（きやまのき）跡がある。山頂の広い平坦部のほぼ全域に、延長３・４ｋｍの土塁と延長４・４ｋｍの石塁による二重の防御壁が確認でき、城門や水門も備えている。これらは朝鮮式山城の特徴を示しているが、不明な点が多く今後の調査が待たれる。

丸亀市飯山町には三谷寺がある。聖武天皇の勅願により行基が開創したという古刹である。また、三谷神社は８８８（仁和４）年の讃州をおそった旱魃に際し、菅原道真が雨乞いをしたという言い伝えがある。

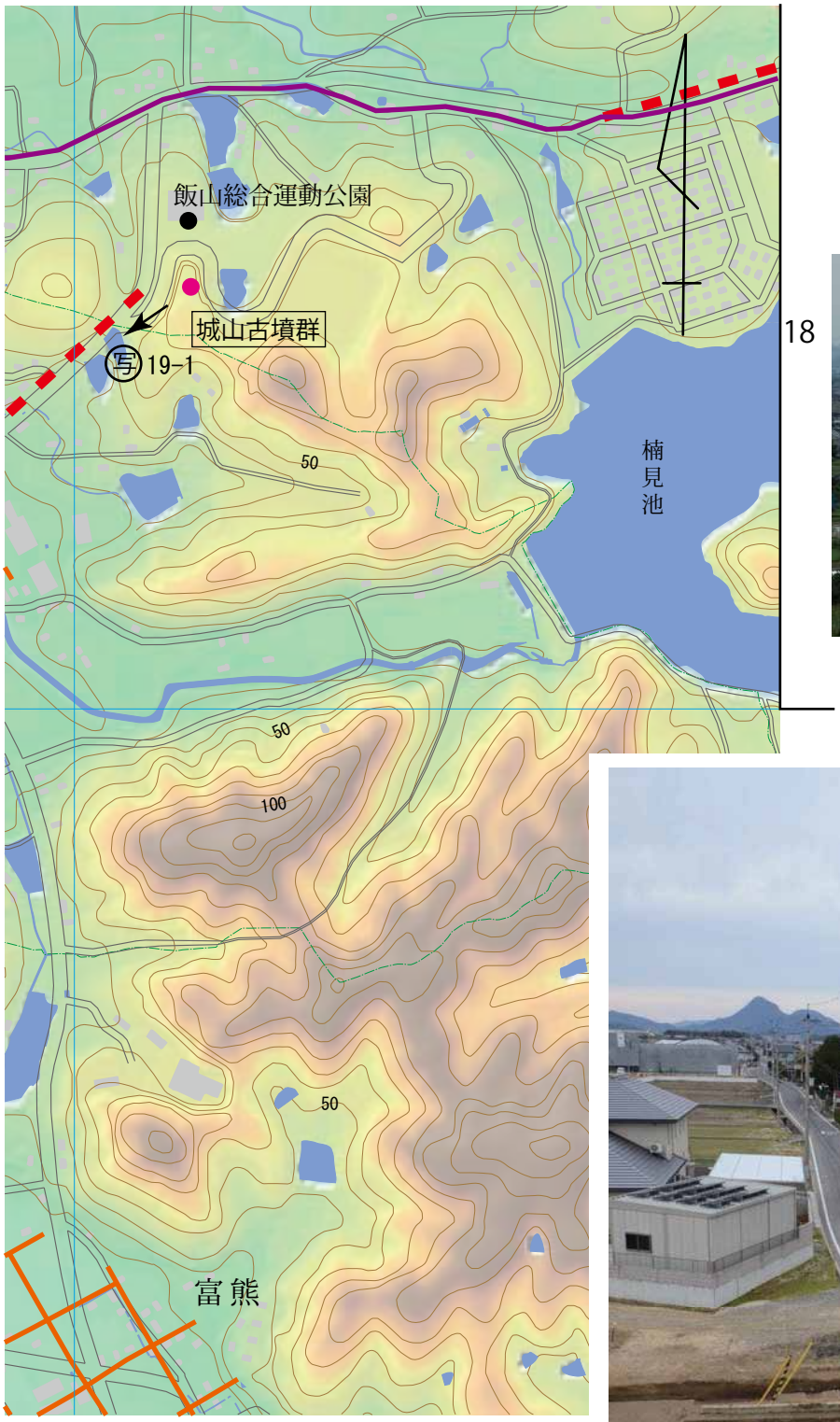
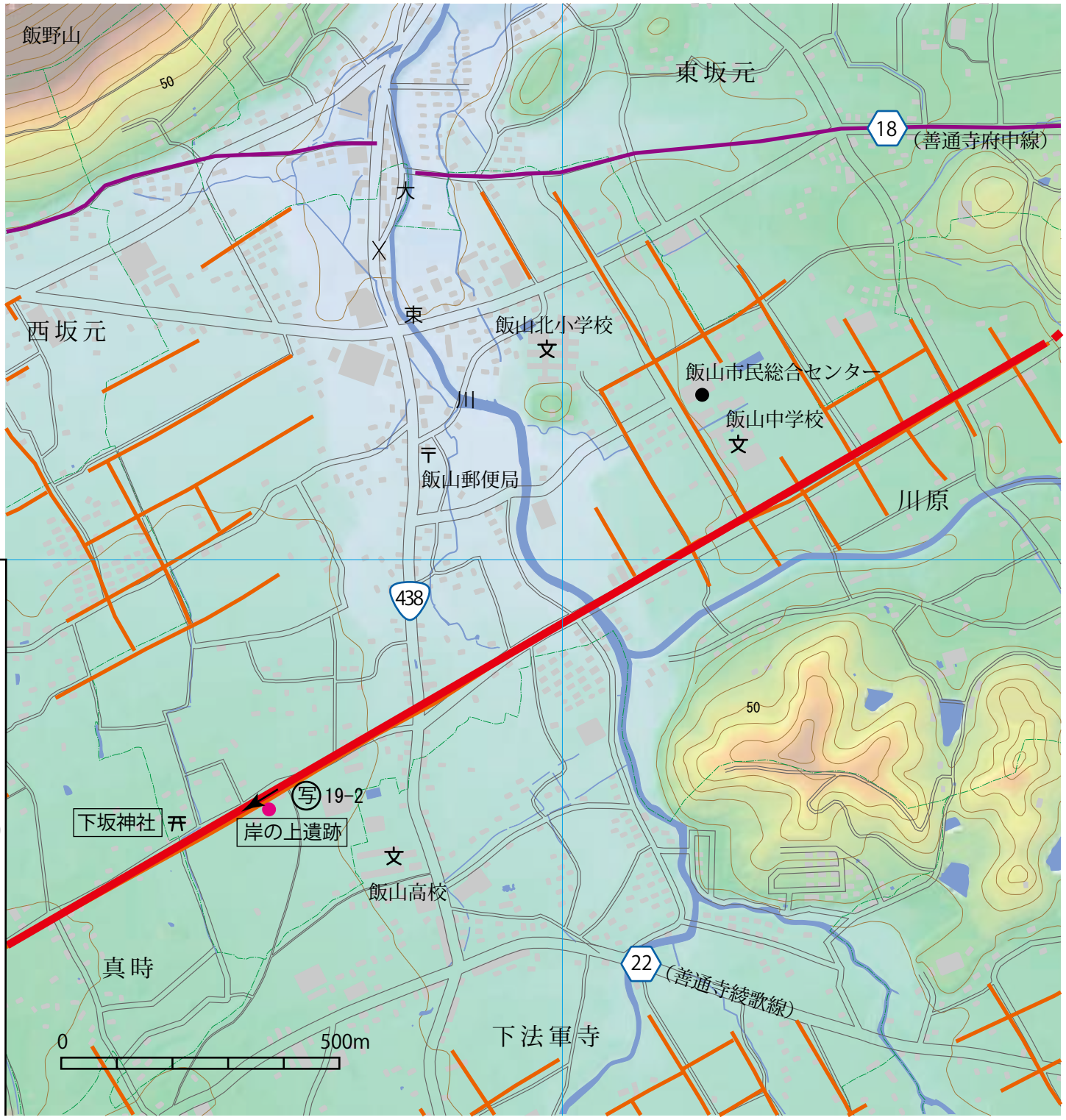


写真 19-1　飯山総合運動公園から西を見る
南海道が一直線に延びている。

写真 19-2　岸の上遺跡の調査状況
南海道の側溝の可能性のある溝状遺構が見つかった。

本区間でも丸亀平野一帯に真北から西へ約30度の傾きをもつ条里地割が認められる。飯山総合運動公園内の小高い丘から西の方向を見ると、善通寺の五重塔や我拝師山、そして大日峠に向かって南海道がまっすぐ伸びていく様子が一望できる。丘の周囲には4基の円・方墳からなる城山古墳群があり、交通の要衝であるこの一帯を支配していた人物が埋葬されていると推測される。



20

南海道を西進して、国道４３８号を西に越えると、田畑の中に高低差１ｍほどの段丘崖が見えてくる。これは、かつて大束川（だいそくがわ）が氾濫した際に川岸が浸食された痕跡である。

岸の上遺跡からは、南海道の側溝と考えられる溝が検出されており、現在の市道が南海道と一致する。

南海道の南側からは、南北方向に柱筋をそろえた３棟の建物跡（６世紀）が見つかった。うち２棟は桁行４間、梁間３間、面積約43㎡と統一された規格で整然と配置されており、その規模の大きさ等から、公的施設に付随する倉庫ではないかと考えられる。

また、同じく北側には、柵列によって区画された建物（８～９世紀）が検出されており、これらは条里の方向と一致している。

こうしたことから、南海道に面したこの周辺は条里地割が施行される以前から長期間にわたり、讃岐国または鵜足郡に関係する公的施設があった可能性が推測される。

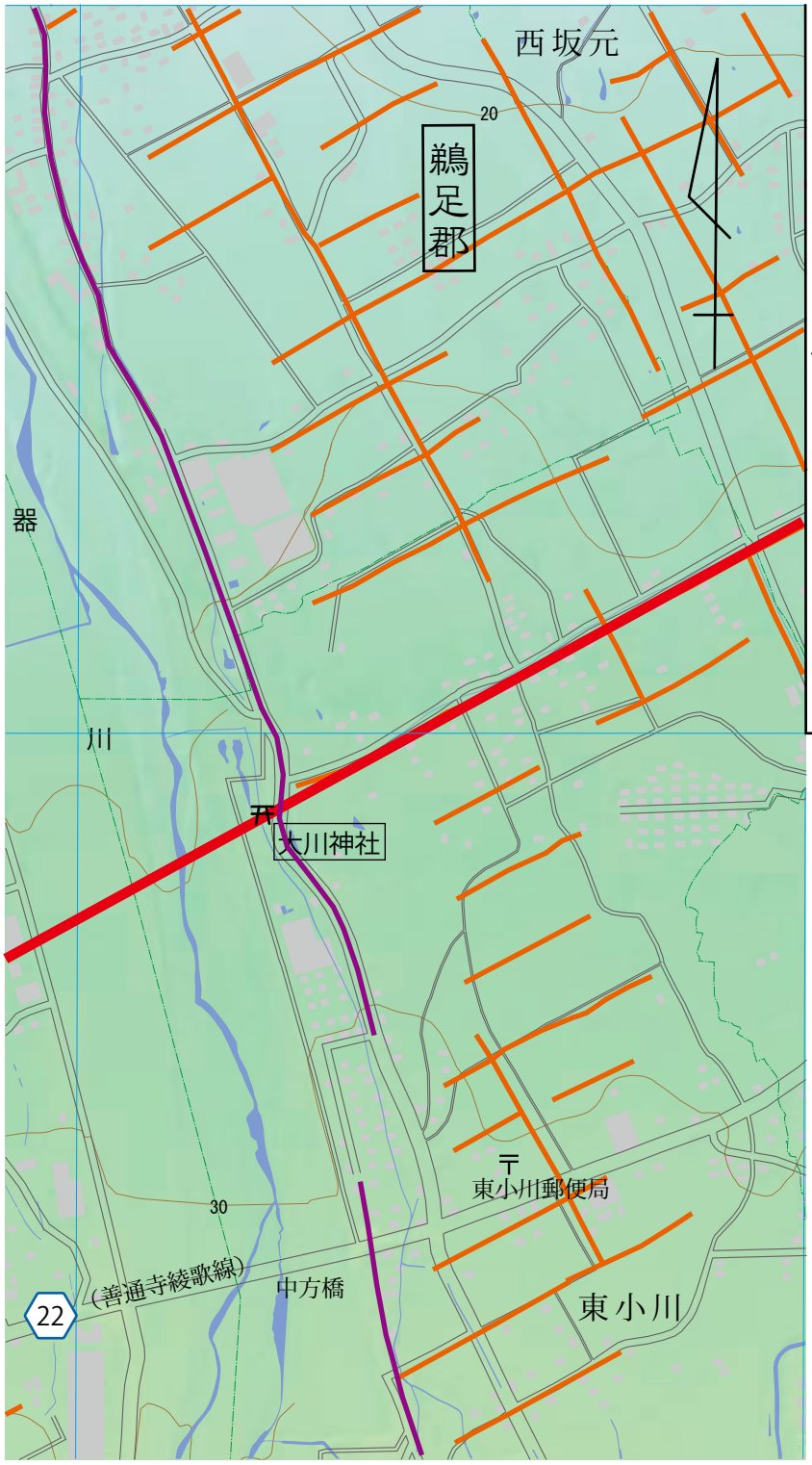


写真 20-1　宝幢寺池
減水期には、池の底にある礎石を見ることができる。

写真 20－2 ～ 4　今も残る地名
天満宮の玉垣の中に、「領家」「地頭」の地名が見られる。

本区間の丸亀平野一帯には、西に約30度傾いた条里地割が広く認められ、南海道も一直線に西進する。

土器川を越えて西に進むと、古代寺院・宝幢寺（ほうどうじ）の跡地である宝幢寺池が見えてくる。宝幢寺は白鳳時代（7世紀後半）に建立された有力な在地豪族の氏寺だったが、16世紀末、阿波から侵攻してきた三好氏によって大半が打ち壊され、さらに土佐の長宗我部氏の襲来によって残った堂宇も焼失してしまった。このため、1783（天明3）年、寺域の周囲に土堤を築いて池とした。

１９７８年に丸亀市教育委員会による発掘調査が行われたが、伽藍配置や寺域を確認することはできなかった。だが、法隆寺の分寺だったことから、金堂と塔が横に並ぶ法隆寺式伽藍であったと推測されている。冬の減水期には、池の底に残る塔の心礎を見ることができる。

また、宝幢寺池のおよそ２ｋｍ北には、宝幢寺と同時期に建立された神野（かんの）神社がある。式内社の一つとされており、８８７（仁和３）年、国司として讃岐に在任中の菅原道真も参拝している。

この一帯は丸亀市郡家（ぐんげ）町に属し、「領家」や「地頭」といった地名が残っている。そのため、場所は確定していないが、那珂（なか）郡衙が存在していたのではないかと古くから推測されている。

古代寺院と式内社、郡衙が近接するこのエリアでは、多くの人がにぎやかに南海道を行き交っていたのだろう。

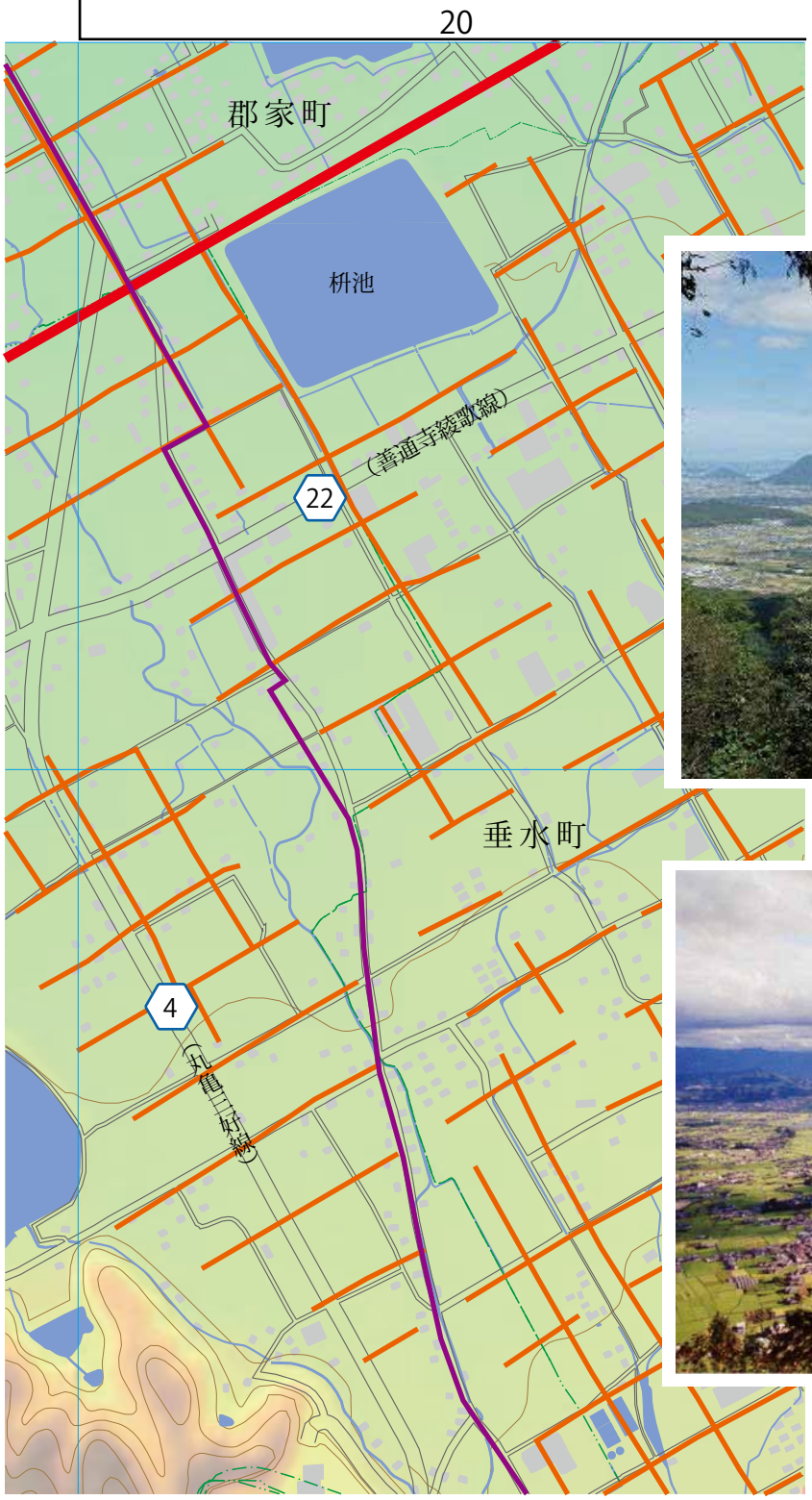


写真 21-1　金毘羅宮から見た丸亀平野
左端の三角形の山は讃岐富士（飯野山）。

写真 21-2　飯野山山頂から見た丸亀平野
条里地割に基づく方格の土地割が広がっている。

南海道は、丸亀市をすぎ、善通寺市に入る。

土器川と金倉川にはさまれた本区間も、条里地割が良好に残っており、南海道も一直線に平野を横切っていく。条里は郡境をまたいで、かつての鵜足郡、那珂郡、さらに多度郡にまで広がっている。そこここに築かれた溜池や、飯野山に代表されるおにぎり型の山々など、讃岐平野の特徴をよくみることができる。

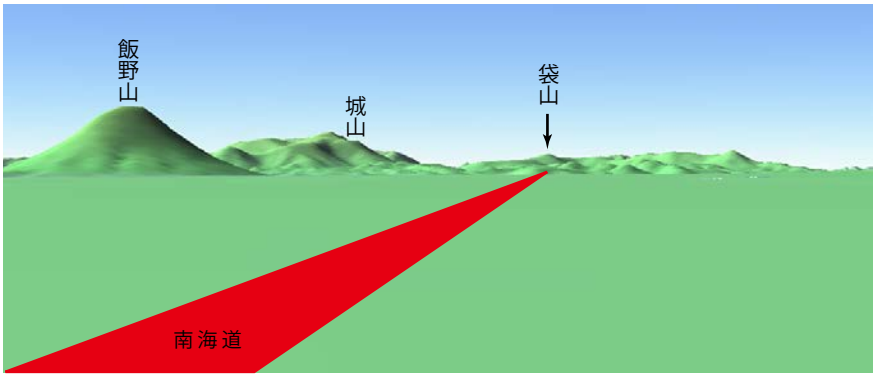
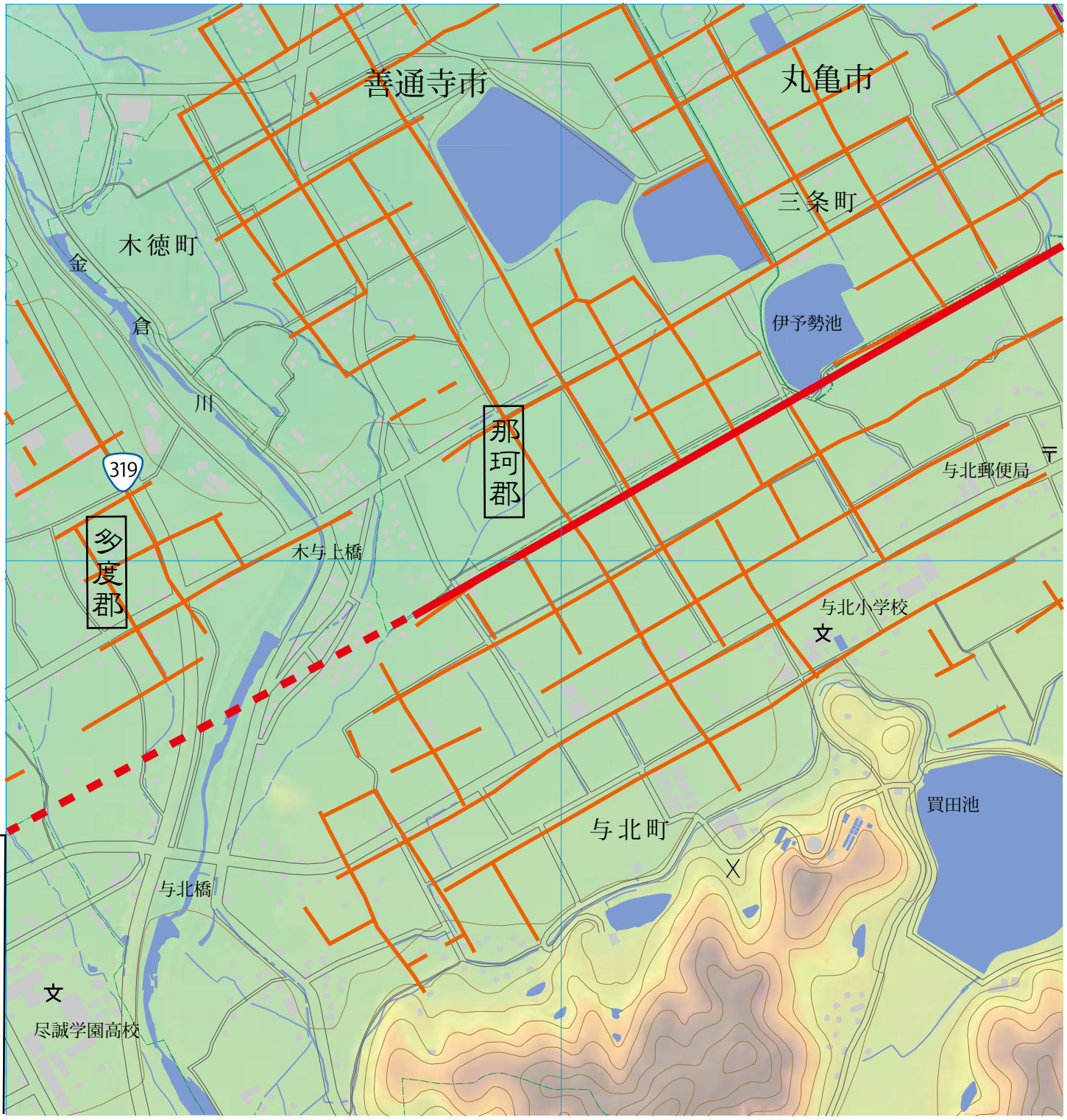


写真 21-3
南海道は、特徴的な山容などを見通すように設定されたといわれている。
丸亀平野から東方をカシミール３Ｄで見通すと高松市の袋山（261m）の頂上が顔を出しており、これをランドマークにしている可能性が新たに判明した。



コラム

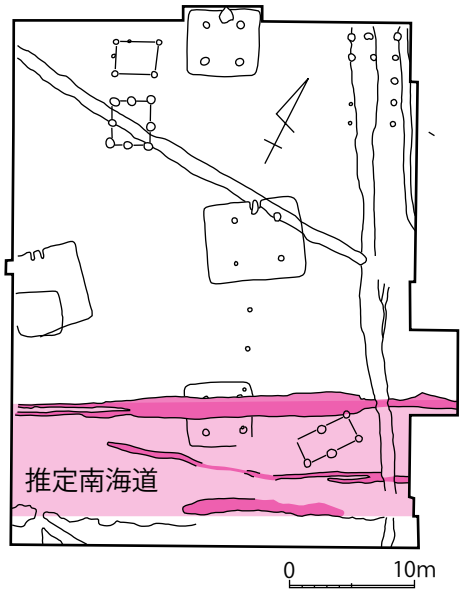
讃岐平野の条里制

香川県は、奈良県に次いで条里地割がよく残っている所である。

ここ丸亀平野でも、１０９ｍ四方に区画された田、条里地割に沿うように造られたため池などを広く見ることができ、千年以上も昔から使われた畦道や溝が今も機能していることに驚く。

条里の方向は、南海道に直交している。讃岐国の条里プランは、まず官道とそれに直交する郡界線が設定され、それを基準として条里地割がつくられた。条は、郡界線の東側から西へ一条・二条…と数え、里は南の山麓から北の海岸へと一里・二里…と数えた。讃岐平野の各地で、今も一条、三条などの地名が残っている。

このような大土木工事は高松、丸亀、三豊平野のいずれでもおおむね7世紀後半から遅くとも8世紀初めには始められ、8世紀後半頃に完成したという。この百年間は国土大改造の時代であった。



四国学院大学構内遺跡　主要遺構配置図
（善通寺市教育委員会『四国学院大学構内遺跡発掘調査報告書』2003 年、より作成）

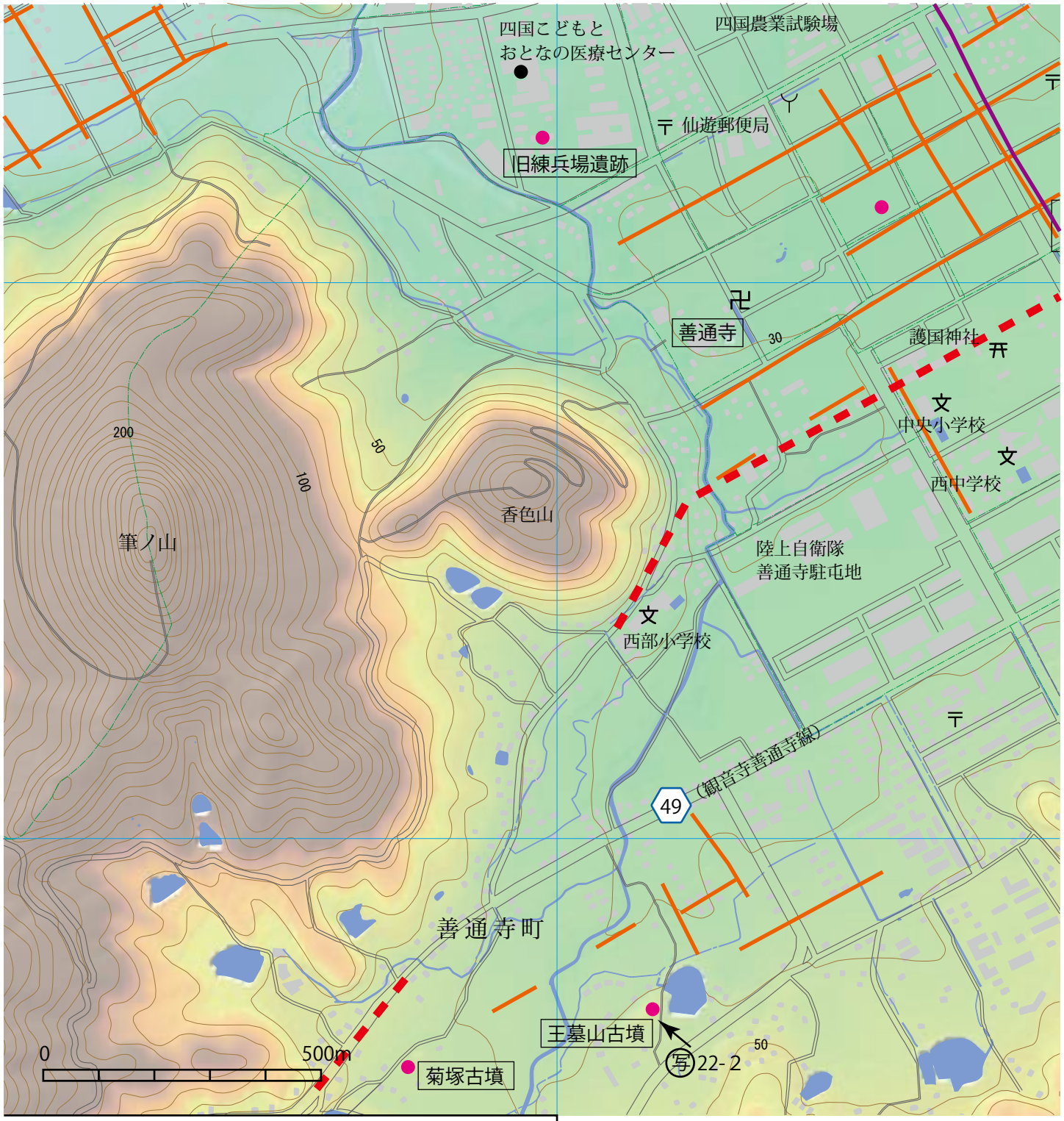
写真 22-1　四国学院大学から見た我拝師山
左側の建物（図書館）建設に先立って行われた発掘調査で、南海道の可能性のある溝状遺構が見つかった (上図)。

写真 22-2　王墓山古墳
有岡古墳群の中にあり、6 世紀半ばにつくられた全長 46mの前方後円墳。横穴式石室をもち、石室からは、土器や武具、馬具類の他、金銅製冠帽や銀象嵌の鉄刀が出土。史跡公園として整備されている。

本区間は、明治時代以降、旧陸軍第11師団が置かれたため、区画整理が行われ、南海道が通った付近の条里地割を確認することができない。

しかし２００３年、四国学院大学構内の発掘調査の際、南海道推定ライン上に東西方向に延びる二条の平行する溝が検出された。これは南海道の側溝と考えられる。溝と溝の間、つまり南海道の幅は８・５から９・０ｍである。

その５００ｍほど南に位置する生野本町遺跡からは、７世紀末から８世紀初めのものと考えられる大型建



物数棟分の柱穴列と区画溝の存在が確認された。条里方向に向きをそろえたこれらの配置には、明らかな計画性が見て取れる。

さらに、南接する生野南口遺跡からは、40㎡を超える庇付大型掘立柱建物が検出された。転用硯が出土していることからも、二つの遺跡を含む一帯は、庶民が居住する集落とは異なる性格をもつと考えられ、多度郡衙の関連施設と推定される。

また、甕井(みかい)駅の所在地は、遺称地もなく特定できていないが、本区間の善通寺市街とする説もある。

南海道の周辺には、その他、善通寺や仲村廃寺といった古代寺院も存在しており、この地域は多度郡の中核的な役割を果たしていたとみられる。

香色山(こうしきさん)山麓まで進んだ南海道は、山すそを通り、大池の東土手へと上がっていく。

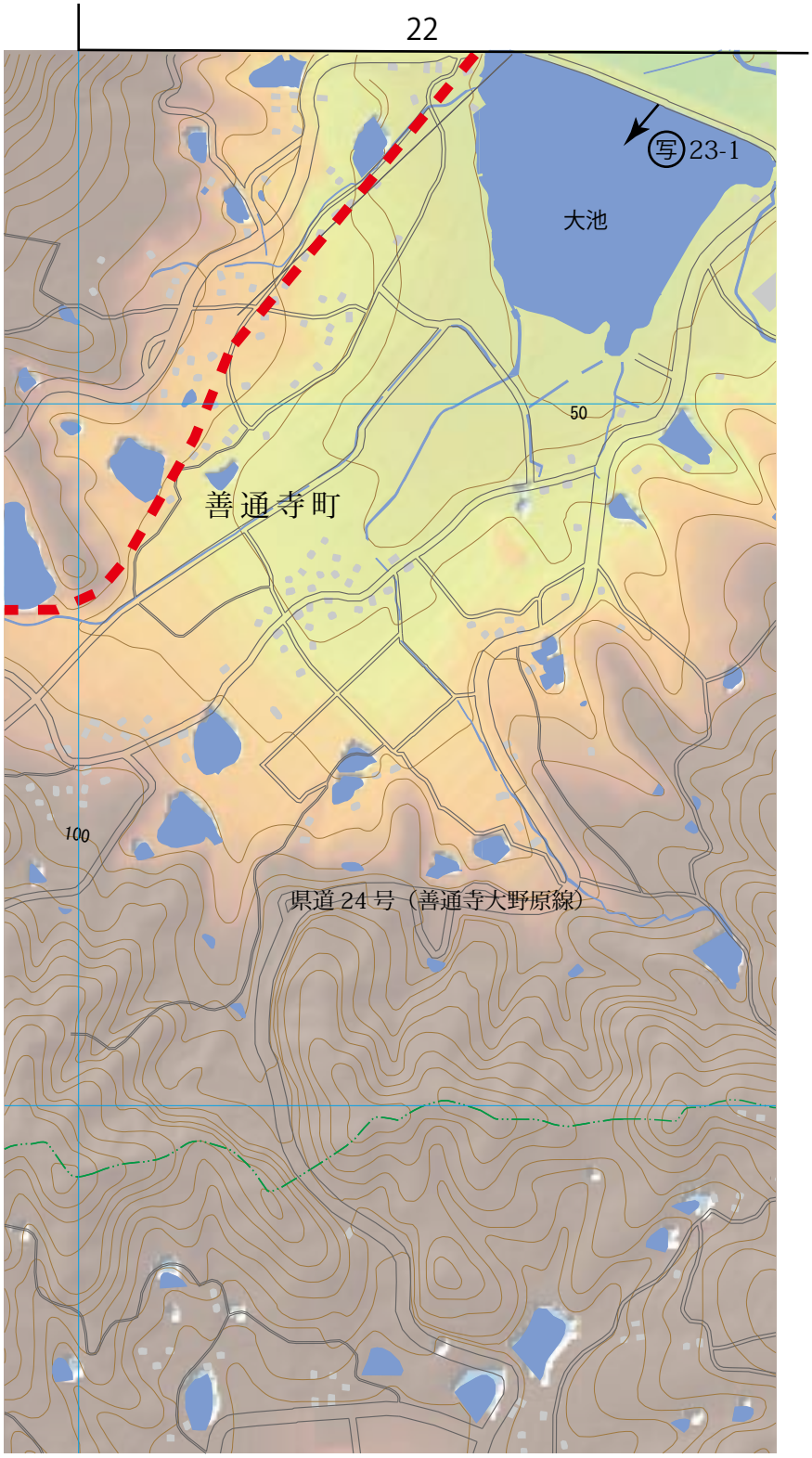


写真 23-1　大池より大日峠を遠望する

大池を手前に見て、我拝師山と東部山の山麓がせり出し谷筋を作っている。大雨などによりルートが寸断されることが多かったであろうことが推測される。

写真 23-2　青井谷古墳

大日峠を越え高瀬に入ると青井谷古墳が左手に見えてくる。23m以上の円墳と推定され、両袖式横穴式石室（玄室 2×1.7、羨道 4×0.8m）を持つ。周辺には数基の古墳があったと伝えられている。

南海道は、善通寺から大日峠を越えて高瀬に至る。この区間は、今までの平野部と違い、谷筋となるため、条里地割や関連する遺跡も確認できずルートを特定することが困難であるが、甕井（みかい）駅から香色山の南側を通り大池の西側を経て大日峠を目指したと推測する。

大池から谷筋を遡上する大日峠越えは、急坂を避けるため山裾を縫うように緩やかに迂回して高瀬方面を目指す。鎌倉時代の「善通寺伽藍并寺領絵図」には「大道」として峠越えの記載があるが、詳細な経路は読み取れない。古代官道の特徴である直線最短コースはこの辺りの地形に阻まれ建設当時の苦労がしのばれる区間である。

大日峠を下ってからは、青井谷古墳に繋がる比較的直線的なコースも考えられるが、勾配が急な為迂回し

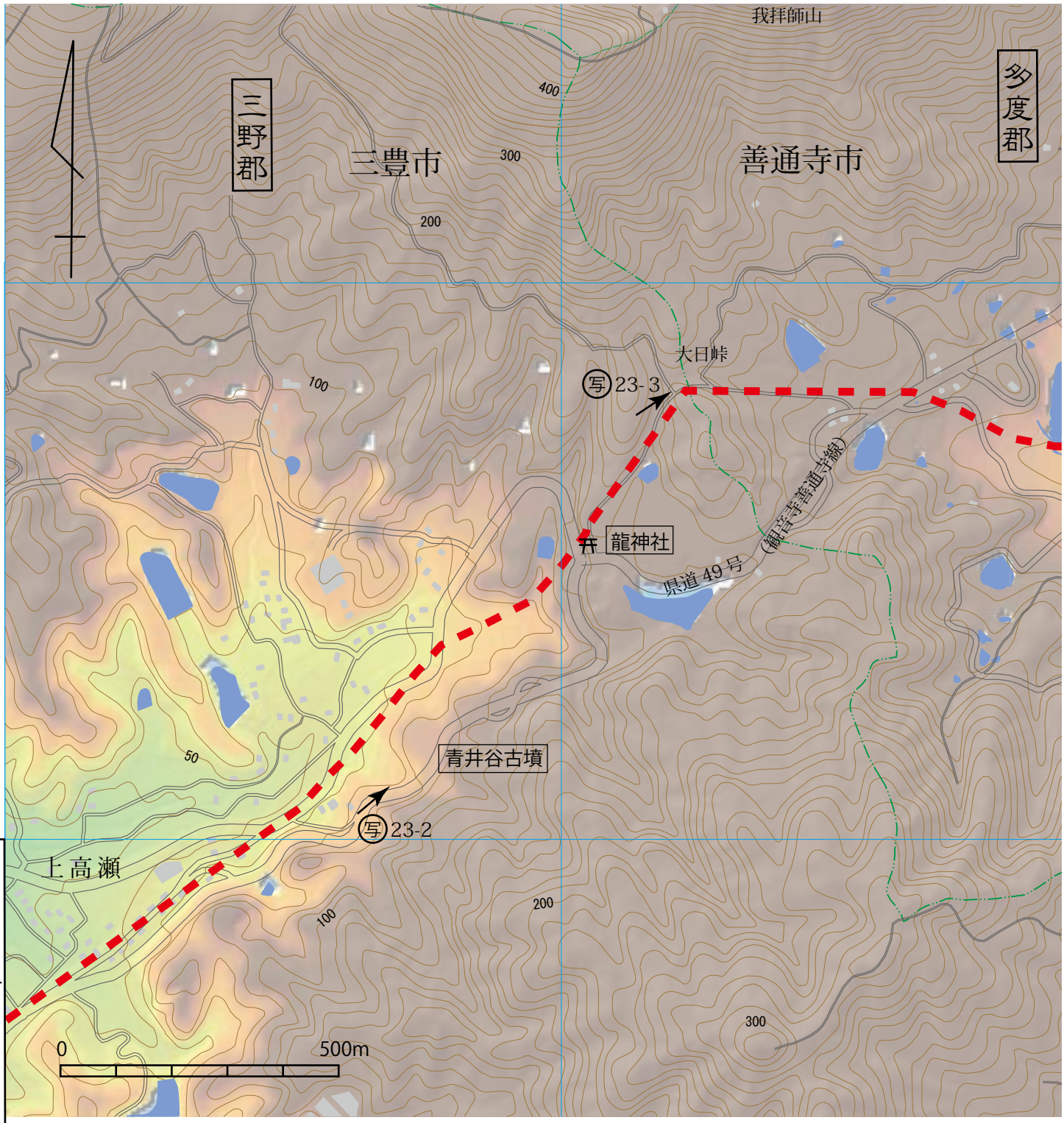


写真 23-3　大日峠（旧道）
今は通る人もいない路傍にひっそりと石仏が立っている。

たルートが推測される。青井谷古墳を経て高瀬町に入る県道49号（観音寺善通寺線）は明治22年に整備されたもので、それ以前は県道の西約10mに並行する、幅2m程の細い道路が使われていた。南海道に由来する道路ではないだろうか。

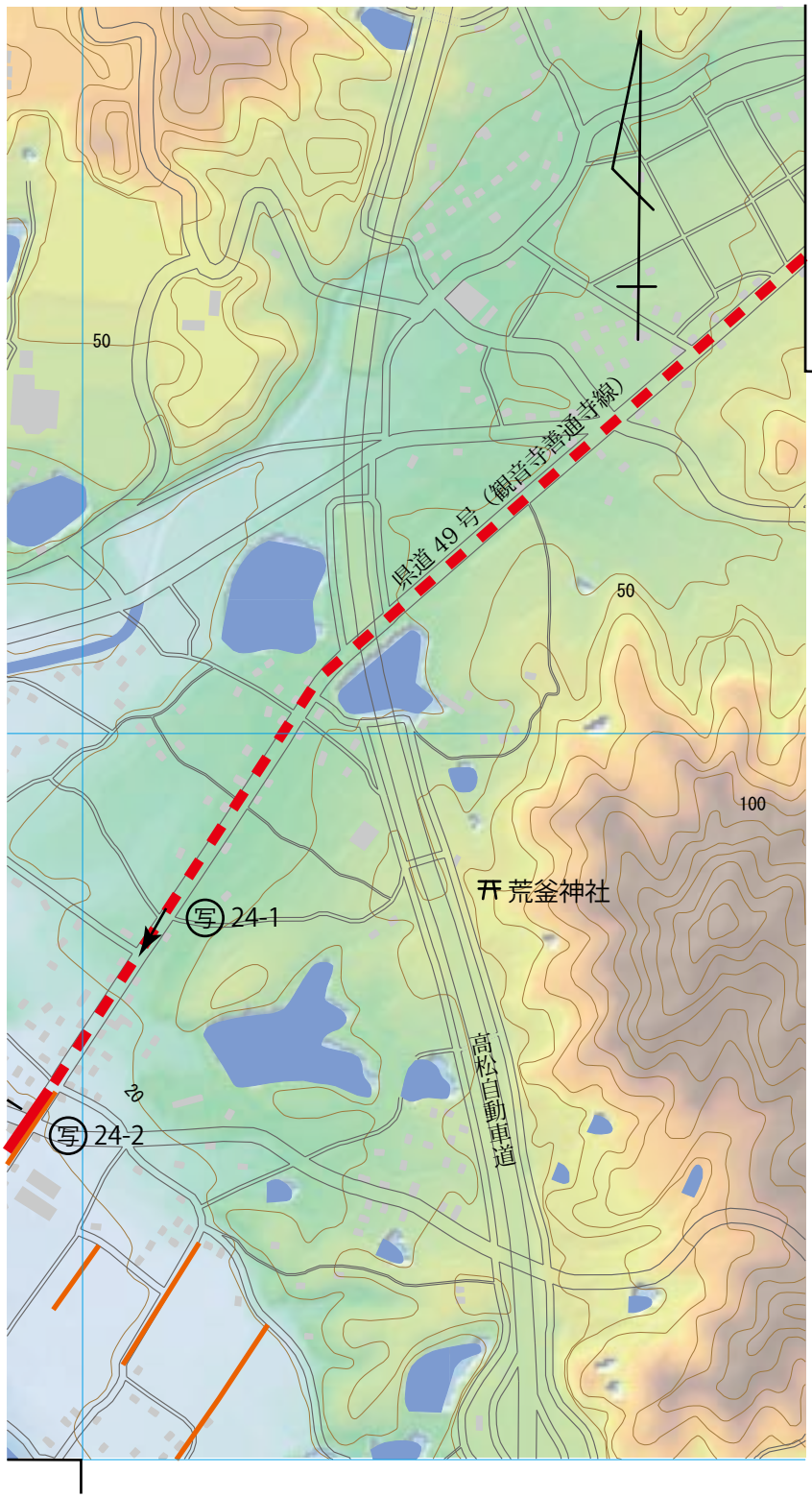


写真 24-1　直線に続く道筋

六ツ松（次ページ参照）に向かって直線的な下り勾配が続いており、往時の南海道のなごりを残している。

写真 24-2　南海道から西方を望む

条里地割は確認しづらい。

大日峠を越え平野部に入る。かつての三野郡である。

本区間は、周辺の地形等から、県道49号（観音寺善通寺線）に沿って南西にほぼ一直線に南海道が通っていたと推測される。条里の地割が推定ラインに沿って随所に見られるが、若干の起伏や川があるせいか、他の地域ほど整然とした地割は広がらない。

コラム

宗吉瓦窯

南海道と交差する県道23号（詫間琴平線）を車で5分ほど北西に走ると、宗吉瓦窯跡史跡公園がある。宗吉瓦窯は、妙音寺の創建にともない瓦の生産を始め、丸亀市郡家町にあった宝幢寺など、南海道周辺の古代寺院で、宗吉の瓦が使われた。また、持統天皇が694年に造った藤原京でも宗吉の瓦が使われている。宗吉の近くの港で船に積み込まれた瓦は、瀬戸内海、大和川をへて藤原京へと遠く200kmの距離を運ばれたのである。

当時としては日本一多い24基の瓦窯があり、その内の一つは長さ約13mで、日本一長い瓦窯である。

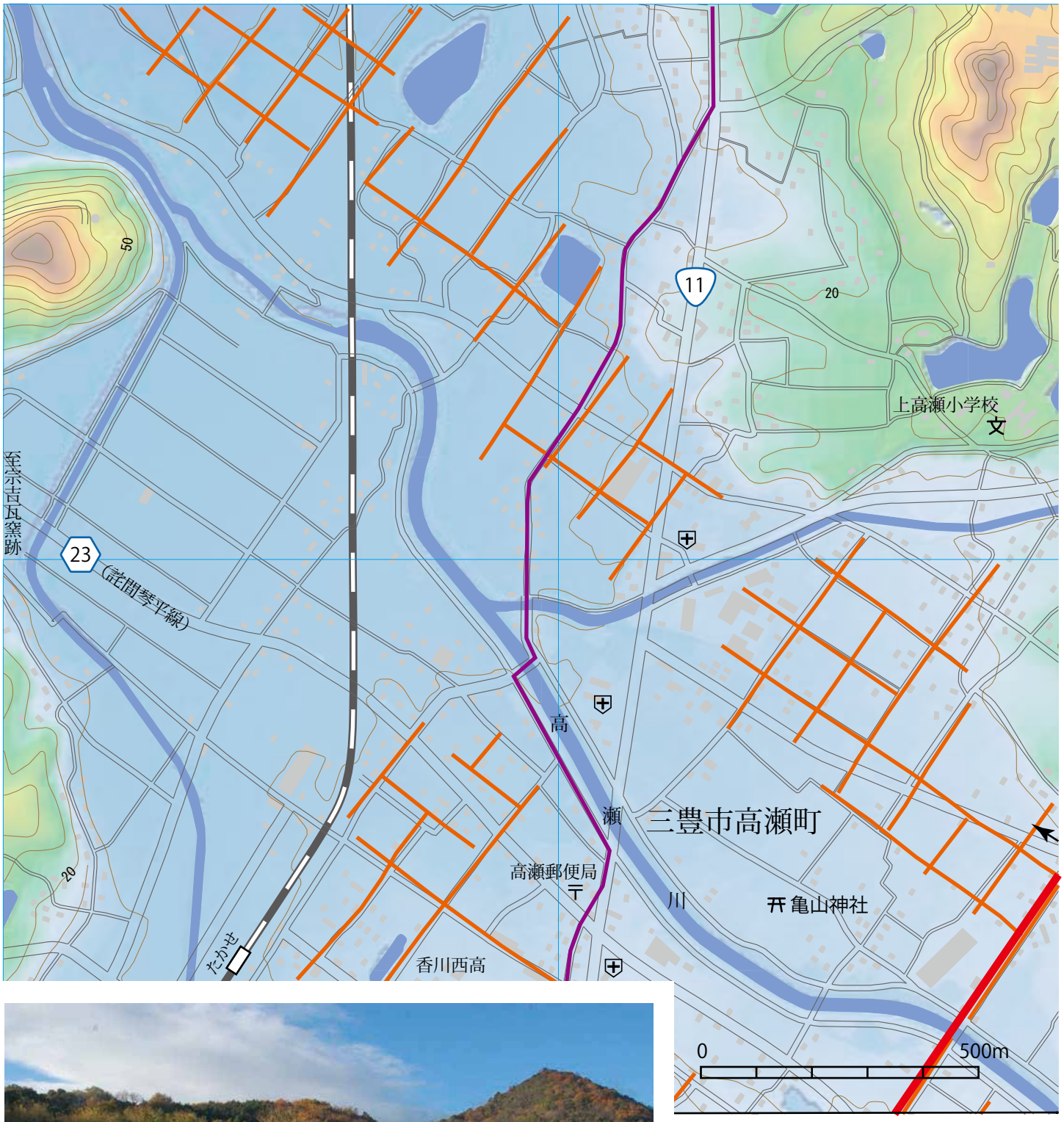


写真 24-3　宗吉瓦窯跡史跡公園

1 基の窯跡が露出展示されているほか、瓦窯跡を植栽で表現している。

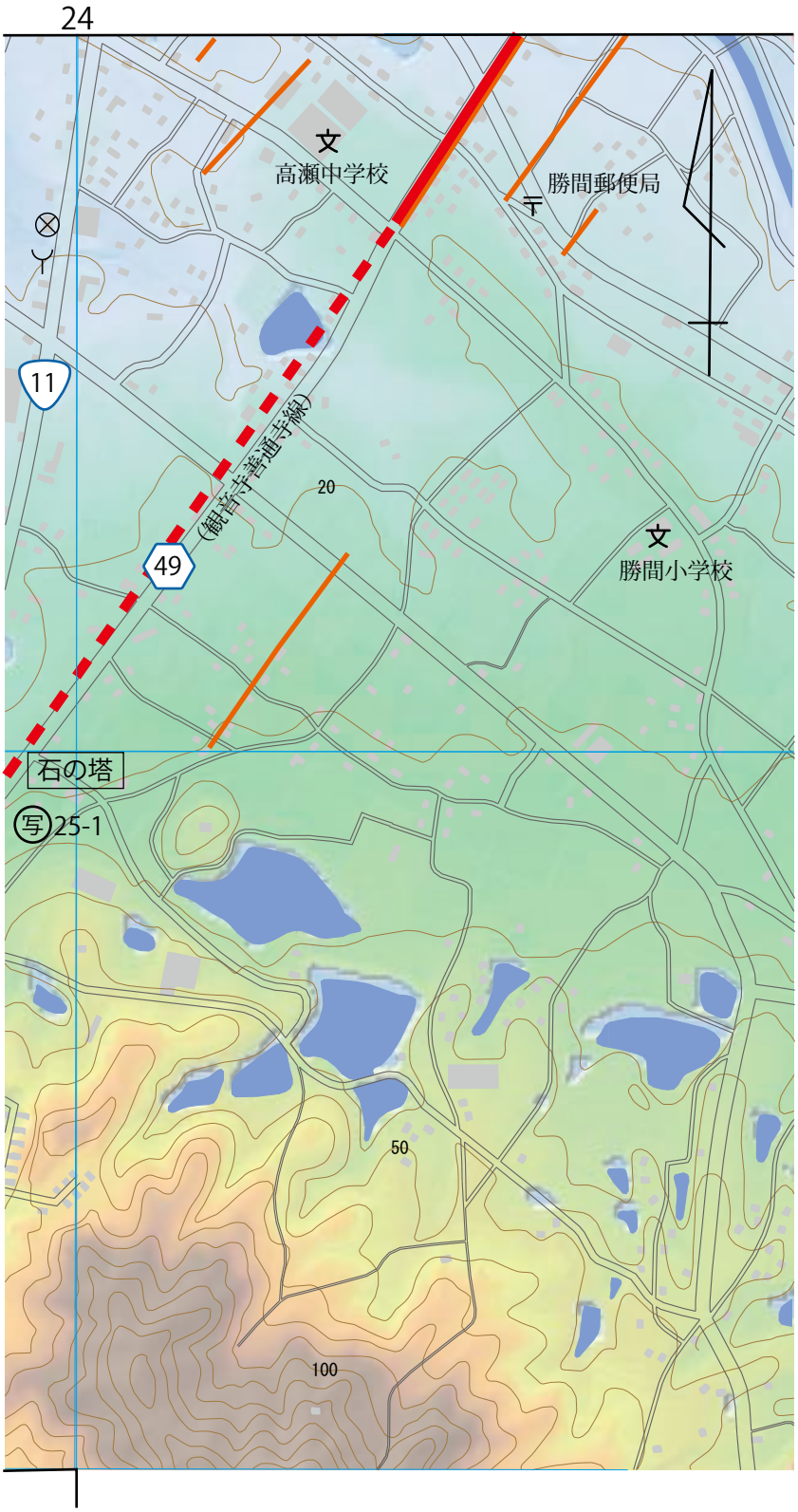


写真 25-1　六ツ松交差点
青井谷から一直線に進んできた南海道も六ツ松交差点で角度を変え、再度観音寺市に向かって直線的に進む。

写真 25-2　国道と南海道推定ラインの分岐点
三差路から右に入る国道 11 号は伊予街道を利用して整備されたと思われる。ここからさぬき豊中 IC まで緩やかな左カーブとなっているのに比べ、南海道はほぼ直線的に敷設されている。

南海道は、大日峠から県道49号（観音寺善通寺線）を下り国道11号と六ツ松の交点路で合流する。権兵衛神社をすぎて国道11号と別れてからもほぼ直線のコースをとり、高松自動車道さぬき豊中ＩＣ入口で再び国道11号と合流する。

六ツ松交差点から観音寺方面に約５００ｍの所に権兵衛神社（七義士神社）が建立されている。この神社は、１７４５（延享２）年から４年に及ぶ大旱魃や大豪雨による凶作のため、年貢の減免を求めて百姓一揆が勃発。その首謀者として打ち首獄門となった大西権兵衛ら７人を祀ったものである。

コラム
道音寺

豊中町笠田笠岡字天神に小さな庵のような寺、道音寺がある。かつては大きな寺域を持つ古代寺院であった。

伽藍配置は不明ながら、見つかった瓦から妙音寺に少し遅れて白鳳期に建設が始まり、善通寺の影響を受けていたことが推測されている。多く見つかっている瓦は奈良時代のもので、妙音寺（次ページ記載）から見つかった瓦と同范である。

写真 25-3　権兵衛神社
義士大西権兵衛らを祀る。

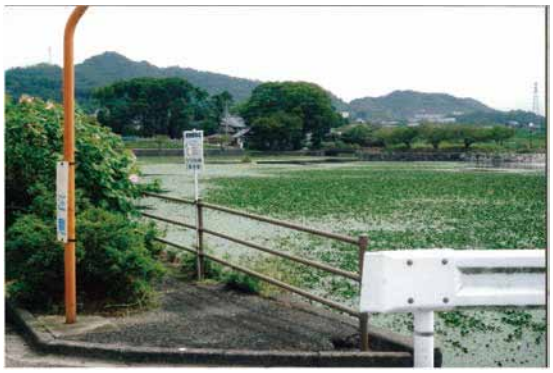


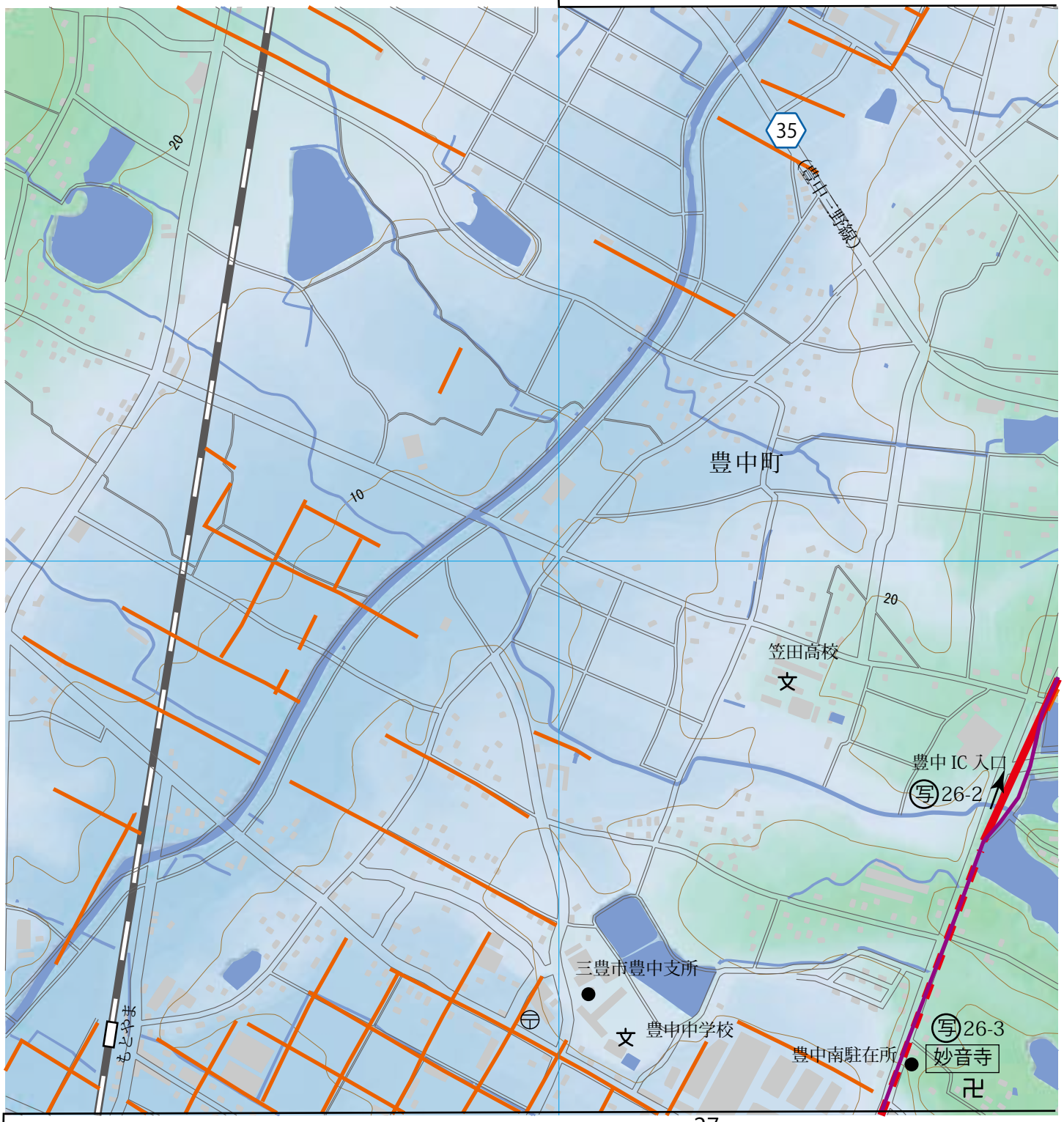
写真 26-1　大津池土手沿いから宇賀神社を望む
宇賀神社は笠岡の鎮守で、濁酒の古式醸造が伝わる。

写真 26-2　さぬき豊中 IC 入口
さぬき豊中 IC 付近で南海道は国道 11 号（伊予街道）に合流する。

26-3　妙音寺
妙音寺跡は讃岐最古の寺院である。

南海道は、権兵衛神社前の三差路で国道11号と分かれ、さぬき豊中ＩＣ入口付近で再度合流する。国道11号より直線を意識した道路であったことがうかがえる。また、「大道」「道上」という字名が南海道に接して残っている。

南海道の東側に妙音寺がある。妙音寺は、真言宗大覚寺派の寺院で七宝山宝積院妙音寺と号する。寺伝によれば、白鳳5年に創建されたとされ、出土した瓦からも讃岐国最古の寺院と推定されている。平安時代初期の弘仁年間（８１０～８２４）に嵯峨天皇の勅願所となり、空海によって現在の寺号となったと伝えられ



ている。創建当時の伽藍配置は不明ながら、周囲の地割などから相当広い寺域を有していたと考えられる。7世紀中頃の瓦が出土し、それに続く7世紀後半の瓦も宗吉瓦窯で焼かれたものである。白鳳時代初期から平安時代に至るまで存続したと推定されている。

コラム

南海道とランドマーク

讃岐平野にはきれいな円錐形をした山が多い。これは全国でも珍しいそうだ。駅路の特徴は、直線状のルートとたどることで、讃岐平野ではそれが特に顕著である。直線のルートを設定するには地形上の目標、ランドマークが必要である。古代人はこの円錐形の山に注目し、ランドマークとしたようだ。

南海道は、田面峠を越えて寒川郡の平野にでると、はるか彼方に見える白山（三木富士）の南麓を目指して進む。次は、六ツ目山（御厩富士）を目標に高松平野を横断する。額坂峠を越えてからは香色山の南麓あるいは我拝師山を目標に丸亀平野を横断したようだ。大日峠を越えると、高瀬川流域の平野では一度屈折し、さらに六ツ松で屈折した後は、17㎞先の大谷山を目標に一直線に三豊平野を進む。

南海道を歩き、次のランドマークである山を視認できた時は大いに感動したものである。

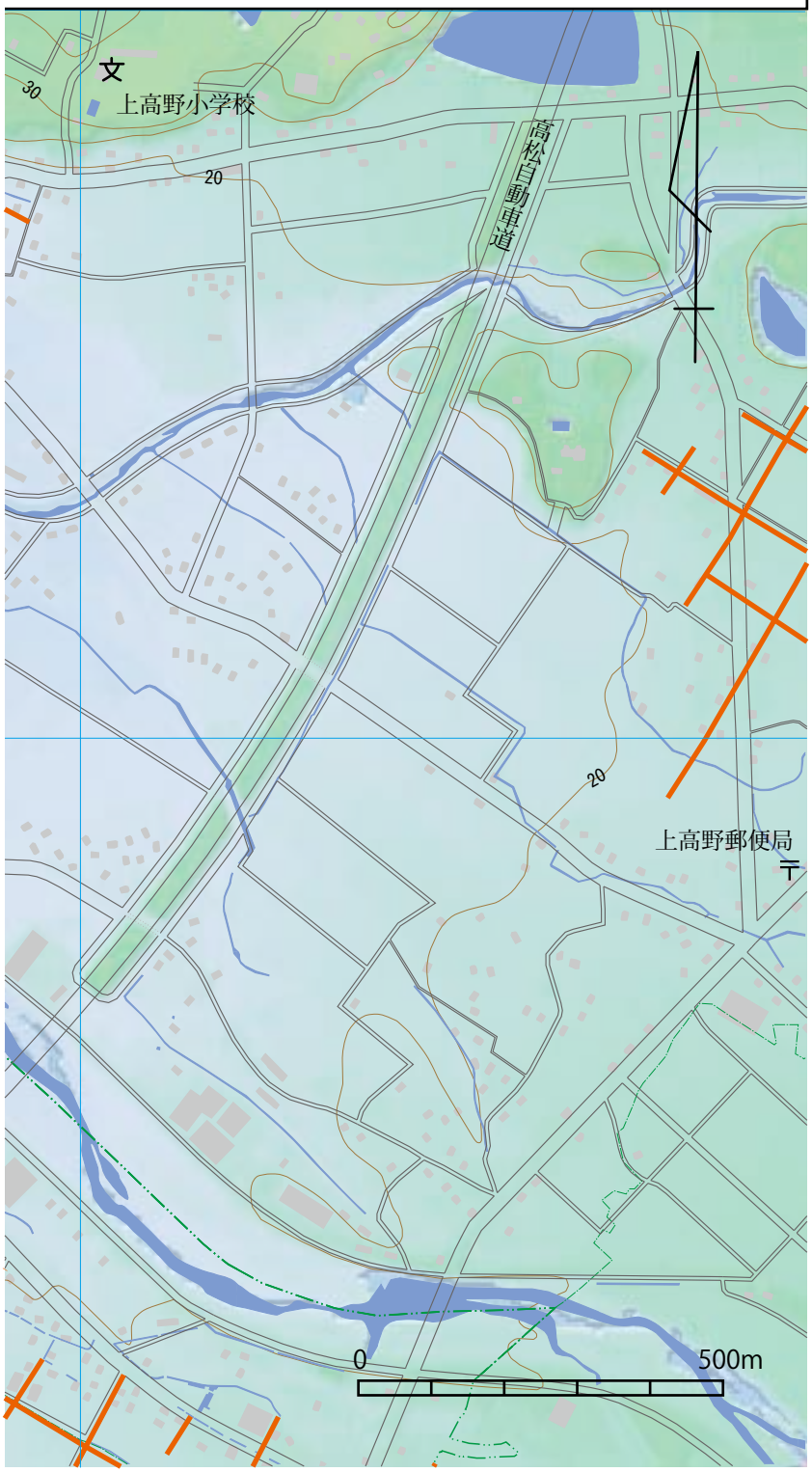


写真 27-1 「六ノ坪」交差点から望む観音寺方面
「六ノ坪」の地名は、条里制に係わる地名である。

写真 27-2 南海道からみた本山寺
807（大同２）年平城天皇の勅願により空海が開基したと伝えられている。第 70 番札所。鎌倉時代再建の本堂は国宝。五重塔は明治 43 年に再建されたものである。

写真 27-3 大型商業施設屋上から条里の地割を望む
六ノ坪から西に広がる条里の地割も現在では民家等が建ち並び確認しづらい。

本区間では、整然とした条里地割が確認できるが、余剰帯の検出には至っていない。しかし、南海道は、引き続いて国道11号（近世には伊予街道）と重なって、南西に一直線に進む。南海道を利用して後に伊予街道として整備されたと推測される。

本区間は現在大型商業施設や住宅が立ち並び、条里の地割を視認しづらいが、反面整備しやすい条里の地割を基にした土地区画が、大型商業施設誘致の一要因となったとすれば、ある意味で興味深いものがある。

財田川を越えて観音寺市に入る。かつての刈田郡である。直進する南海道は一ノ谷川を渡る付近（A地点）

で国道11号と分かれ、まっすぐ南西へのびていく。A地点から220mほど南下したB地点では、大正12年に麦畑を耕作中、偶然に銅鐸が見つかっている。（古川銅鐸・東京国立博物館蔵）。

コラム
郡と郷

令制下の地方は、国・郡・里（郷）に分けられていた。讃岐国は上国で、11の郡があった。888（仁和4）年国司菅原道真が城山の神に降雨を祈った時の祭文に、「八九郷二〇万口」とあり、郷が89、人口20万ほどであったようだ。

讃岐国ではすべての郡が瀬戸内海に面している。港が発達し、現在も多度津や中津、宇多津など郡名を冠した港がある。陸上交通も海上交通も盛んな国であった。

南海道が建設されようとしていた頃、三野郡では讃岐最古の妙音寺が造られ、その瓦を焼くために造られた宗吉瓦窯は、藤原宮の瓦を調達するため大量生産を開始する。7世紀後半の三野郡には、中央政府とつながり、先端文化をいち早く取り入れた有力豪族がいたようだ。官道建設などの大土木工事にも関わっていたことだろう。

有力豪族の協力なしには国土大改造はできず、彼らはやがて郡司に任命され地方政治を担っていくのである。

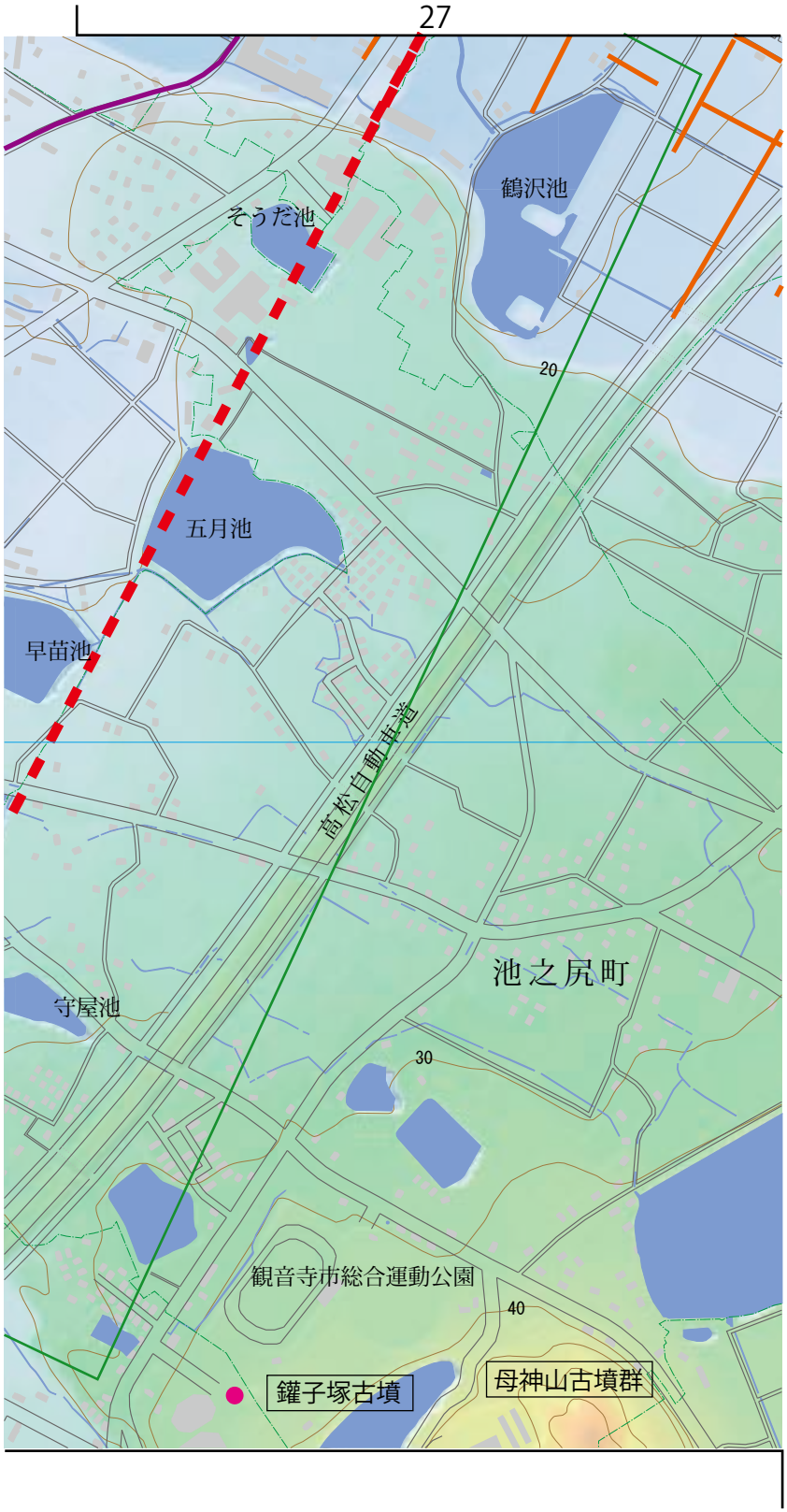
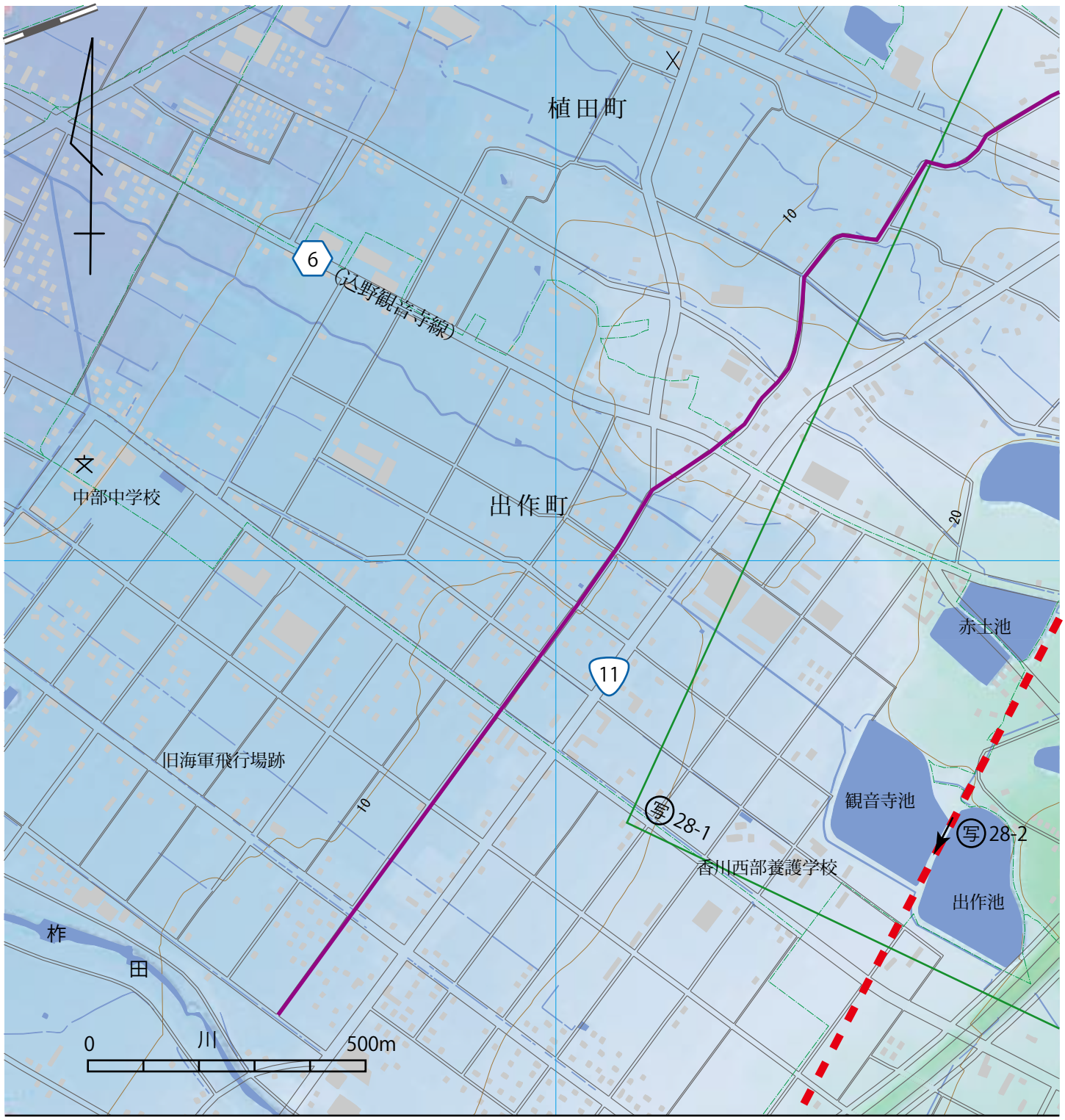


写真 28-1　財田川・出作池間の想定駅路
　空中写真は国土地理院 1964 年撮影。日野尚志氏の研究参照。

写真 28-2　観音寺池と出作池の間の土手から南方を望む
　堤防筋が村境となり、南海道推測の手がかりとなる。

古川町を過ぎ、池之尻町に入る。この辺りは、母神山（90m）の低丘陵（石田原）の裾を通っているため、条里地割は見当たらない。西の柞田町一帯は、太平洋戦争末期に海軍飛行場が突貫で建設され、終戦後は跡地を整地して農地整理が行われた。そのため条里地割が壊されており、南海道の痕跡を探すのは難しい。

しかし、前ページからの南海道直線ラインを延伸すると、溜池（そうだ池・五月池・早苗池・赤土池・出作池・観音寺池）の堤防筋（村境）を通過すること、この直線ラインが



JR観音寺駅付近に遺存する条里地割を延伸したラインと直交し、旧柞田村、旧出作・旧坂本村の村境とも重なっていること。さらに鎌倉時代の古文書「日吉社領讃岐国柞田庄四至牓示注文」によると、四隅を結ぶラインが刈田郡の山本郷・紀伊郷・柞田郷・坂本郷の郷境を示しており、東北の角隅は五条七里一坪、また、東南の角隅は「土井之池東南辺りで路を取り込んでいる」と明記されていることなどから南海道のラインが推定できるのである。

コラム

母神山古墳群

高さ90mほどの丘陵周辺に大小およそ60基の古墳が群在する。そのほとんどは6世紀から7世紀の古墳時代後期の円墳である。中でも鑵子塚（かんすづか）古墳は直径約30mの円墳で、6世紀後期の古墳としては県内最大級。運動公園内に保存されており、石室を覗くことができる。巨石を組んだ横穴式石室は一見の価値がある。

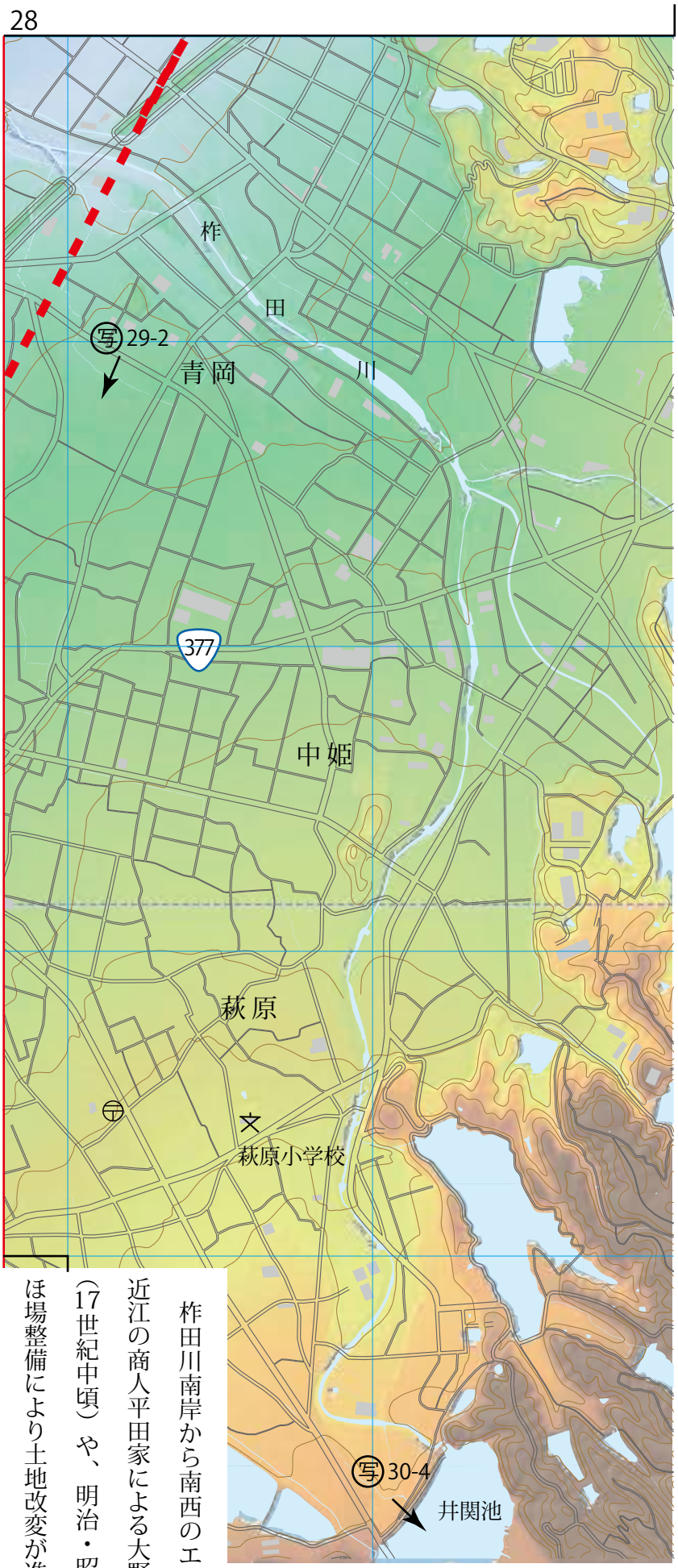


写真 29-1 「柞田駅跡」の看板

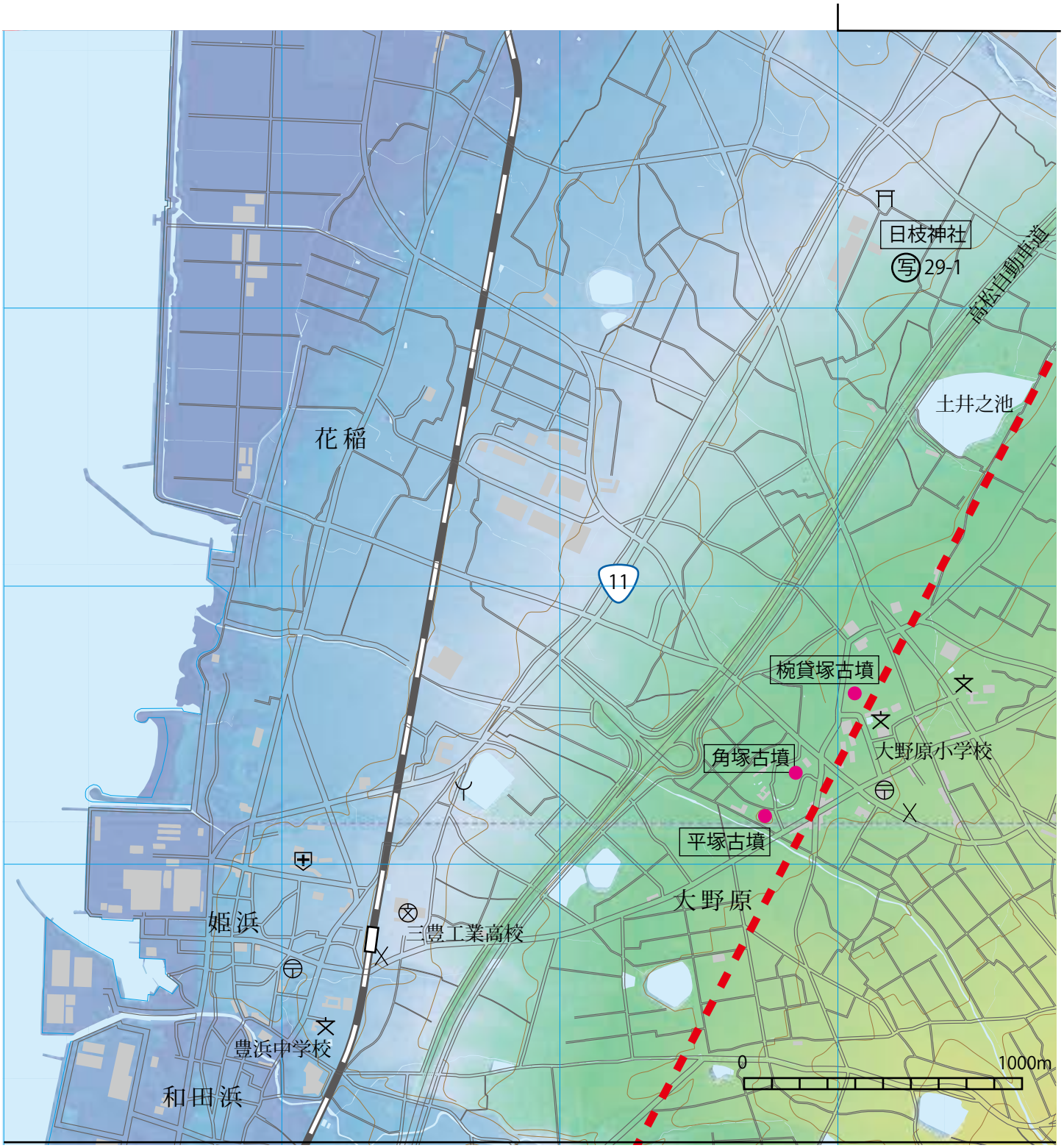
柞田町山王の日枝神社境内にあり、この付近に柞田駅があったと考えられている。

写真 29-2　南海道付近の景観

今は整備された水田の中に神社が点在する。

南海道が柞田（くにた）川南岸から土井ノ池東側を通過する本区間は、平野部ではあるが、条里地割は見当たらない。しかし、観音寺池・出作池間の堤防ラインと土井ノ池東南のラインを結ぶと南海道推定ラインとなる。さらに延伸していくと「大野原の辻」（阿波道とこんぴら道交差点）に至る。

柞田川南岸から南西のエリアは、近江の商人平田家による大野原開墾（17世紀中頃）や、明治・昭和期のほ場整備により土地改変が進み、条



里地割は見当たらない。また、鎌倉時代からは鳥坂峠を越える伊予大道が重要な役割を担うようになり、南海道は急速に衰退したと考えられる。先に見た「日吉社領讃岐国柞田庄四至牓示注文」で示された、東南の角隅にあった牓示は、大正2年の道路新設時に移転され、現在は菅原神社に置かれている。

土井ノ池の南東にあった四至牓示の南限から先は、『和名抄』で記載された姫江郷である。この姫江郷内を南海道が伊予国の大岡駅に向けて伸びる。大野原周辺には多数の古墳が存在していたようだが、そのなかで椀貸塚、角塚、平塚、岩倉塚古墳など大型の横穴式石室（いずれも600年前後の築造）をもつ古墳が今日まで残っている。奈良時代の人たちにとっても古墳は旧蹟のひとつであっただろう。この大野原古墳群を見ながら県境の余木崎までは約7km。燧灘の海岸線が徐々に近づく。

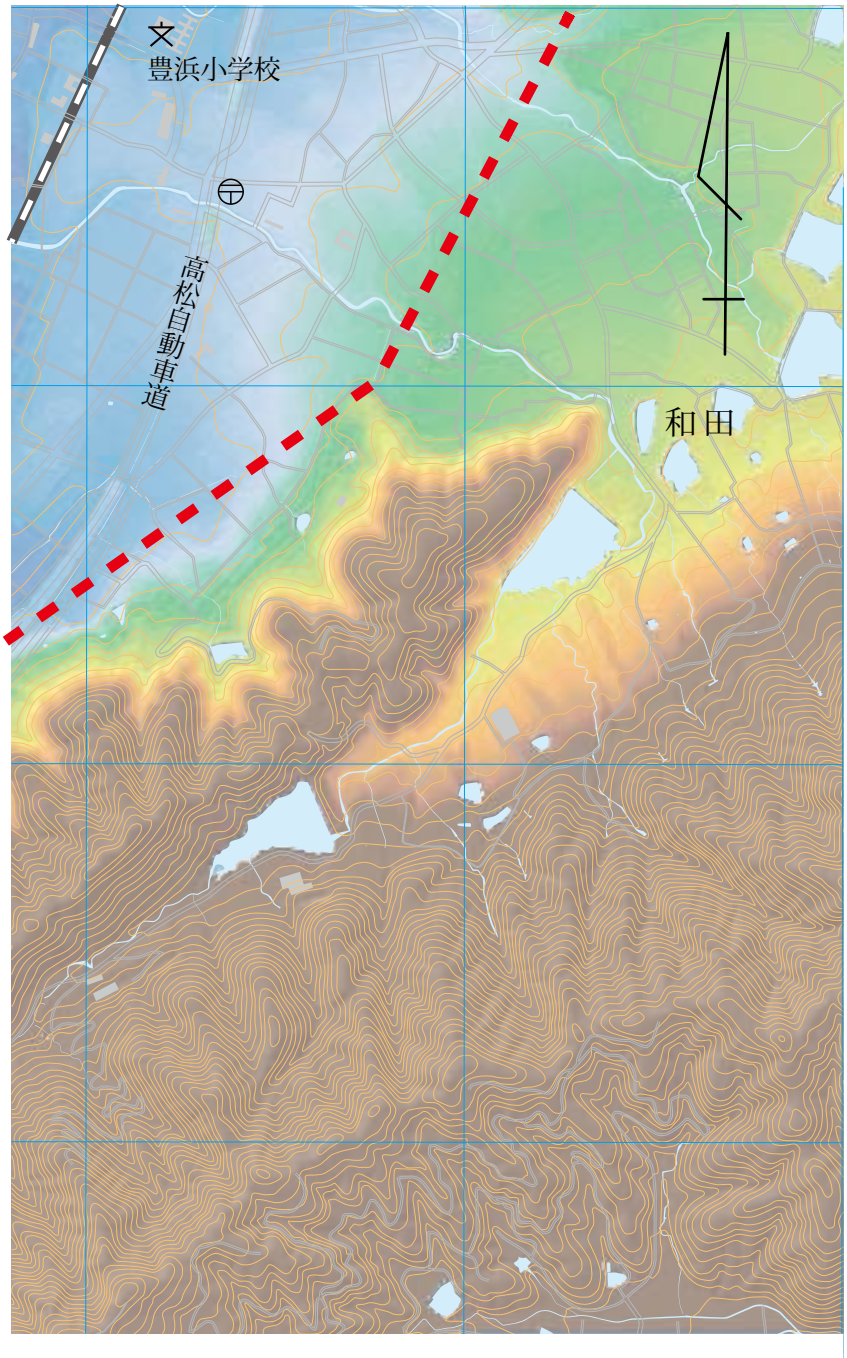


写真 30-1　余木崎に向かう伊予街道（近世の街道）
左の七福神社は幕末の創建。

写真 30-2　JR、国道が並行して海岸線を走る。
平地はなく、どこを南海道が走っていたのだろうか。

写真 30-3　県境の余木崎
尾根が海岸までせり出している。

古代南海道の柞田駅が推定される土井ノ池辺りから南下して伊予国境方面へ延びていく南海道は、新田開発、開墾、区画整理などで土地改変が江戸期から現在まで続いたため条里地割が残っておらず、推定が困難である。しかし、三豊平野部の北部条里のラインが愛媛県との境にある瀬戸内海寄りの大谷山（標高５０７ｍ）をランドマークにしていることを前提にすると、豊浜町の白坂川、吉田川の先からは箕浦、川之江町余木崎まで海岸近くを通ったと考えられる。

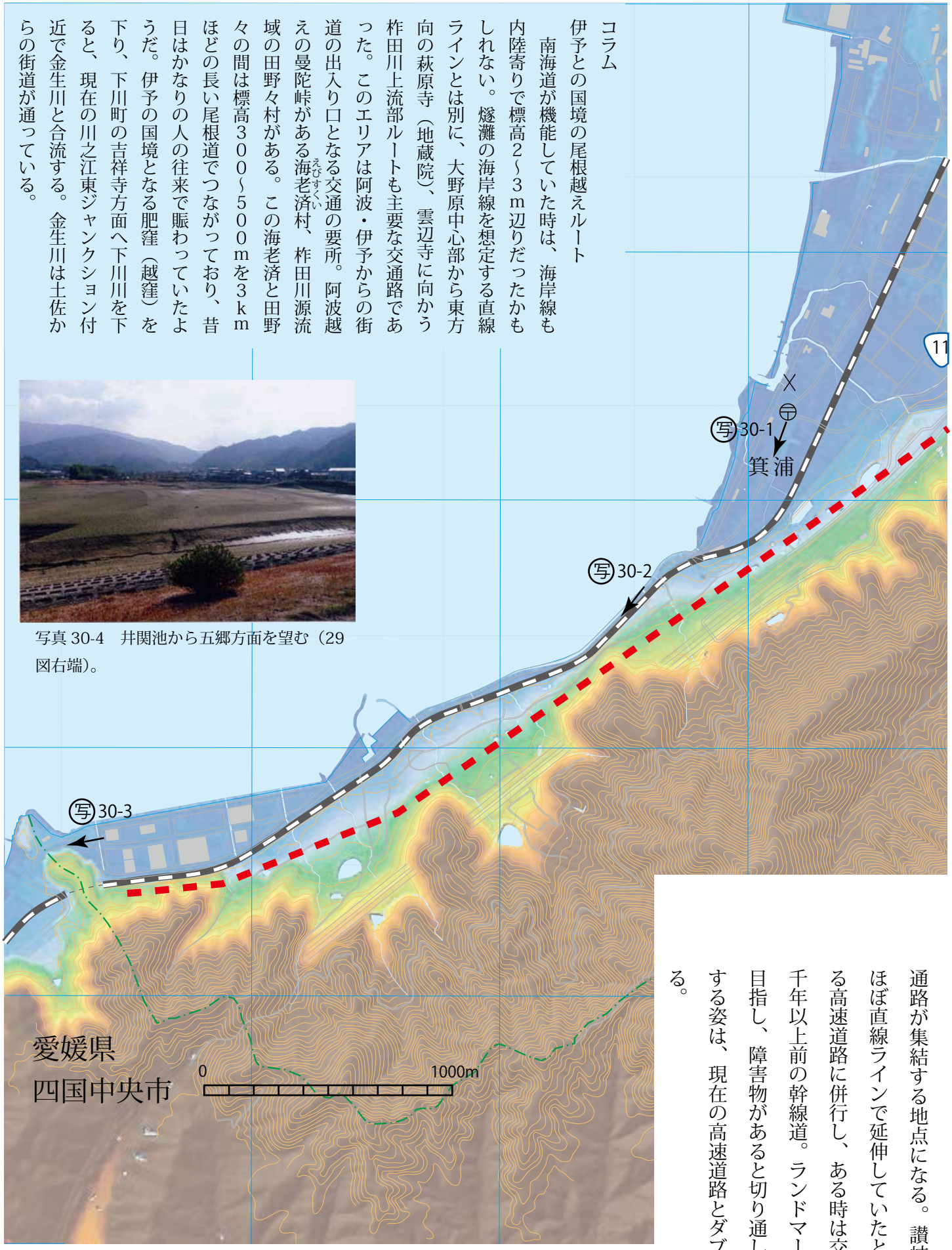
南海道が機能していた頃は、海岸線も現在より少し内陸に入っていたかも知れない。今も高速道路、ＪＲ予讃線、伊予街道、そして最も海岸近くを国道11号が走り、県境はこれら幹線交

コラム

伊予との国境の尾根越えルート

南海道が機能していた時は、海岸線も内陸寄りで標高2～3m辺りだったかもしれない。燧灘の海岸線を想定する直線ラインとは別に、大野原中心部から東方向の萩原寺（地蔵院）、雲辺寺に向かう柞田川上流部ルートも主要な交通路であった。このエリアは阿波・伊予からの街道の出入り口となる交通の要所。阿波越えの曼陀峠がある海老済（えびすくい）村、柞田川源流域の田野々村がある。この海老済と田野々の間は標高300～500mを3kmほどの長い尾根道でつながっており、昔日はかなりの人の往来で賑わっていたようだ。伊予の国境となる肥窪（越窪）を下り、下川町の吉祥寺方面へ下川川を下ると、現在の川之江東ジャンクション付近で金生川と合流する。金生川は土佐からの街道が通っている。

写真 30-4　井関池から五郷方面を望む（29図右端）。



通路が集結する地点になる。讃岐の南海道は、ほぼ直線ラインで延伸していたという。走行する高速道路に併行し、ある時は交差し延伸する千年以上前の幹線道。ランドマークとなる山を目指し、障害物があると切り通しを作って直進する姿は、現在の高速道路とダブって見えてくる。

讃岐国府跡探索事業とボランティア活動

平成21年度から始められた讃岐国府跡探索事業は、讃岐国府跡が所在したと考えられてきた坂出市府中町から、綾川河口にかけての平野部の地形・地名調査を行うとともに、国府跡を探る発掘調査を行うものである。調査は、県内から募集したボランティア調査員（ミステリーハンター）と共に行うことが大きな特色で、綾川下流域の地名、地形、水利等の基礎的な調査の成果によって、発掘調査地点を選定したり、発掘調査成果を評価したりする等、地域の歴史を様々な視点から掘り起こそうとするユニークな試みであった。

平成21年度は、坂出市府中町を対象に地名、地形、水利、石造物に関する調査を行うとともに、発掘調査を実施した。さらに香川県東部から古代官道である南海道を実地に歩く研修も実施され、次年度以降も継続された。平成22年度は、加茂町を中心に神谷町と高屋町の一部の調査を、平成23年度には林田町の調査を行った。平成24年度は、林田町の補足調査を行うとともに、これまでに実施された讃岐国府跡の既往の調査で出土した瓦の分布状況および官衙遺跡に多くみられる緑釉・灰釉陶器や硯等の分布状況の調査を実施した。さらに、当年度においては穴薬師（綾織塚）古墳の横穴式石室および墳丘の測量調査も実施した。ここまでの活動報告は『讃岐国府ミステリーハンターの参加活動』としてまとめられた。

平成25年度は、『ミステリーハンターのまち歩きガイド』を刊行した。ミステリーハンターが様々な活動に参加する中で、自ら発見し理解していった讃岐国府をめぐる歴史を、一般の方々にも興味を持ってもらおうと、埋蔵文化財センターが参加者を募りミステリーハンターがガイドをするという形で平成23年度からまち歩きを実施し、冊子は実際に案内する際の「あんちょこ」として使える体裁となっている。また、本冊子となった南海道調査を開始した。南海道調査の経過については前文に記したとおりである。

平成26年度からは鼓岡神社の所蔵する資料の調査を開始した。鼓岡神社は讃岐国府跡の傍らにあり、現在の国府跡をめぐる景観の中で重要な位置を占める。それとの関わりで国府顕彰に関わる資料が集まってきている。平成26・27年度は典籍、平成28年度は書画の目録化を行い、平成29年度は残る考古資料の目録化を行い、収集された全資料の目録化を完成させた。

9年間の実りある活動であったが、讃岐国府跡探索事業の発掘調査が平成29年度に終わるため、ミステリーハンターも解散することとなった。最後に活動をまとめた記録冊子の刊行及び埋蔵文化財センターでのパネル展示をミステリーハンター自ら行い、総括がなされる予定となっている。「讃岐国府の解明」という目標に向かう過程で生み出された活動成果そして形とならなかった熱意と思いが、次の世代につながり、新たな活動の生み出されんことを願っている。

このような調査活動のほかに、ボランティア調査員の自主的な研修として、他地域の国府および関連遺跡の見学旅行も行われ、平成21年度の平城京、纏向遺跡を皮切りに以後平成29年度まで出雲国府・藤原京・近江国府・播磨（布施駅家等の山陽道に係わる遺跡）・伯耆国府・美作国府・鬼ノ城（岡山県総社市）・永納城（愛媛県今治市）・高安城（大阪府八尾市ほか）等の見学を実施した。

参加ミステリーハンター名簿

（あいうえお順・＊は本冊子の編集委員）

＊安藤みどり・飯沼一広・＊池浦健一・礒村衛治・犬飼直美・
岩崎良則・垣本保・梶秀憲・金倉留美子・金倉修・＊葛原知子・
久保正志・＊合田武勝・甲野博・小西智都子・＊齋藤茂・坂下周市・
佐々木宏・佐々木方彦・住谷善慎・十河裕之・高橋利秋・高橋徳・
竹内博文・竹嶋真理・田村源一・中川俊彦・中島君子・仁井名詳浩
・野口美智子・長谷川宏・福家壽子・藤岡貴・藤田和康・古市政春・
＊古田博子・松尾伸・真鍋正彦・万野年紀・＊水谷耕造・水谷正裕・
宮本義彦・森野雅雄・横田寛・＊和田昭

讃岐の南海道を歩く

ミステリーハンター

平成 29 年 9 月 27 日発行

編集　ミステリーハンター「讃岐の南海道を歩く」編集委員
香川県埋蔵文化財センター

発行　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024　香川県坂出市府中町南谷 5001-4
電話　（0877）　48-2191（代表）

印刷　ナカハタ印刷株式会社